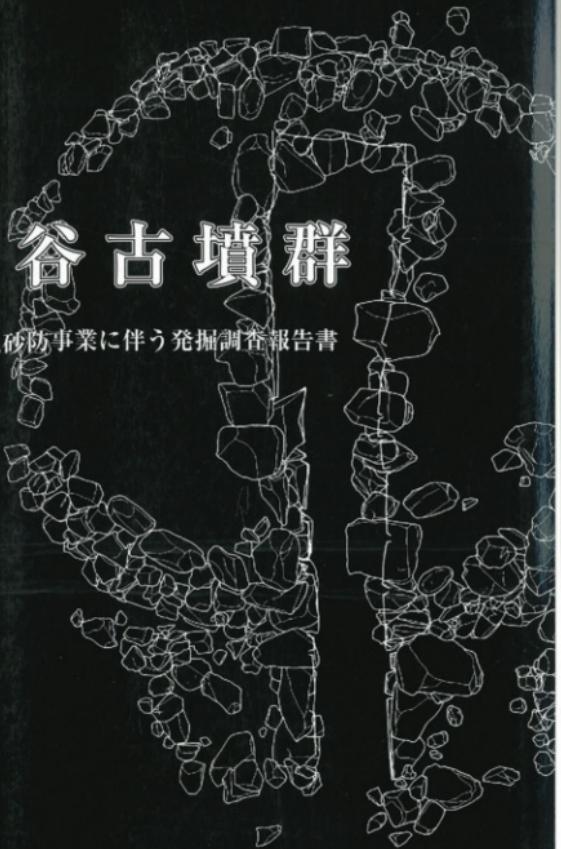


丹波市所在

野坂大谷古墳群

西大谷川災害関連緊急砂防事業に伴う発掘調査報告書



2005年3月

兵庫県教育委員会

丹波市所在

野坂大谷古墳群

西大谷川災害関連緊急砂防事業に伴う発掘調査報告書

2005年3月

兵庫県教育委員会



調査地区遠景（南から）



調査地区遠景（南西から）



A地区全景（南から）



A地区全景（南から）



12号墳



13号墳



26号墳



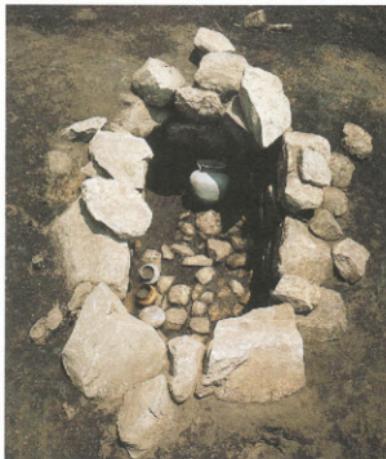
27号墳



28号墳



29号墳



30号墳



31号墳



22号墳

例　　言

1. 本書は、丹波市山南町野坂（発掘調査時には氷上郡山南町野坂）に所在する野坂大谷古墳群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、西大谷川災害関連緊急砂防事業に先立つもので、兵庫県丹波県民局柏原土木事務所の委託を受け、兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が平成12年度に分布調査・確認調査、平成13年度に全面調査を実施した。なお、全面調査については㈱マエダ建設、空中写真測量については㈱かんこうに作業委託を行った。
3. 整理作業は、平成15・16年度に兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所が同事務所にて実施した。なお、金属器の保存処理作業については㈲元興寺文化財研究所、遺物写真についてはタニグチフォトに委託した。
4. 調査は国土座標第V系を基準に実施した。なお調査時は日本測地系であったが、本報告ではそれを世界測地系に変換して提示した。
5. 標高は東京湾平均海水準を基準とした。
6. 本書の編集・執筆は大平茂・池田征弘が行った。
7. 本書にかかる遺物・図面・写真などは兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所魚住分館（明石市魚住町清水）に保管する。
8. 発掘調査および報告書作成にあたり、以下の方々の御援助・御指導・御教示を頂いた。記して深く感謝の意を表するものである。

河上邦彦、下山文隆、徳原多喜雄、菱田哲郎、半田　学、山田義三

目 次

第1章 調査の経緯	(池田)	
第1節 調査に至る経過		1
第2節 調査の経過		1
第3節 整理作業の経過		3
第2章 位置と環境	(池田)	4
第3章 調査の成果		
第1節 古墳群の概要	(池田)	7
第2節 確認調査	(池田)	9
第3節 A地区	(大平・池田)	13
1 12号墳		14
2 13号墳		26
3 26号墳		35
4 27号墳		38
5 28号墳		45
6 29号墳		55
7 30号墳		57
8 31号墳		59
9 仏堂跡		61
第4節 B地区	(大平・池田)	
1 22号墳		66
第4章 まとめ	(池田)	75
第1節 古墳出土の遺物について		75
第2節 古墳群について		78
第3節 仏堂跡について		82

挿 図 目 次

第1図 野坂大谷古墳群の位置	1	第34図 26号墳石室平面図・立面図	36
第2図 調査区配置図	2	第35図 26号墳石室遺物出土位置	37
第3図 周辺遺跡分布図	5	第36図 26号墳出土遺物	37
第4図 周辺地形図	7	第37図 27号墳墳丘（調査前）.....	39
第5図 野坂大谷古墳群全体図	8	第38図 27号墳墳丘（調査後）.....	39
第6図 確認調査出土遺物	10	第39図 27号墳墳丘（完掘後）.....	40
第7図 A地区調査前地形図	11	第40図 27号墳墳丘断面図	40
第8図 A地区調査後地形図	12	第41図 27号墳石室平面図・列石平面図・ 立面図	41
第9図 12号墳墳丘（調査前）.....	13	第42図 27号墳石室平面図・立面図	42
第10図 12号墳墳丘（調査後）.....	14	第43図 27号墳石室平面図	43
第11図 12号墳墳丘（完掘後）.....	15	第44図 27号墳石室遺物出土位置	43
第12図 12号墳墳丘断面図	16	第45図 27号墳出土遺物	44
第13図 12号墳石室平面図・列石平面図・ 立面図	17	第46図 28号墳墳丘（調査前）.....	46
第14図 12号墳石室平面図・立面図	18	第47図 28号墳墳丘（調査後）.....	46
第15図 12号墳石室遺物出土位置	19	第48図 28号墳墳丘（完掘後）.....	47
第16図 12号墳墳丘内土器	20	第49図 28号墳墳丘断面図	47
第17図 12号墳周溝内木棺	21	第50図 28号墳石室平面図・立面図	48
第18図 12号墳出土土器	22	第51図 28号墳石棺平面図・立面図	49
第19図 12号墳出土鉄器（1）.....	23	第52図 28号墳石室遺物出土位置	50
第20図 12号墳出土鉄器（2）.....	24	第53図 28号墳出土遺物	50
第21図 13号墳墳丘（調査前）.....	25	第54図 29号墳墳丘（調査前）.....	51
第22図 13号墳墳丘（調査後）.....	25	第55図 29号墳墳丘（調査後）.....	51
第23図 13号墳墳丘断面図	26	第56図 29号墳墳丘（完掘後）.....	52
第24図 13号墳石室平面図・列石平面図・ 立面図	27	第57図 29号墳墳丘断面図	52
第25図 13号墳石室平面図・立面図	28	第58図 29号墳石室平面図・列石平面図・ 立面図	53
第26図 13号墳石室遺物出土位置	29	第59図 29号墳石室平面図・立面図	54
第27図 13号墳出土土器	30	第60図 29号墳石室遺物出土位置	55
第28図 13号墳出土鉄器	32	第61図 29号墳出土遺物	55
第29図 26号墳墳丘（調査前）.....	33	第62図 30号墳墳丘（調査前）.....	56
第30図 26号墳墳丘（調査後）.....	33	第63図 30号墳墳丘（調査後）.....	56
第31図 26号墳墳丘（完掘後）.....	34	第64図 30号墳墳丘断面図	56
第32図 26号墳墳丘断面図	34	第65図 30号墳石室平面図・立面図	57
第33図 26号墳石室平面図・列石平面図・ 立面図	35	第66図 30号墳石室遺物出土位置	58
		第67図 30号墳出土遺物	58

第68図 31号墳墳丘（調査前）	60	第80図 22号墳墳丘（調査後）	68
第69図 31号墳墳丘（調査後）	60	第81図 22号墳墳丘（完掘後）	69
第70図 31号墳墳丘断面図	60	第82図 22号墳墳丘断面図	70
第71図 31号墳石室平面図・立面図	61	第83図 22号墳石室平面図、列石平面図・ 立面図	71
第72図 31号墳石室遺物出土位置	61	第84図 22号墳石室平面図・立面図	72
第73図 31号墳出土遺物	61	第85図 22号墳石室遺物出土位置	73
第74図 仏堂跡平面図	62	第86図 22号墳出土遺物	73
第75図 SB01平面図・断面図	63	第87図 出土須恵器の変遷 1	76
第76図 平坦面断面図	63	第88図 出土須恵器の変遷 2	77
第77図 石垣平面図・断面図	64	第89図 出土の金属製品	79
第78図 仏堂跡出土土器	65	第90図 石室のプラン	81
第79図 22号墳墳丘（調査前）	67		

写 真 図 版 目 次

卷頭図版 1	調査地区遠景（航空写真）	写真図版 9	26号墳 石室及び墳丘全景
	調査地区遠景（航空写真）		墳丘及び列石（東側）
卷頭図版 2	A地区全景（航空写真）		石室全景棺台
	A地区全景（航空写真）	写真図版10	26号墳 遺物出土状況
卷頭図版 3	12号墳		遺物出土状況
	13号墳		石室奥壁
卷頭図版 4	25号墳	写真図版11	26号墳 石室（東側壁）
	27号墳		石室（西側壁）
卷頭図版 5	28号墳		墳丘断面
	29号墳	写真図版12	27号墳 調査前
卷頭図版 6	30号墳		埋没状況
	31号墳		石室及び墳丘全景
	22号墳	写真図版13	27号墳 石室及び列石
写真図版 1	A地区 調査前		列石（西側）
	A地区 全景		列石（東側）
写真図版 2	12号墳 調査前	写真図版14	27号墳 石室閉塞状況
	石室及び墳丘全景		石室全景
	墳丘列石（東側）		石室奥壁
写真図版 3	12号墳 墳丘列石（西側）	写真図版15	27号墳 石室（東側壁）
	石室全景		石室（西側壁）
	石室奥壁部 遺物出土状況		遺物出土状況
写真図版 4	12号墳 石室及び 遺物出土状況	写真図版16	27号墳 遺物出土状況
	石室（右側壁）		墳丘断面
	石室（左側壁）		石室掘方
写真図版 5	12号墳 墳丘断面及び列石出土状況	写真図版17	28号墳 石室及び墳丘全景
	墳丘内 須恵器出土状況		石室閉塞状況
	周溝内検出 木棺墓		石室及び石棺
写真図版 6	13号墳 調査前	写真図版18	28号墳 遺物出土状況
	石室及び墳丘全景		石室奥壁
	石室及び墳丘列石		石室（東側壁）
写真図版 7	13号墳 墳丘列石（西側）	写真図版19	28号墳 石室（西側壁）
	墳丘列石（北側）		墳丘断面
	石室全景		36号墳 38号墳 39号墳 全景
写真図版 8	13号墳 石室奥壁部 遺物出土状況	写真図版20	29号墳 石室及び墳丘全景
	石室床面及び遺物出土状況		石室閉塞状況
	遺物出土状況		石室全景及び列石

写真図版21 29号墳 遺物出土状況	写真図版31 22号墳 墳丘断面
石室奥壁	作業風景
石室（東側壁）	地元中学生
写真図版22 29号墳 石室（西側壁）	トライヤー・ウイーク
墳丘断面	墳丘測量
石室据方	写真図版32 調査風景 調査風景
写真図版23 30号墳 全景	現地説明会
石室 遺物出土状況	県文化財審議会
石室北壁	考古部会委員視察
写真図版24 31号墳 石室全景 西から	写真図版33 確認トレンチ出土土器
南から	写真図版34 12号墳出土土器 1
東側壁	写真図版35 12号墳出土土器 2
写真図版25 仏堂跡 全景	写真図版36 12号墳出土金属製品 1
平坦地 造構検出状況	写真図版37 12号墳出土金属製品 2、 13号墳出土土器 1
平坦地 掘立柱建物跡	写真図版38 13号墳出土土器 2
写真図版26 仏堂跡 柱穴Pit1 柱穴Pit2	写真図版39 13号墳出土土器 3・金属製品
柱穴Pit3 柱穴Pit4	写真図版40 26号墳出土土器・金属製品
柱穴Pit5 柱穴Pit6	写真図版41 27号墳出土土器 1
斜面 石組（石垣）	写真図版42 27号墳出土土器 2・金属製品、 28号墳出土土器
写真図版27 22号墳 調査前	写真図版43 29号墳出土土器、30号墳出土土器 1
石室及び墳丘全景	写真図版44 30号墳出土土器 2、 31号墳出土金器製品
墳丘上層及び	写真図版45 仏堂跡出土土器
周溝断面（西側）	写真図版46 22号墳出土土器・金属製品
写真図版28 22号墳 墳丘列石（東側）	
墳丘搖列石（西側）	
墳丘搖列石（南側）	
写真図版29 22号墳 石室及び列石	
石室全景	
石室床面 遺物出土状況	
写真図版30 22号墳 石室奥壁	
石室（西側壁）	
石室（東側壁）	

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

野坂大谷古墳群が所在する谷には西大谷川が流れている。この西大谷川は、平成11年8月の集中豪雨により土石流災害を引き起こした。そこで、兵庫県柏原土木事務所では、西大谷川災害関連緊急砂防事業として西大谷川上流に砂防ダムの設置を計画した。兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所ではこの計画を受けて、平成11年度～平成13年度に分布調査・確認調査・本発掘調査を実施した。

第2節 調査の経過

1 分布調査

平成12年2月に砂防ダム設置予定地を中心とした約20000m²について分布調査（遺跡調査番号990310）を実施した。その結果、既に『山南町遺跡地図』に記載されている野坂大谷古墳群の17基に加えて、さらに8基の古墳の存在を確認した。

2 確認調査

平成12年7月に確認調査（遺跡調査番号2000172）を実施した。工事範囲に含まれる5基（9・11・14・19・25号墳）についてトレンチを8カ所設定した（トレンチ1～8）。調査を行った結果、そのうちの4基（11・14・19・25号墳）が横穴式石室墳で、9号墳が古墳でないことが確認された（トレンチ1～3）。

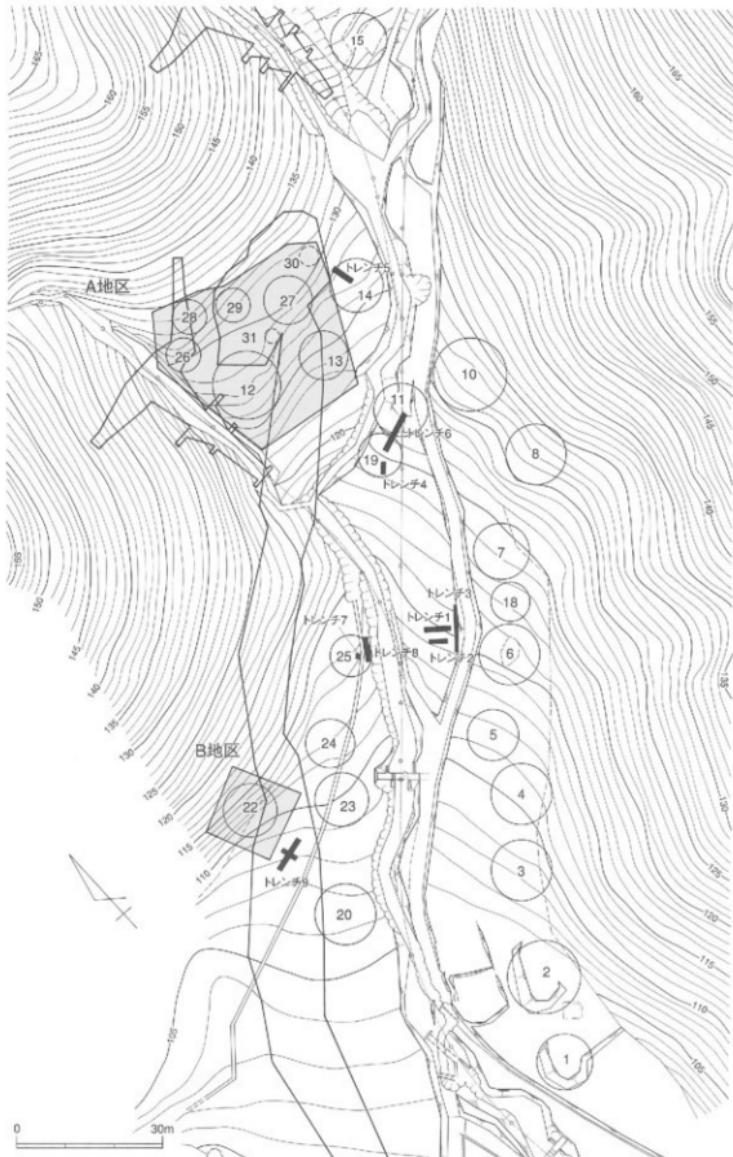
その後、工事計画の変更が生じたため、さらに平成13年3月に確認調査（遺跡調査番号2000379）を実施した。作業ヤード・工事用道路の設置のため12・13・21・22号墳が損壊を受けることとなった。ただし、12・13・22号墳は古墳であることが明白なためトレンチは設定せず、21号墳についてのみトレン



第1図 野坂大谷古墳群の位置

第1表 調査一覧

遺跡調査番号	調査の種別	調査担当者	調査期間	調査面積
990310	分布調査	多賀茂治	平成12年2月14日	20000m ²
2000172	確認調査	甲斐昭光	平成12年7月10日・11日	30m ²
2000379	確認調査	山田清朝	平成13年3月21日	12.5m ²
2001009	本発掘調査	大平茂・池田征弘	平成13年5月18日～9月21日	1332m ²



第2図 調査区配置図

チ（トレンチ9）を設定した。その結果、21号墳は古墳でないことが判明した。

3 本発掘調査

確認調査の結果、工事によって損壊を受ける可能性のある12・13・22号墳について、本発掘調査を行うこととなった。平成13年5月に調査を開始し、調査を進める過程において調査区内で古墳2基（27・31号墳）、建物跡1棟、調査区外で古墳4基（26・28・29・30号墳）が新たに存在することが明らかとなり、調査範囲を北側に拡張した。調査は、人力にて表土を掘削し、墳丘・石室やその他の遺構の検出をおこなった。墳丘・石室などの記録作成の後は墳丘を除去し、石室掘方・地山面の検出を行った。ただし、13号墳については墳丘列石の残存状況が良好であり、作業ヤード造成の影響も少ないため墳丘の除去は行わなかった。検出された遺構については写真の撮影（航空写真を含む）、実測図（空中写真測量）の作成などを行った。

調査期間中にはトライヤーのウイーク中学生受け入れ（6月6日～7日）、地元説明会（7月7日）、現地説明会（8月25日）を実施した。

なお、調査にあたっては調査補助員西本寿子、竹本正昭、平田美幸、谷後恒美、藤井伊都子、前田親審の協力を得た。

第3節 整理作業の経過

出土品整理作業は平成15・16年度に行った。調査で出土した遺物（281入りコンテナにして25箱・金属器42点）について、当事務所にて接合・復元、実測、拓本・写真撮影などを行い、遺構図および遺物実測図についてトレース・レイアウトを行った。

作業は整理保存班長浜誠司（平成15年度）、村上泰樹（平成16年度）の補助のもとに普及活用班大平茂・調査第2班池田征弘が担当した。金属器の保存処理作業については財元興寺文化財研究所、写真撮影についてはタニグチフォトに委託した。

また、上記の作業にあたっては下記嘱託員の協力を得た。

増田 麻子 佐々木智子 柏原 美音 吉田 優子 篠子ふさ恵 関田 美穂
友久 伸子 石野 照代 中田 明美 西野 淳子 蔵 煙子 小野 潤子
大仁 克子 奥野 政子 柏木 明子

第2章 位置と環境

丹波市山南町は兵庫県中東部にあたり、旧丹波国の一都である。氷上郡内では最南部に位置し、南側は播磨の多可郡黒田庄町と接している。山南町は西部に加古川が南北に、東部に加古川の支流である篠山川が東西に流れている。このことは加古川を通じた南北の交通路の途上であるとともに、篠山川を通じる東西への交通路の分岐点ということができる。

山南町は基本的には丘陵に挟まれた河川を中心とした谷地形であるが、比較的大きな支流によって形成された広い微高地が井原と谷川に存在し、町内のなかでは中心的な位置を占めている。

縄文時代

井原遺跡群や梶遺跡二重堂地区（47）でわずかにその存在がしられるのみで、詳細はよくわからない。梶遺跡二重堂地区では石棒が採集されている。

弥生時代

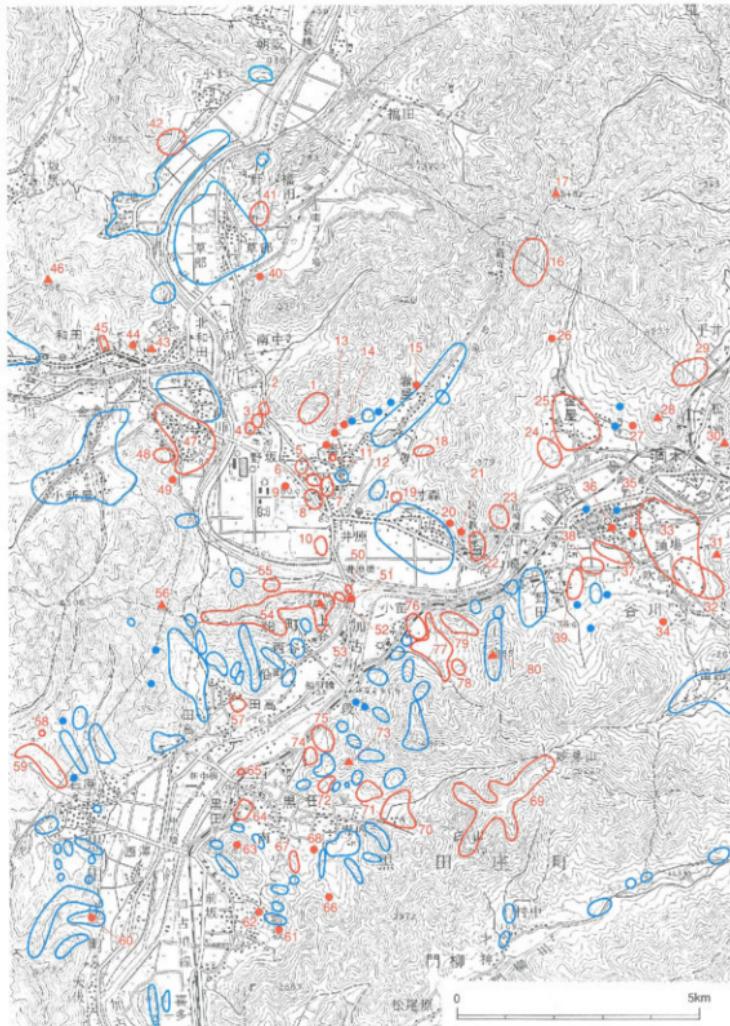
黒田庄町黒田庄中学校遺跡（64）では弥生時代前期の土器が出土している。以後井原至山遺跡でも中期以降の土器が出土しているが、明瞭に遺跡の存在が知られるのは弥生時代後期からである。谷川踊場遺跡（33）や黒田庄町黒田庄中学校遺跡では堅穴住居跡が検出されている。谷川踊場遺跡（33）で検出された後期末頃の住居跡からは柳葉式鉄錐、銅錐、装飾器台などが出土している。また谷川踊場遺跡では中期の周溝墓群が検出されている。検出された14基のはほとんどは方形と考えられるものだが、1基のみは明瞭な円形である。後期には丸山墳墓群（5）のように丘陵上での造墓が認められるようになる。

古墳時代

野坂の独立丘陵上に位置する丸山古墳群は古墳時代前期から後期まで継続して築造された古墳群である。丸山1号墳は全長48mの前方後円墳で、竪穴式石室・箱式石棺・鰐口形木棺を埋葬施設としている。

第2表 遺跡地図地名表

1 野坂大谷古墳群	21 才曲り古墳	41 大路山古墳群	61 畠谷古墳
2 香守寺山古墳	22 円心教智意山古墳	42 山出古墳群	62 黒田庄古墳群前板地区
3 ニシノカジ古墳群	23 茅ノ木谷古墳群	43 山瀬城跡	63 前山山頂古墳
4 尾坂古墳群	24 塚ノ尼古墳群	44 山瀬古墳	64 黒田庄中学校遺跡
5 丸山古墳群・丸山墳墓群	25 金屋遺跡	45 鶴牧畠代官所跡	65 黒田・備江遺跡
6 井原散在地	26 金屋一塚	46 岩尾城跡	66 黒田庄古墳群黒田谷地区
7 法賀ノ經散在地	27 アブ山古墳	47 梶遺跡(二重堂地区)	67 古の東古墳群1号墳
8 高良田遺跡	28 天委城跡	48 梶古墳群	68 黒田庄古墳群黒田大山谷池地区
9 丸山経塚	29 久勞の松古墳群	49 梶古墳群	69 白山開達遺跡群
10 井原高反遺跡	30 池ノ谷半計羅殿跡	50 井原至山遺跡	70 黒田・北山遺跡(寺内地区)A
11 稲荷殿後守屋敷跡	31 杉ヶ谷城跡	51 井原至山古墳	71 黒田・北山遺跡
12 鬼神山塚	32 谷川東山古墳群	52 穂山古墳南支群	72 中池群集墳1号墳
13 犬八千子古墳	33 谷川鹿鳴遺跡	53 至山城跡址	73 黒田城主郭部
14 八千子古墳	34 丹波剣文鏡出土地	54 至山古墳群	74 黒田群東境南支群
15 イシヤク古墳	35 谷川牛出遺跡	55 桐至山古墳群	75 黒田群集墳(小松山古墳)
16 石原大谷櫻遺跡	36 谷川穂田家陣跡	56 大谷城跡	76 小舟北山古墳群
17 岩屋城跡	37 谷川六反坪遺跡	57 田寮遺跡	77 小舟北山古墳群
18 片山古墳群南支群	38 谷川池/下遺跡	58 石原経塚	78 小舟岩尾南古墳群
19 村森西窓跡(伝宗太郎焼窓跡)	39 谷川野田古墳群	59 得笠寺、建仁寺跡	79 小舟岩尾北古墳群
20 村森東窓跡(村森窓跡)	40 草部経塚	60 上大伏中長墓	80 大森山城跡



第3図 周辺遺跡分布図

後円部の主体部からは大量の鉄製品のほか、鏡、車輪石などなどが出土している。畿内勢力の強い影響を受けた加古川流域最北部の前方後円墳である。丸山2号墳は18m×16mの方墳で、竪穴式石室を埋葬施設としている。3・4号墳は6世紀初め頃の木棺を埋葬施設とする古墳である。

その他に野坂周辺では、番守寺山古墳（2）が箱式石棺を埋葬主体とする古墳である。同様のものは黒田庄町小苗岩尾北古墳群（79）でも検出されている。また、荒神古墳（12）ではかつて埴輪が出土したと伝えられている。

今回調査した野坂大谷古墳群を始めとして、丘陵部には数多くの横穴式石室墳が存在している。井原至山古墳（51）は6世紀前半の横穴式石室である。石室の平面形が方形に近いものと考えられ、この地域での横穴式石室の導入状況を示している。梶1号墳（48）も石室の平面形が正方形に近く、同様のものと考えられる。谷川東山古墳群では6・15号墳（32）が調査されている。いずれも7世紀前半の横穴式石室墳である。また谷川野田古墳群（39）は野坂大谷古墳群と並ぶほどの古墳が残しているが、2号墳は石棚を有している。

この時期の集落跡ははっきりしないが、谷川池ノ下遺跡（38）や黒田庄町黒田庄中学校遺跡などで堅穴住居跡が検出されている。また、黒田庄古窯址群（62・68）では須恵器の生産が行われている。

古代

古代においてこの地域は「丹波国水上郡井原郷」にあたると考えられている。井原散布地（6）では軒丸瓦・丸瓦・平瓦が採集され、軒丸瓦は加古川市の野口廃寺と同范のものである。法ヶ原經散布地（7）では流路より人形が出土している。谷川生田遺跡（35）では三彩小壺と和同開塚が出土している。平安時代には丘陵部での宗教活動が活発となる。野坂大谷古墳群（1）では仏堂跡と考えられる建物跡が検出されている。石龕寺の奥の院である岩屋大槽谷遺跡（16）では平安時代～中世にかけての土器が大量に散布している。その他に黒田庄町得笠寺・建仁寺跡（59）など丘陵部での寺院の存在がみられ、丸山経塚（9）、草部経塚（40）、石原経塚（58）など平安時代後期に造られた経塚などが顕著である。また、古墳時代より引き続いて黒田庄古窯址群では須恵器の生産が行われているが、南へその位置を移動している。

中世

この地域には皇室（室町院）領井原庄や栗作庄などの存在が知られている。中世遺跡の調査はほとんどないが谷川遺跡群では中世の開発状況を知ることができる。石龕寺は觀応の擾乱時に足利義詮が置かれたとされる名刹であるが、往時の状況は大槽谷遺跡（16）での土器の散布状況にも見て取れる。

参考文献

水上郡教育委員会『水上郡埋蔵文化財分布調査報告書（5）』1998年

水上郡教育委員会『水上郡埋蔵文化財調査概要報告書V』2003年

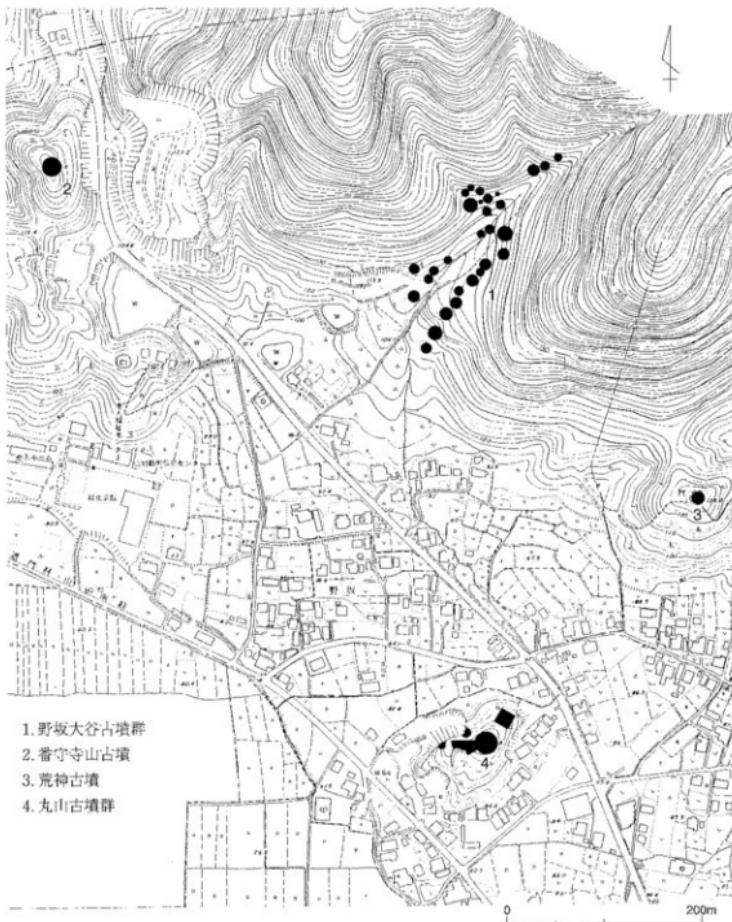
黒田庄町教育委員会『兵庫県多可郡黒田庄町遺跡分布地図』1997年

神崎勝『加古川流域の地域史』1989年

第3章 調査の成果

第1節 野坂大谷古墳群の概要

野坂大谷古墳群は、山南町中央部西よりを国道175号沿いに黒田庄町の町境から北へ約1.5kmに位置し、野坂集落北東に広がる丘陵の裾部（標高100～150m）に立地している。古墳群は西大谷川によって形成された谷に沿って位置し、各古墳は谷の両側に密集して造られている。



第4図 周辺地形図



第5図 野坂大谷古墳群全体図

現在29基（9・21号墳は確認調査の結果古墳でないことが判明したため欠番）の存在を確認している。西大谷川には北側に2本の支流があり、西大谷川とこの支流を境として4つのグループに分けることができる。

西大谷川の左岸に位置するのは1～8・10・11・18・19号墳の12基である（D群）。谷に沿って1列に並ぶように配置され、見かけ上さらに4つ程度のグループに分かれそうである。

西大谷川の右岸で東側の支流の東側に位置するのは15～17号墳の3基である（C群）。

西大谷川の右岸で西側の支流の東側に位置するのは12～14・26～31号墳の9基である（A群）。

西大谷川の右岸で西側の支流の西側には20・22～25号墳が属している（B群）。B群では、昭和40年代には谷の入口側の国道より100m程度東側の谷の入り口まで複数基の古墳が存在し、須恵器片が採集されている。

第2節 確認調査

ここでは、確認調査（遺跡調査番号20000172）を実施し、古墳であることを確認したもの、計画変更により本発掘調査に至らなかった11・14・19・25号墳について取り上げる。確認調査は本発掘調査に移行することを前提に、古墳であることの有無・古墳の範囲を確定することを目的としたため、各古墳の情報は十分なものではない。

1 11号墳

D群に属する古墳で、10号墳と19号墳の間に位置する。

（1）遺構（第2図）

11号墳の東側から11号墳の西半にかけてトレンチ6を設定した。トレンチ6の東半で南北方向に開口する石室の南壁を確認した。南壁は3段以上残存している。石室内の床から約20cm程度浮いた状態で、須恵器杯身が2点正位で出土している。

墳丘はトレンチ北東隅を中心とする直径約9.0mと考えられるが、北側は流路により流失し、東側は里塗が重なっている。墳丘の高さは約2mで、盛土は黒ボク土を主体としている。

（2）遺物（第6図）

1、2は須恵器杯身である。石室内から出土した。1は口縁部が内湾しながら高く立ち上がり、端部は丸みをもっている。底部は平らで、ヘラケズリが施されている。2は口縁部が内湾しながら立ち上がり、端部は丸みをもっている。体部はやや直線的である。底部は平らで、ヘラ切り未調整である。底部内面には当て具痕が残っている。

2 14号墳

A群に属する古墳で、群中で最も東側に位置する。直径約8.0m、高さ約2.0mの円墳である。

（1）遺構（第2図）

墳頂部から北側に向かってトレンチ5を設定した。約50cm掘り下げを行い、トレンチ南端部で石室奥壁と思われる石材と表土を確認した。トレンチ中央の表土から古墳時代の須恵器壺の破片と平安時代の須恵器碗が出土している。

(2) 遺物 (第6図)

3、4は須恵器碗である。4は比較的高い平高台をもち、底部は糸切りである。A地区仏堂跡に関連する遺物と考えられる。

3 19号墳

D群に属する古墳で、11号墳の南西に位置する。直径約8m、高さ約1.5mの円墳である。

(1) 遺構 (第2図)

墳頂部から南西に向かってトレーナー4を設定し、墳丘西部にトレーナー6を設定した。

トレーナー4では黒ボク層中に50cm角の標が堆積し、地表下約70cmの位置で縄の間から須恵器が出土した。須恵器蓋杯は杯身2点・杯蓋1点が出土し、口縁部を上にした状態で身・蓋・身の順で重なっていた。その西に接して瓶が正位で出土している。出土遺物が原位置を保っている可能性があるため調査はこれまでに止められた。この部分については石室内なのか墳丘部なのかは判別しがたい。

トレーナー6の西半では地表下30cmで地山に達し、盛土は確認できなかった。墳丘の下方にのみ盛土が施された可能性がある。

(2) 遺物 (第6図)

5は須恵器杯蓋である。口縁部内面に凹みを残している。天井部外面はヘラケズリが施され、天井部内面に当て具痕を残している。6、7は須恵器杯身である。6は口縁部が内済しながら高く立ち上がり、端部は丸みをもっている。底部は丸みをもち、外側はヘラケズリが施され、内面にはわずかに当て具痕が残存している。7は口縁部がやや直線気味に高く立ち上がり、端部は丸みをもっている。底部は平らで、ヘラケズリが施されている。8は須恵器瓶である。頸部は太く、波状文の幅も太い。

4 25号墳

B群に属する古墳で、その最西に位置している。

11号墳



14号墳



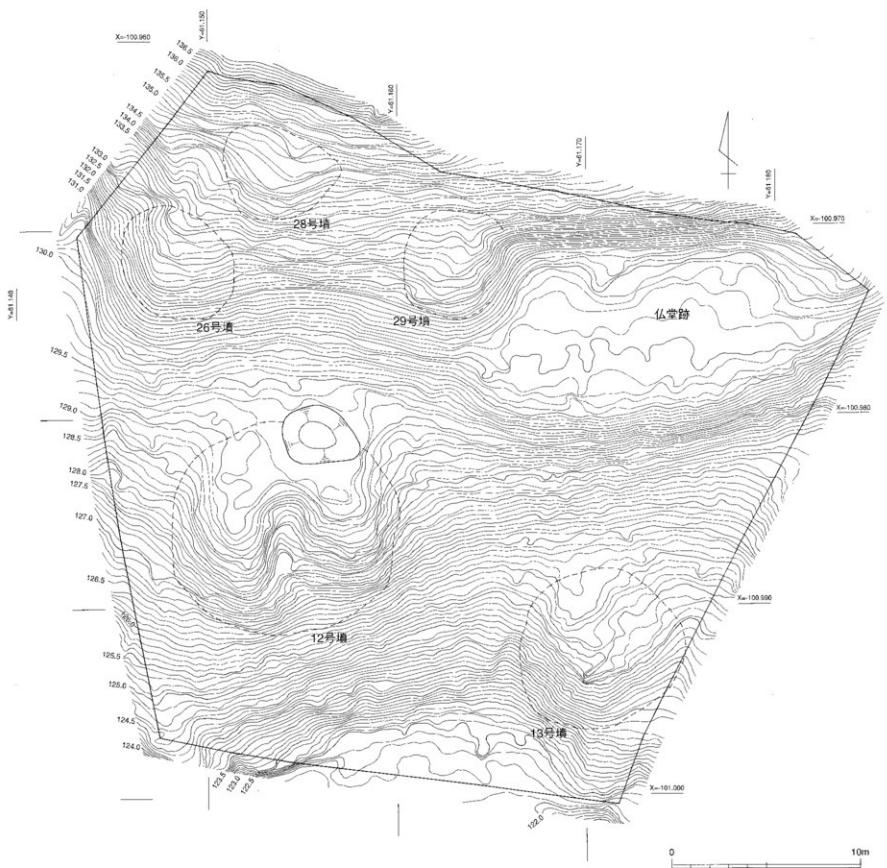
19号墳



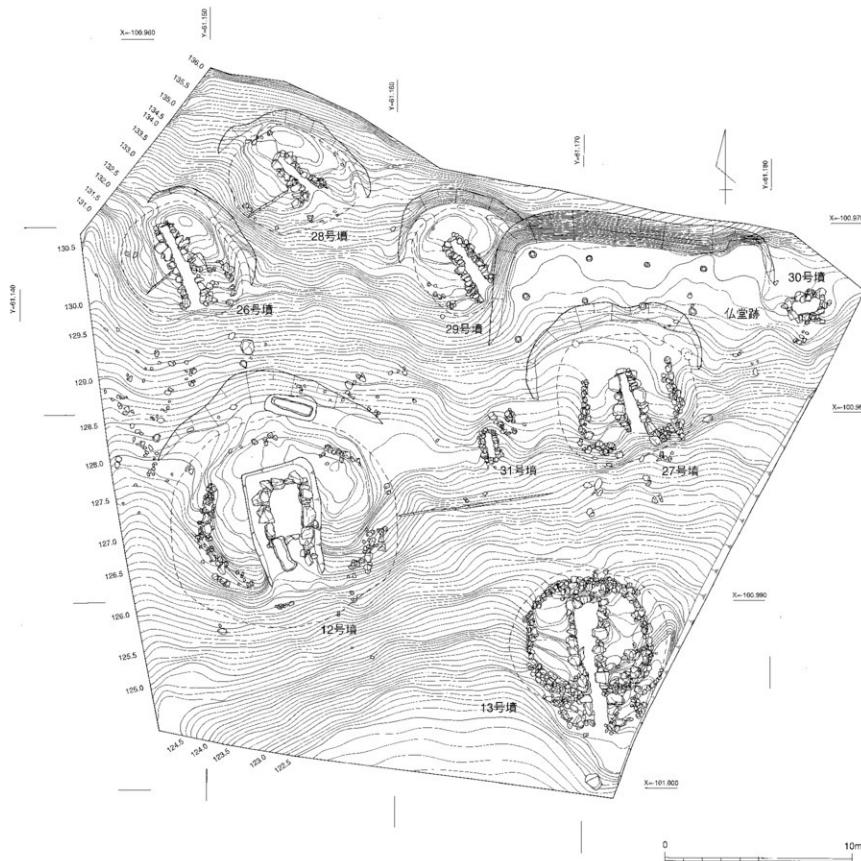
25号墳



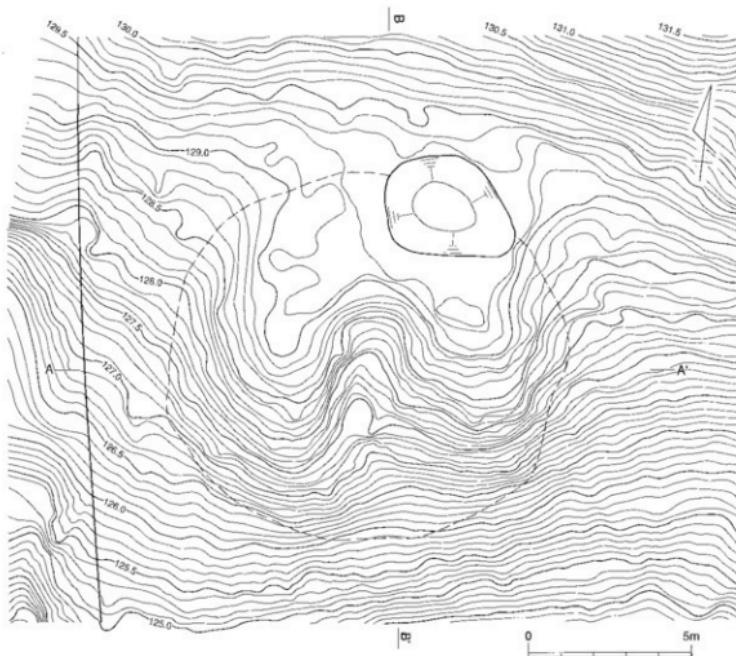
第6図 確認調査出土遺物



第7図 A地区調査前地形図



第8図 A地区調査後地形図



第9図 12号墳墳丘（調査前）

（1）遺構（第2図）

墳頂部にトレンチ7と南半部の縁面にトレンチ8を設定した。

トレンチ7は、天井石と考えられる50×80cmの岩の南東側に設定し、側壁の両壁を検出した。幅は40cmと狭小で、28号墳と同様な小型の横穴式石室と考えられる。

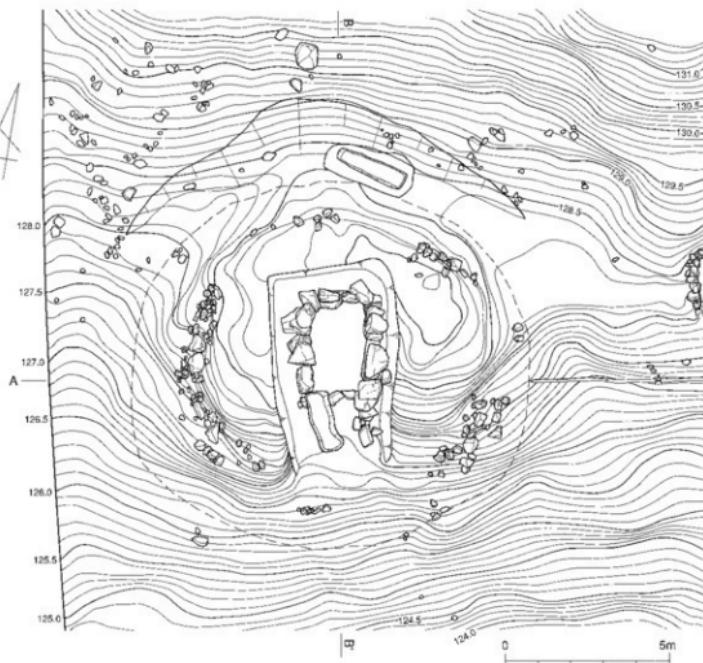
トレンチ8では盛土が黒ボク土を主体とすることが確認された。

（2）遺物（第6図）

9は須恵器長頭壺の頭部である。トレンチ8から出土した。

第3節 A地区の調査

A地区はA群に設定した調査区である。A群に属する古墳のうち14号墳を除く8基の古墳（12・13・26～31号墳）について本発掘調査をおこなった。A群の古墳は西大谷川右岸の中ほどに位置し、東と南側を西大谷川、西側を西側の支流に取り囲まれ、北側は丘陵尾根が延び、その丘陵尾根の裾のやや緩やかな斜面に位置している。緩斜面の低い部分に規模の大きい12・13・14号墳が横に並び、27・30・31号墳がその上に位置している。26・28・29号墳は、12・27号墳の上のややきつい斜面に位置している。12・



第10図 12号墳墳丘（調査後）

13・26～29号墳の6基が横穴式石室を主体部とし、30・31号墳の2基は小型の竪穴式石室を内部主体部としている。その他に、27号墳の直上で平安時代の仏堂跡を検出した。

1 12号墳

12号墳は、この支群の南西部に位置（傾斜度 20° ）する。斜面上方に馬蹄形周溝を巡らした円墳で、横穴式石室を内蔵し、支群中最大の規模を誇っている。

（1）遺構（第9～17図）

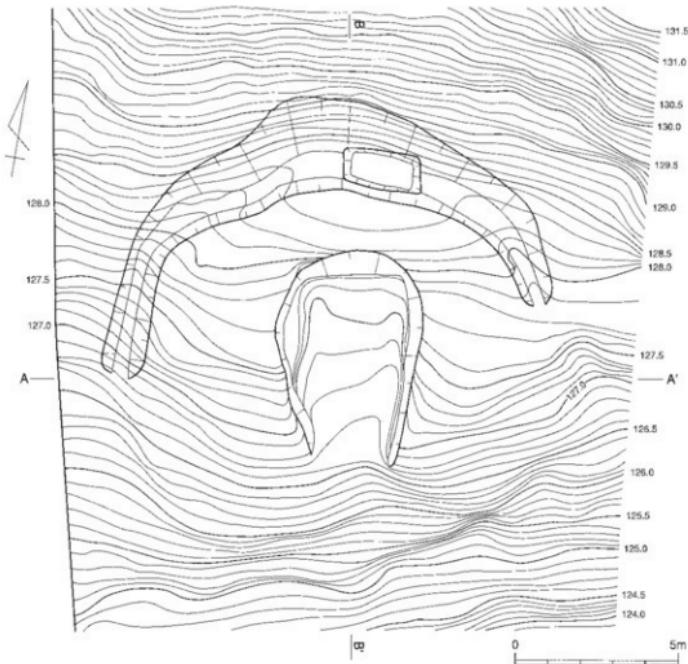
調査前の状況は、墳頂部が天井石等石材の抜き取りを受けて大きく破壊され、石室内にかなりの石材と流入土が落ち込んでいた。

墳丘と外部施設

墳丘規模は、南北11.20m・東西12.20mを測る。石室床面からの高さは現状で約2m、盛土の高さは最大部で約1.30mを測り、黒ボクを含む黒褐色土及び黄褐色土を積み上げている。

また、墳丘下段位と墳丘縁には列石が認められ、特に石室入り口から廻る下段位のものは径60cm前後の石材を含み全周させていたと考えられる。盛土の流失を防ぐ目的で、設置したものであろう。

次に、墳丘の北側に位置している馬蹄形周溝は最大深さ1.10m・最大幅2.50mで、断面は幅広いU字形を呈している。



第11図 12号墳墳丘（完掘後）

墳丘の築造は、まず大きさに合わせ旧地表等を剥ぎ取り、古墳の中心となる石室掘方内の黄色土で整地し、石室基底石を設置後、側壁の構築に伴って、斜面上方に周溝を設け、そこから出る黒ボク土を含む黒褐色土及び黄褐色土を交互に積み上げている。また、列石を石室構築の途中に墳丘下段位の両側面に巡らせ、さらに石室構築完了後墳丘側部にも間隔をおいた列石を配している。

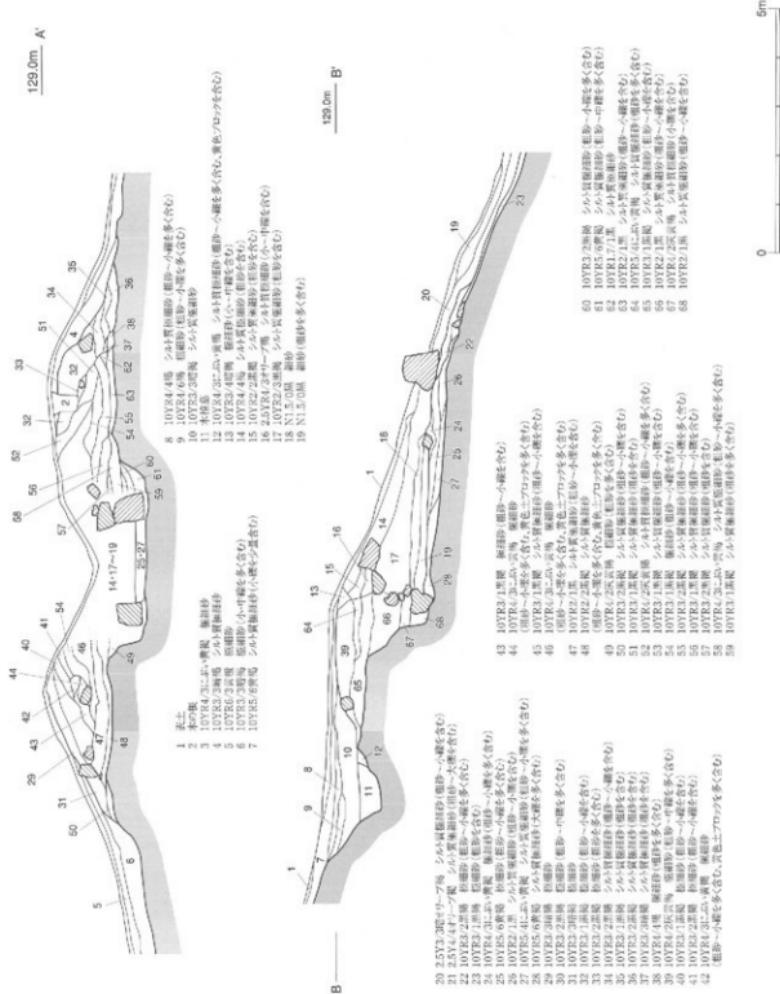
埋葬施設

埋葬施設は横穴式石室と、周溝内に木棺の直葬がある。

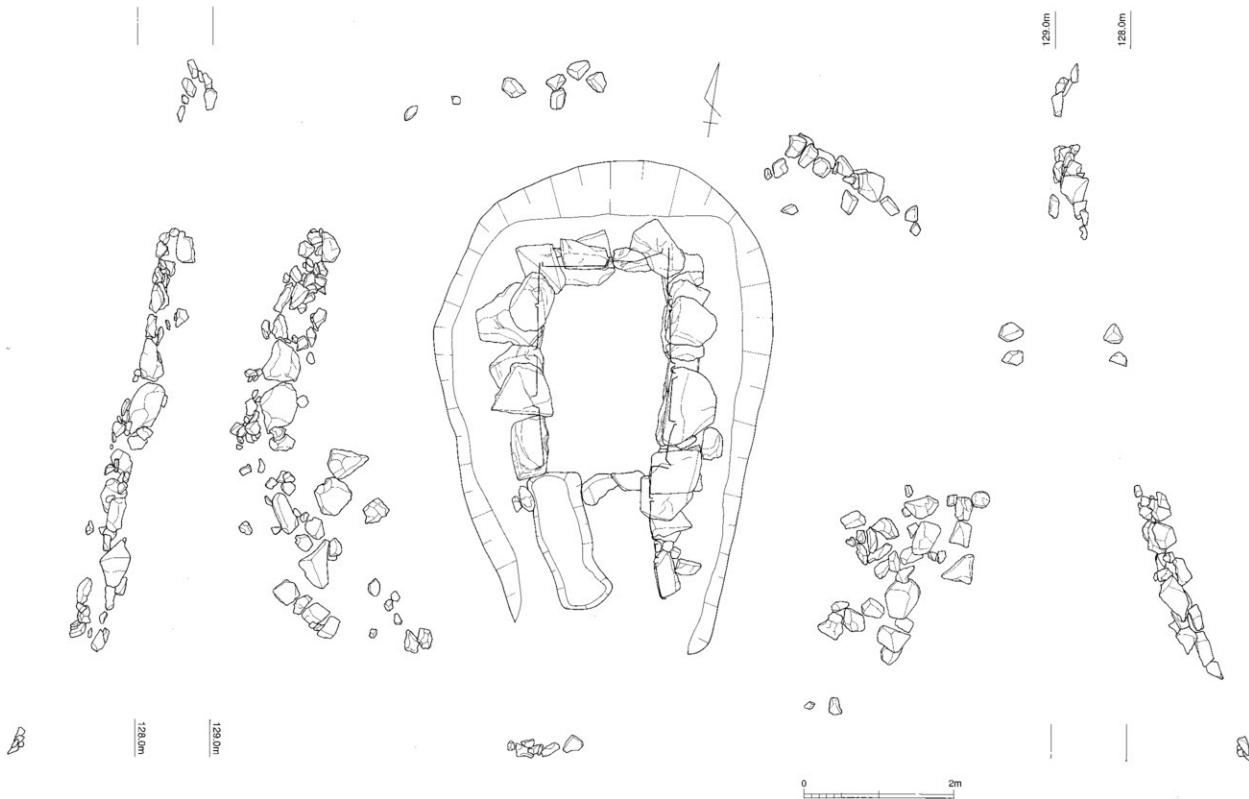
横穴式石室は主軸をN9°Wにとり、南方に向開口している。石室掘方の規模は南北6.50m、東西4.00mを測る。床面の平面形態は両袖式であり、全長4.40m、玄室長2.70m、同最大幅1.80mである。石材は3段ないし4段分（残りの良い所で高さ1.45m）から上と右側壁祐石から前方が抜き取られていた。石材の積み方では、奥壁の基底石は縦長と横長に2石を組み合わせている。両側壁は、横長置きを基本に積み、狭道部に向かって低くなるよう横に凹地を通している。玄室の残りの良い所では、持ち送りが認められる。

また、玄室床面には径25cm以下の礫を敷き、狭道部との間には櫛石が置かれている。なお、玄室内は一部礫敷きが無くなる等攪乱を受け、閉塞石も残存していなかった。

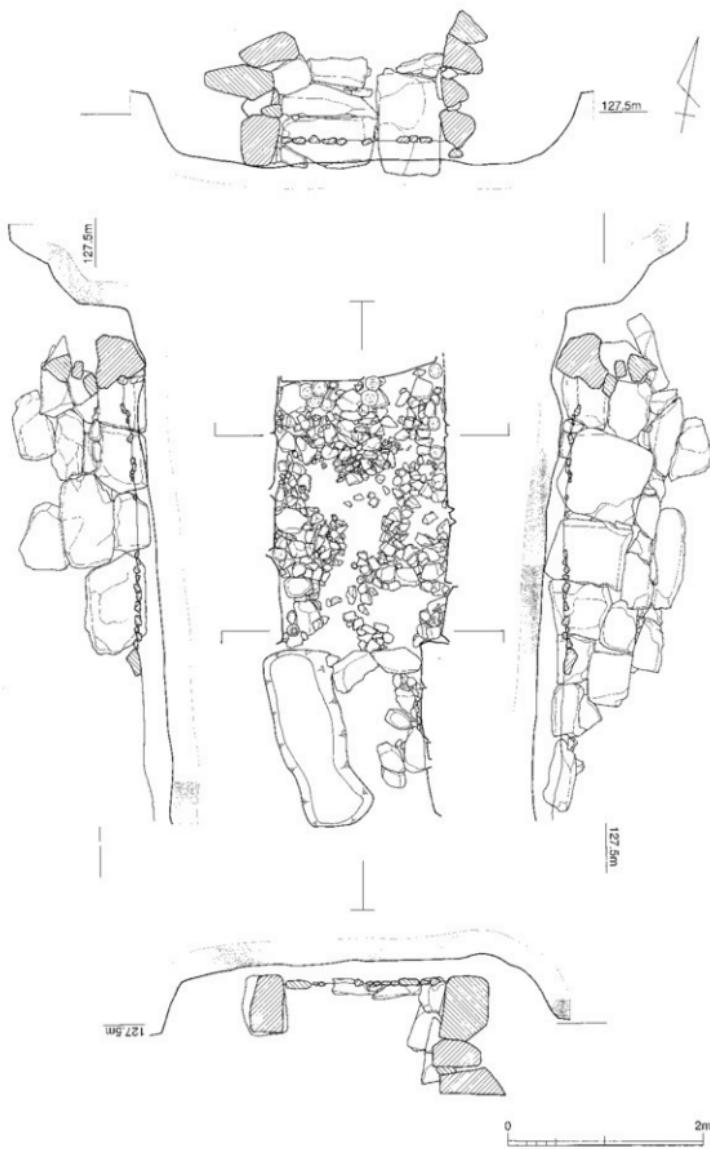
木棺墓は石室中軸線の少し東側、周溝の最大幅の位置に、主軸をN75°Wにとり右室と直交に近い形



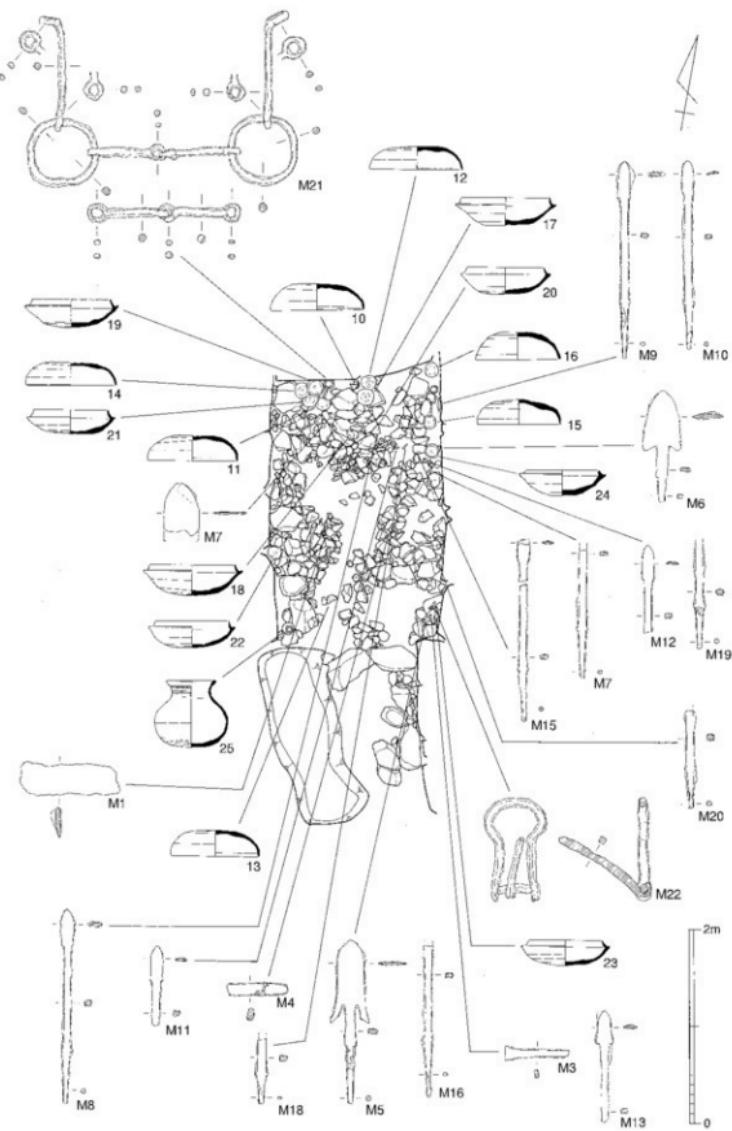
第12図 12号堤壁断面図



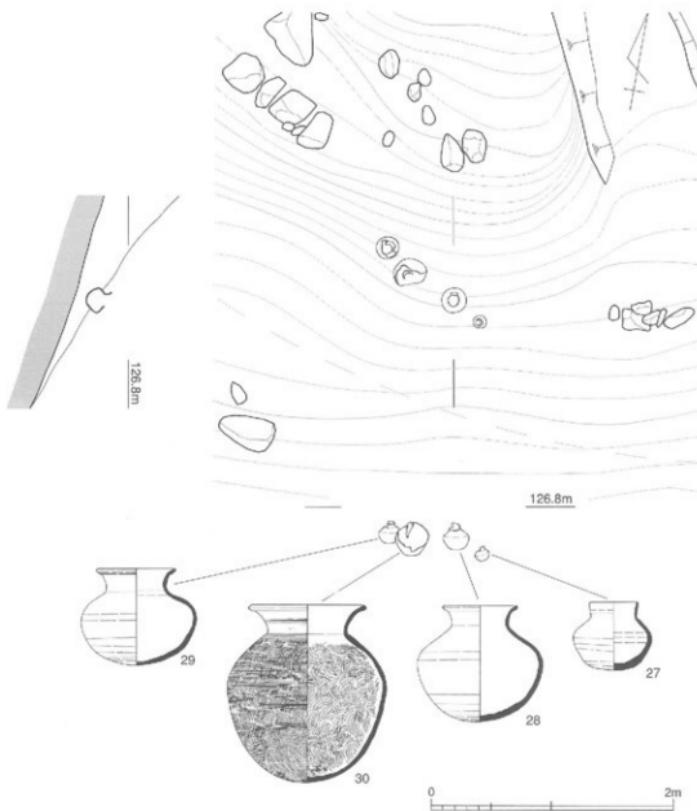
第13図 12号墳石室平面図、列石平面図・立面図



第14図 12号墳石室平面図・立面図



第15図 12号墳石室遺物出土位置



第16図 12号墳埴丘内土器

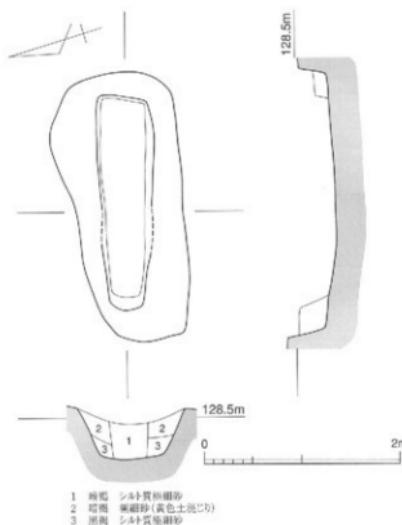
で発見した。墓域の規模は、全長2.80m・最大幅1.20m・深さ0.50mである。木棺は組合せ式で、全長2.15m・最大幅0.50mを測る。木棺蓋から遺物は出土していない。

(2) 遺物（第18~20図）

遺物は石室内・埴丘・埴丘前面流土から出土した。

石室の玄室内は中央部を中心にかなり荒らされており、壁際である程度良好に遺物が残存していた。奥壁付近では初葬時の須恵器蓋杯や鉄製素環板付樽、玄室内左壁際では追葬時の須恵器蓋杯、玄室左半から鉄鎌・刀子・鉢具などの鉄製品、玄室内右壁際の袖付近では須恵器広口壺が出土している。鉄刀の断片は玄室中央付近の盗掘を受けた部分の周辺から出土している。

埴丘の東南側の盛土内からは壺3個と甕1個が1列に並んで置かれていた。埴丘構築の初期に置かれた



第17図 12号墳周溝内木棺

底部はヘラ切り未調整である。24の口縁部は基部が太く、短く立ち上がる。底部はヘラ切り後粗いナデが施されている。

26は須恵器短頸壺である。底部は回転ヘラケズリが施されている。

27は須恵器直口壺である。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。

25・28・29は須恵器広口壺である。25は小型の広口壺である。口縁端部は方形で、頸部にカキ目が施されている。底部は手持ちヘラケズリのち軽くナデが施されている。28は口縁端部が丸く外側に折り曲げたような形で、体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。29は口縁端部外面に低い突帯をもち、体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。

30は須恵器壺である。口縁端部は断面方形である。体部外面は平行タタキが施され、体部の上・中位と頭部の一部分にカキ目が施されている。

金属製品

全て鉄製品で、刀・刀子・鉄鎌・簪・釦具などがある。いずれも玄室内から出土している

M1・2は鉄刀である。同一個体の可能性が高い。M1は刀身部、M2は茎部の先端である。茎尻は隣接尻で、釘穴が1つある。側面に木質が付着している。

M3・4は刀子である。いずれも茎部のみの破片である。M3は両開で、茎部が細い。M4は栗尻で、木質が付着している。

たものと考えられる。

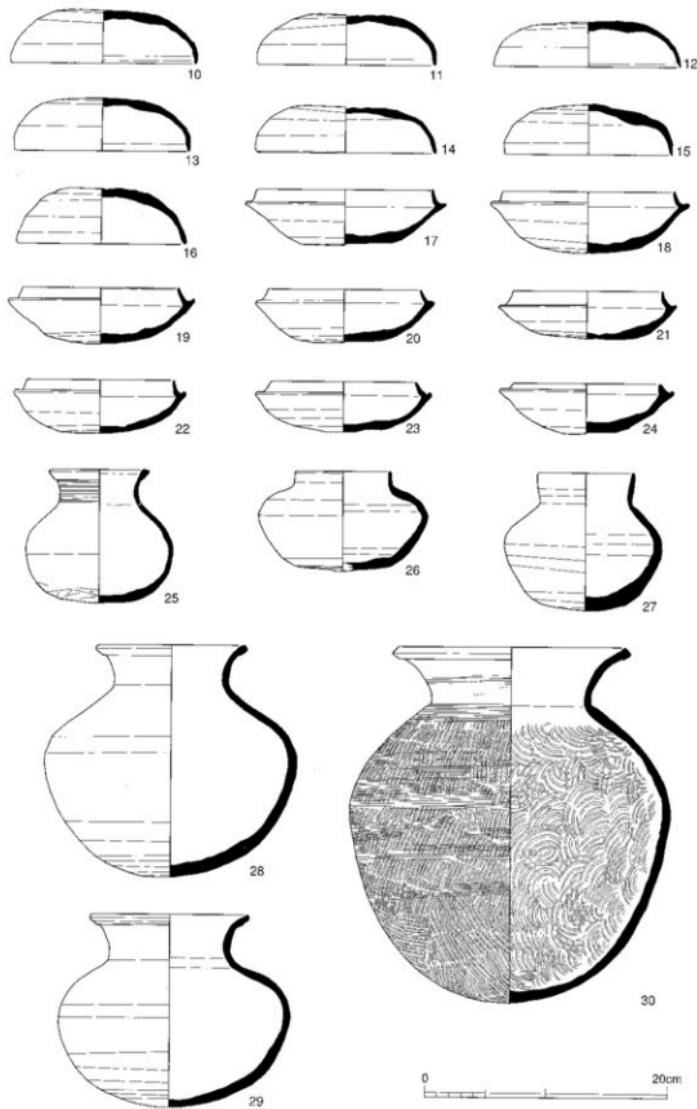
墳丘前面の土からは須恵器蓋杯・壺・提瓶などの破片が出土しているが、良好な個体は存在しない。

土器

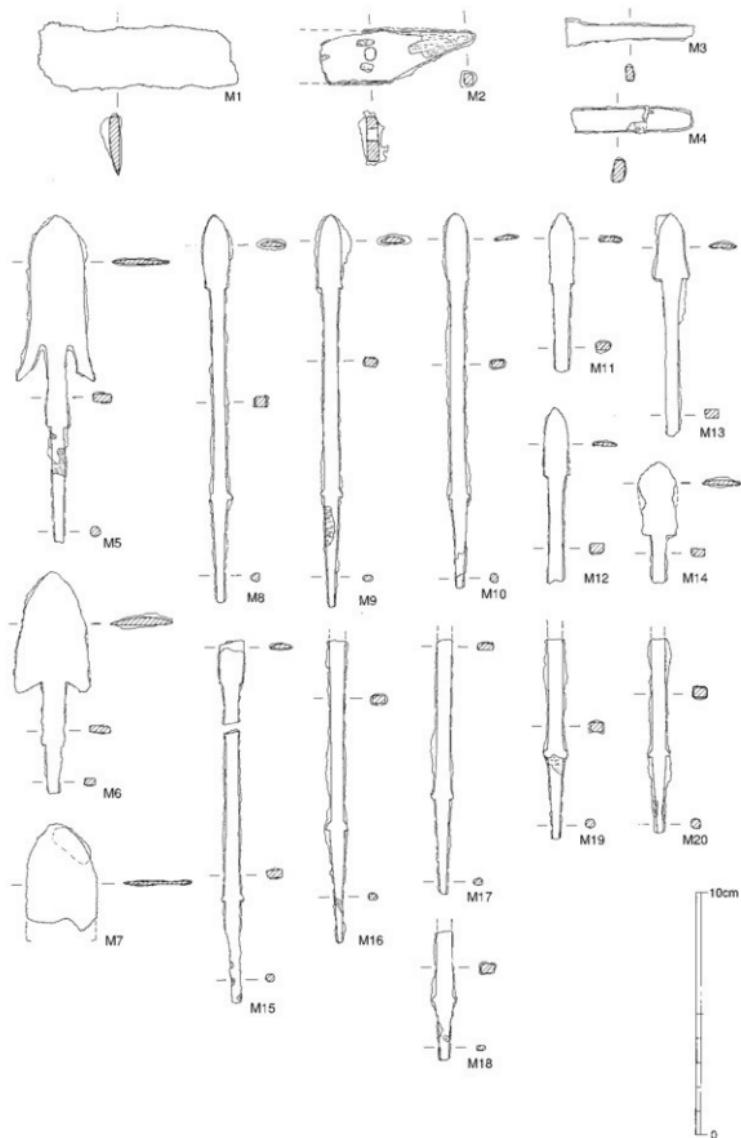
須恵器蓋杯（10～24）・短頸壺（26）・直口壺（27）・広口壺（25・28・29）・壺（30）などがある。10～25が石室床面、26が石室埋土、27～30が墳丘盛土内から出土した。

10～16は須恵器蓋杯である。10～13は口縁部内面に凹みをもち、天井部外面は回転ヘラケズリが施されている。14～16は口縁部内面に凹みをもたない。14・15の天井部外面は回転ヘラケズリが施されているが、中心にまで及んでいない。16の天井部外面はヘラ切り未調整である。13の内面には當て具痕が残存している。

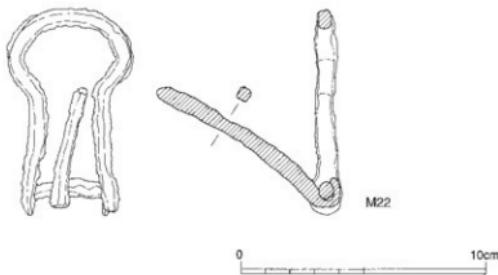
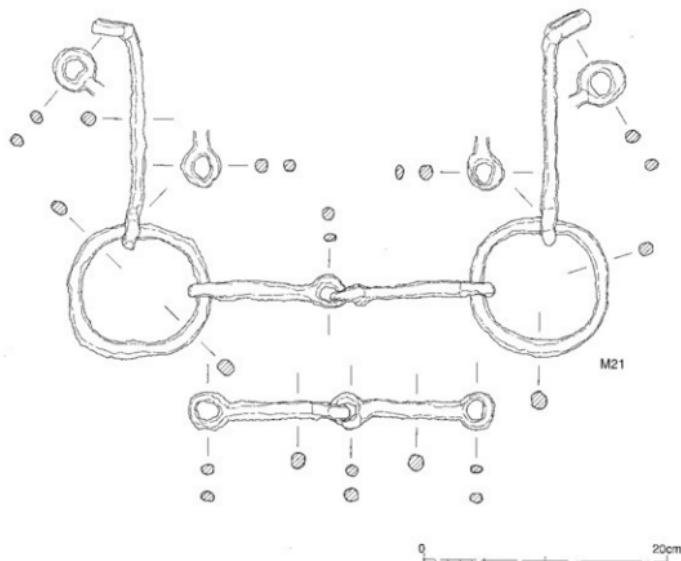
17～24は須恵器杯身である。17～22は外反しながら立ち上がる口縁をもち、底部に回転ヘラケズリが施されている。23は外反しながら立ち上がる口縁をもち、



第18図 12号墳出土土器



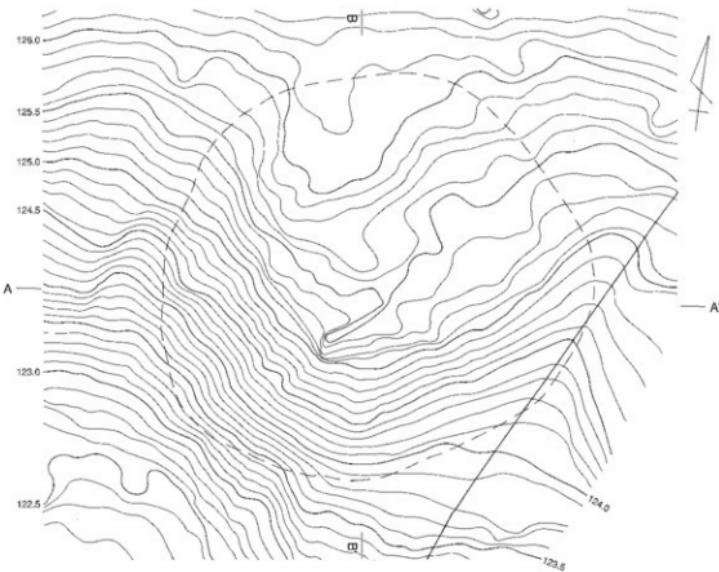
第19図 12号墳出土鉄器（1）



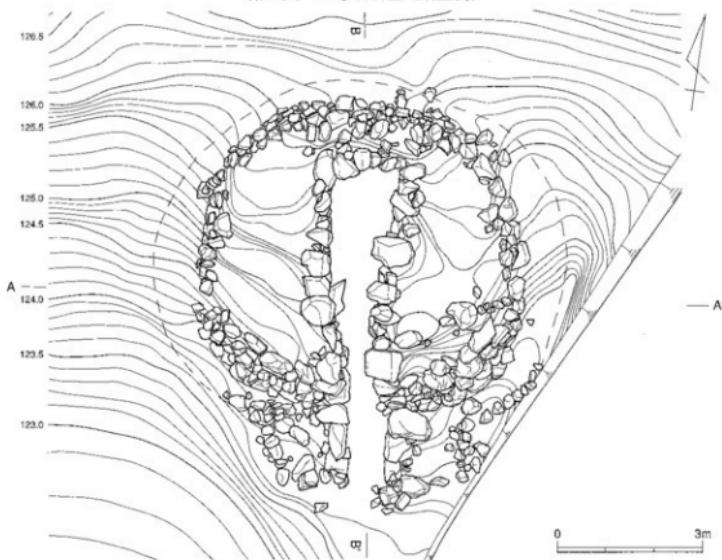
第20図 12号墳出土鉄器（2）

M 5～18は鉄鎌である。M 5～7は平根浜柄葉式の鉄鎌である。関部は角関である。M 6はM 5に比べて鎌身・頸部・逆刃が短い。M 8～20は長頸柳葉式の鉄鎌である。全長は16cm程度で、鎌身長は2.7～3.0cmのものが多く、M 13・14はやや長さが短く幅広である。関部は棘状関で、茎部長は4.2cm～4.5cm程度のものが多い。

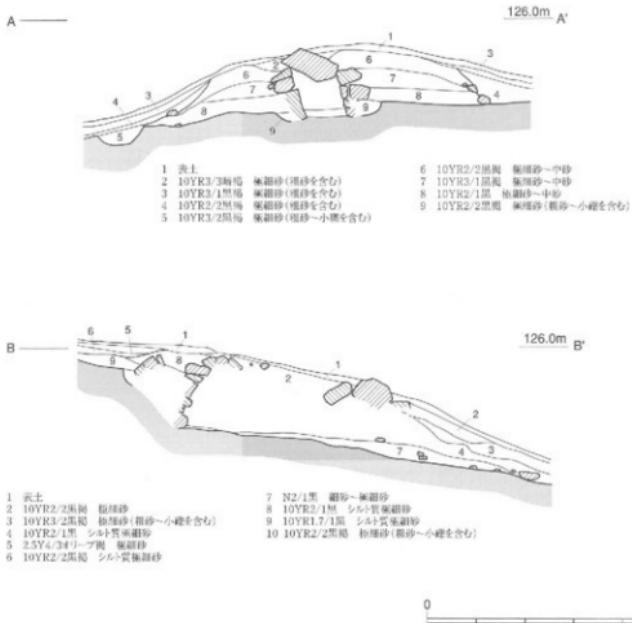
M21は素環鏡板付鎌である。素環の鏡板には立闇をもたず、11.5cm×11.0cmの正円に近い梢円形である。柄は銜先環の小小さい小環柄である。銜と引手は別途で、引手はくの字引手である。



第21図 13号墳墳丘（調査前）



第22図 13号墳墳丘（調査後）



第23図 13号墳墳丘断面図

M22は鉗具である。逆凸字形の縁金の下端に横棒を挟み、その横棒に刺金を巻き付けている。

2 13号墳

13号墳は12号墳の東南東約15mに位置（傾斜度 20° ）する円墳で、横穴式石室を内蔵している。特に、開口部側に峠道を延長させた突出部（造り出し）を持つ形態と、墳丘保護のためほぼ前面を覆った貼り石状の列石が注目される。

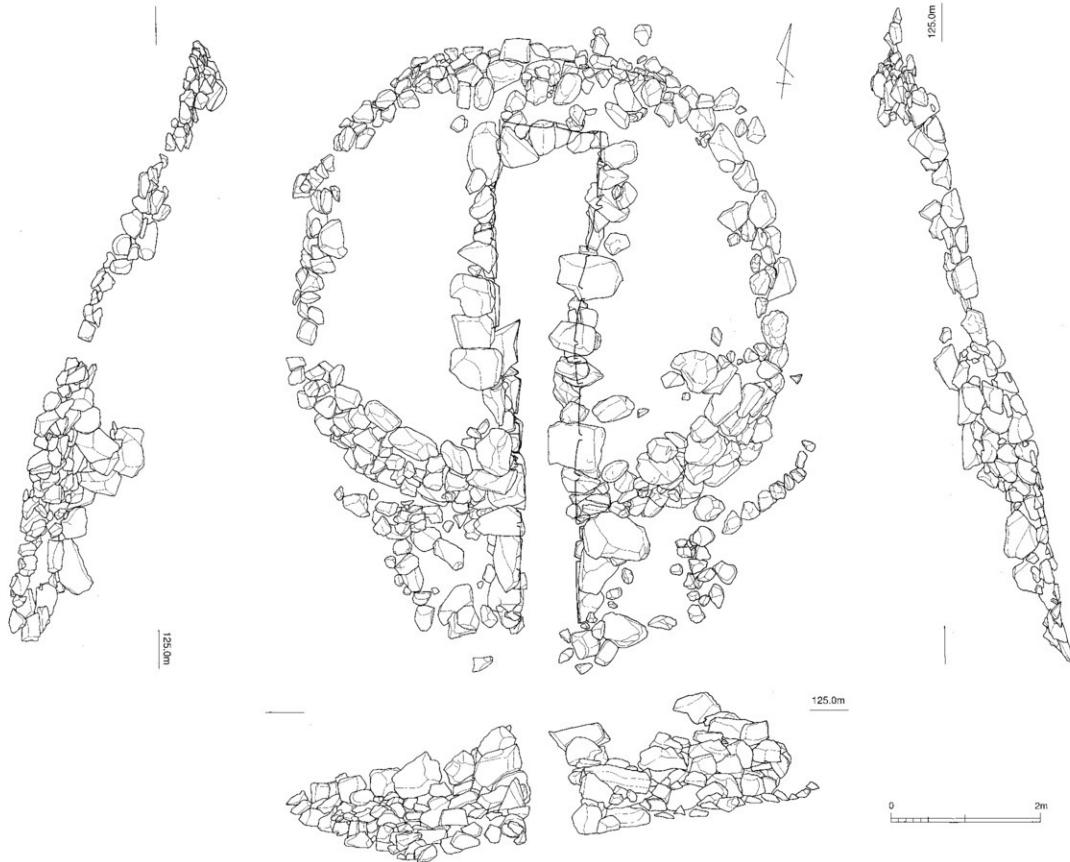
(1) 遺構（第21～26図）

調査前の状況は、墳丘頂部の盛土が流出した程度で、石室を始め比較的の良い古墳に見えた。ただし、斜面上方に本来あるはずの周溝は全く認められなかった。

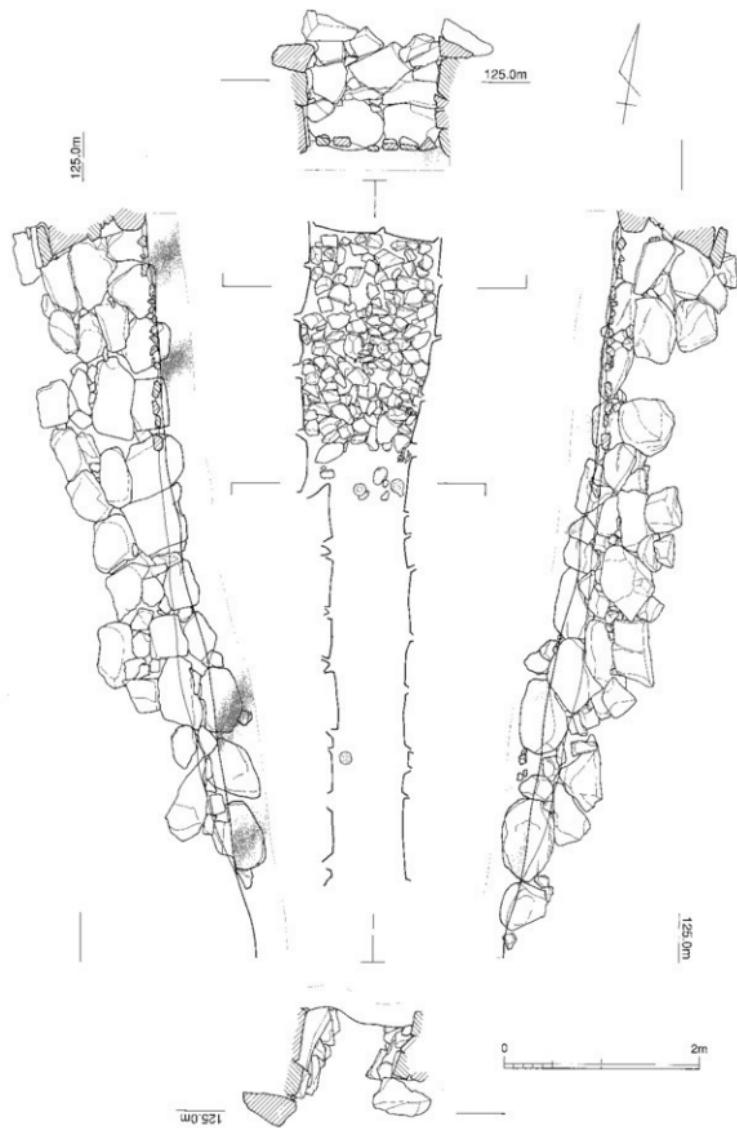
墳丘と外部施設

墳丘規模は、南北7.20m・東西8.50mを測る。石室床面からの高さは現状で1.30m、盛土の高さは最大部で1.20mを測り、黒ボクを多く含む黒褐色土を積み上げている。

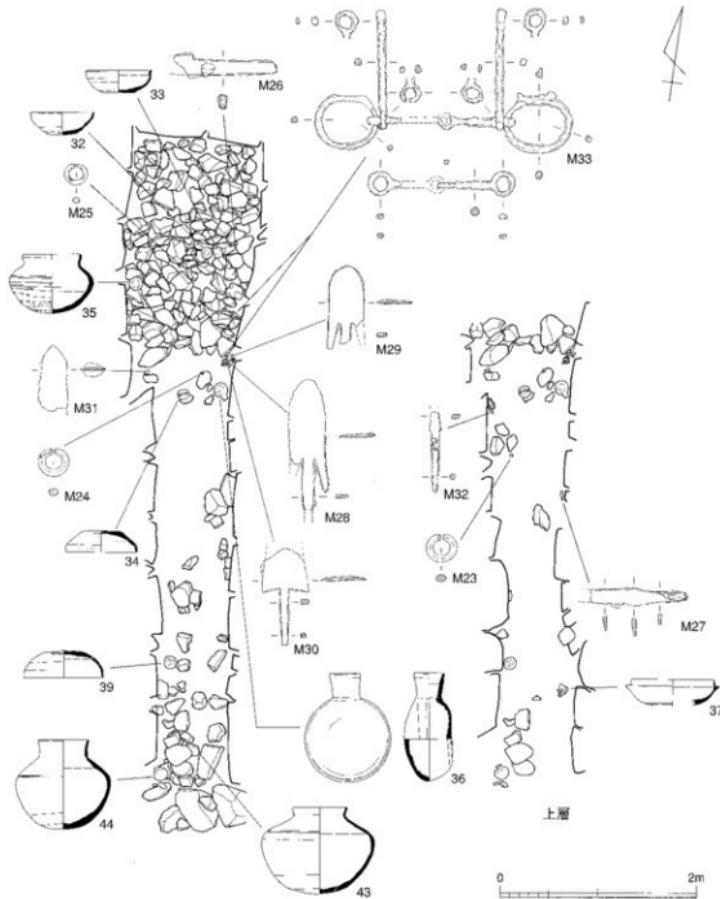
また、列石は墳丘下段位を石室入口から全周する形で巡らせている。特に、墳丘正面（前面）側の列石は高さ1m程度積まれ、最上部には径50cm前後の大きな石材を置いている。そして、峠道部を前方へ抜張した突出部を設け（追葬時にか）、ここにも列石を巡らせ、一見帆立貝形古墳造り出しの様相を呈している。さらに、前面側のみ墳丘裾部に列石を配している。墳丘下段位のものは天井石架構後、盛土



第24図 13号填石室平面図、列石平面図・立面図



第25図 13号墳石室平面図・立面図



第26図 13号埴石室遺物出土位置

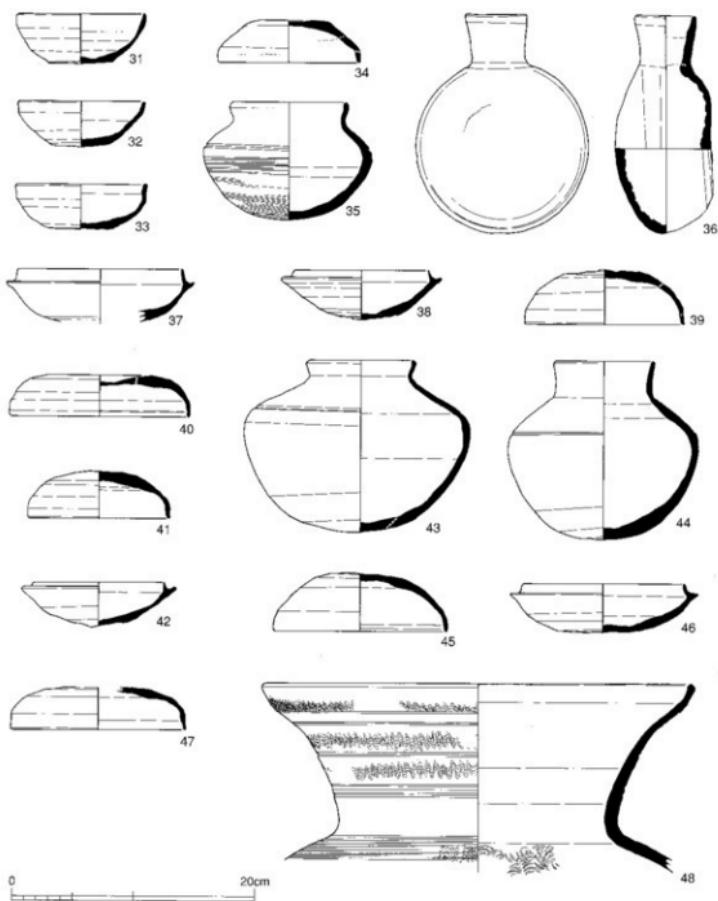
を土留めする目的で設けたと考えられ、黒ボクで縮まりのない埴瓦全面を覆っていた可能性もある。

次に、斜面上方に造られる周溝は、仏龕築造時に削平されたためが明瞭でない。

墳丘築成の単位は、地山土を削りこんだ黄褐色土が認められずいわゆる黒ボクが大半であり、うまく確認できなかった（この古墳については、最終的に破壊されないと判明したので、列石を除去せずトレンチのみの断ち割りとしている）。

埋葬施設

埋葬施設は、横穴式石室のみである。横穴式石室は主軸をN 8°Wにとり、南方向に開口している。



第27図 13号墳出土土器

床面の平面形態は右片袖式であり、突出部まで含め全長6.80m、玄室長2.70m、同最大幅1.35mを測る。石材は概ね3段～4段分残存していた（残りの良い所で床面から高さ1.30m）が、土圧の影響のか少し西側へ傾いている。

石材の積み方では、奥壁基底石は横長に2石を据え、それより上段は規則性が認められない。両側石は、右袖石を縦長に置く以外、横長に据えることを基本としている。

また、玄室床面には径25cm未満の礫が敷かれており、羨道部は床面が上下2面に分かれる。閉塞石が、

当初の羨道入口から突出部にかけて若干認められた。なお、突出部は天井石を置いた形跡が無く、前庭部と考えられる。

(2) 遺物 (第27・28図)

遺物は石室・前面列石・墳丘の背後から出土した。

石室内は追葬及びあるいは盜掘を受けている。玄室の遺物は追葬時の遺物と考えられ、玄室中央部で須恵器杯、耳環、刀子が、玄室右壁際で須恵器短頸壺、玄室左壁際で鉄製素環鏡板付簪・鉄鎌が出土している。玄室の奥壁側の約半分からは遺物が出土していない。羨道部は追葬もしくは盜掘時の床面が上層にあり、玄門部から羨道にかけては追葬・盜掘時の遺物が残されていると考えられる。須恵器蓋杯・提瓶・耳環・刀子・鉄鎌などが出土している。羨門部の閉塞石の部分では須恵器短頸壺が出土している。

前面の内側列石の部分では列石上に須恵器蓋杯のセットが置かれ、突出部では提瓶の破片が出土している。

墳丘背面からは須恵器壺の破片が散らばって出土している。

土器

須恵器蓋杯 (34・37~42・45~47)・杯 (31~33)・短頸壺 (35・43・44)・提瓶 (36・49・50)・壺 (48) が出土している。31~36は玄室床面、37~41・43・44は羨道部、42は石室埋土、45・46・50は列石南西部、47は墳丘裾部、48・49は墳丘北側より出土している。

34・39~41・45・47は須恵器杯蓋である。40・45・47は口縁部内面に凹みをもち、天井部外面に回転ヘラケズリが施されている。40・47は天井部外面が平らで、器高が低く、45は天井部に丸みをもち、器高が高い。34・39・41は天井部外面がヘラ切りで、34・41はその後ナデが施されている。41は底部と体部の境にヘラケズリが施されている。

37・38・42・46は須恵器杯身である。37・46は高く立ち上がる口縁部をもち、底部外面は回転ヘラケズリが施されている。38・42は短く立ち上がる口縁部をもち、底部外面は回転ヘラ切りの後ナデが施されている。

31~33は須恵器壺である。底部外面はヘラ切り後ナデが施されている。

35・43・44は須恵器短頸壺である。いずれも肩部に1条の沈線をもっている。35は口縁部がやや内湾しながら立ち上がり、壺部は丸みをもっている。底部外面はカキ目が施されている。43・44は体部下位から底部外面にかけて回転ヘラケズリが施されている。44の口縁部は上方にやや高く立ち上がる。

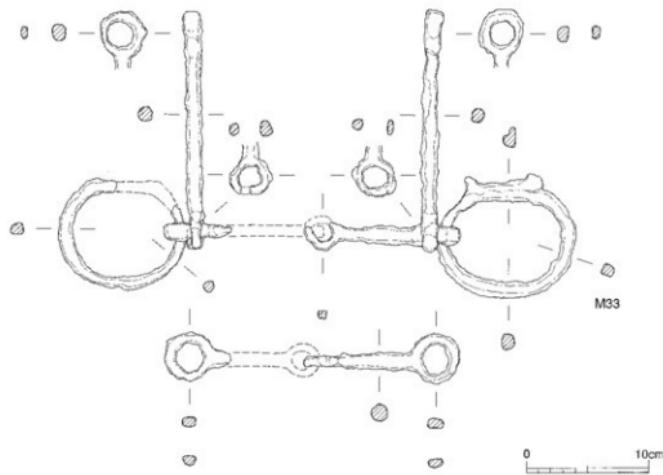
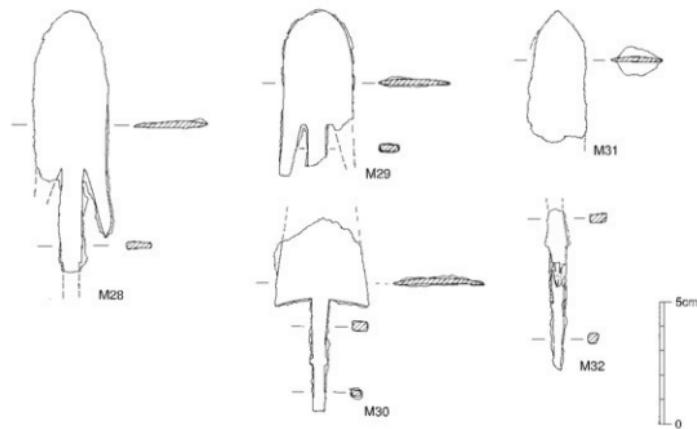
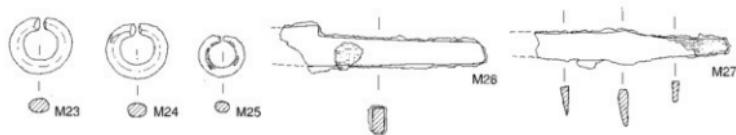
36・49・50は須恵器提瓶である。36は肩部に把手の痕跡をもたない。側面は回転ナデが、背面には回転ヘラケズリ、腹面は円整充填により閉塞し、ナデが施されている。49は把手が環状で、50は把手が鉤爪状である。

48は須恵器甕である。体部外面は格子タタキの後、上部ではカキ目、下部では縱方向のハケ目が施されている。

金属製品

金属製品は耳環が銅製品である以外は、全て鉄製品である。鉄製品には刀子、鎌、簪などがある。M25・26・28~31・33が玄室床面、M24が羨道部下層床面、M23・27・32が羨道部上層床面から出土している。

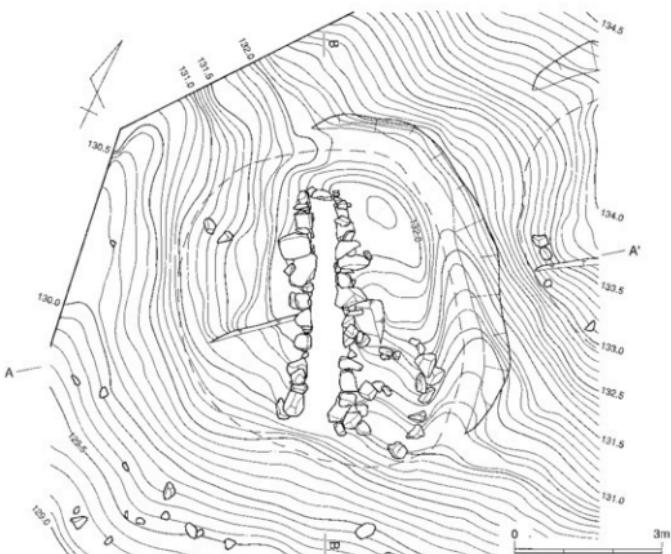
M23~25は耳環である。M23・24は銅芯銀貼で、断面は梢円形である。M23は幅25.5cm、高23cm、M



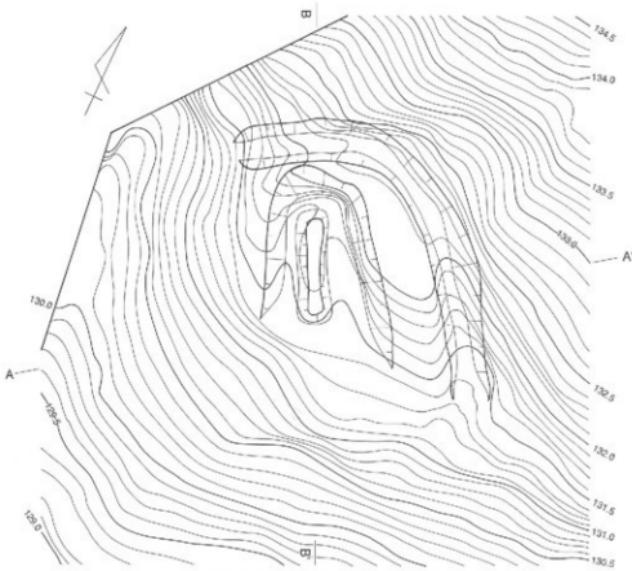
第28図 13号墳出土鉄器



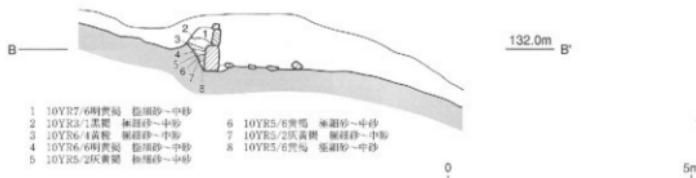
第29図 26号墳墳丘（調査前）



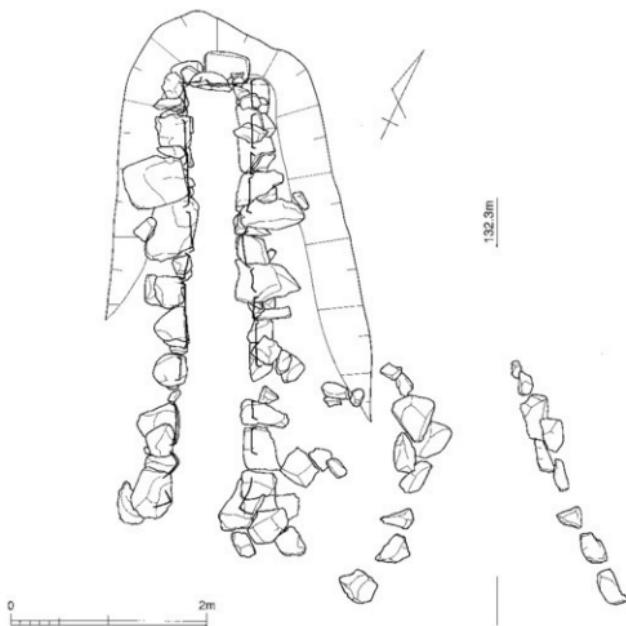
第30図 26号墳墳丘（調査後）



第31図 26号填墳丘（完掘後）



第32図 26号填墳丘断面図



第33図 26号墳石室平面図、列石平面図・立面図

24は幅25.5cm、高22.5cmを測る。M25は銅芯金貼であるが、箔はほとんど残存していない。断面は梢円形である。幅1.9cm、高1.8cmを測る。

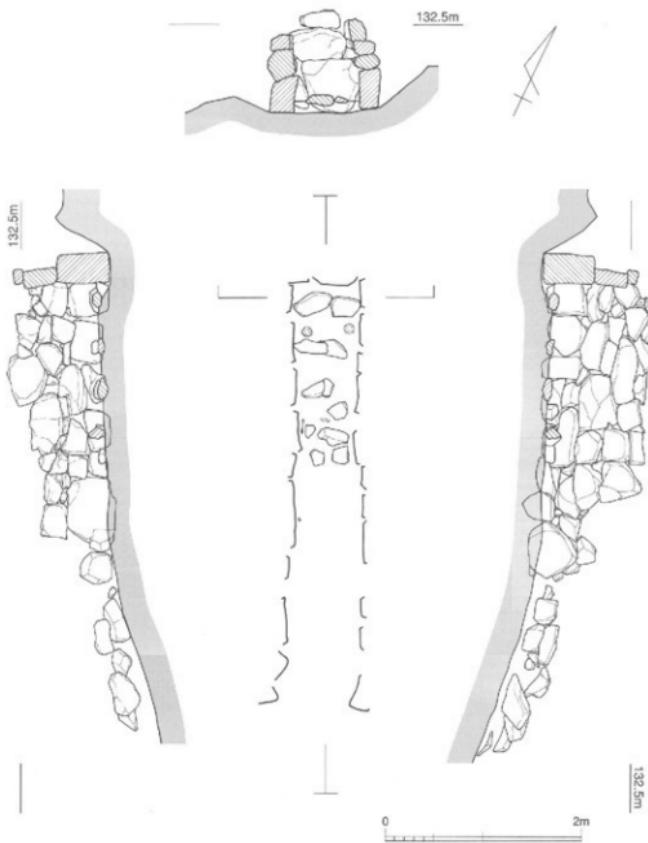
M26・27は刀子である。関部は不均等両開で、茎尻は栗尻である。頭部に木質が付着している。

M28~32は鉄鏃である。いずれも平根系の鉄鏃と考えられる。M28・29は平根系腸抉拂葉式の鉄鏃で、関部は角関である。M30は平根系長三角形式の鉄鏃で、関部は棘状関である。M32の関部は台形関である。

M33は素環鏡板付青である。素環の鏡板には矩形立開をもっている。環の形状は11.5cm×8.8cmと10.5cm×8.8cmの梢円形である。立開は幅6cmで、回字状に取り付けられている。柄は柄先環の大きい大環柄で、引手が違なっている。引手は直柄引手である。

3 26号墳

26号墳は、12号墳の北北西約10mの位置（傾斜度22°）にある。斜面上方に馬蹄形周溝を巡らす円墳で、横穴式石室を内蔵する。以下、31号墳までは新しく発掘調査で発見された古墳である。



第34図 26号墳石室平面図・立面図

(1) 遺構 (第29~35図)

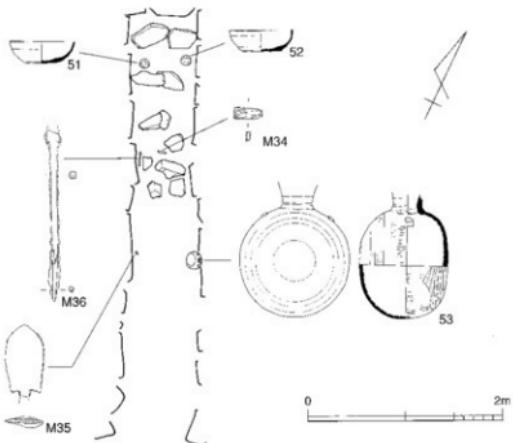
調査前の状況は、石室の一部が見つかるまで古墳が存在するとは思われず、調査範囲を北に拡げた段階で墳丘らしい平坦地が認められた。

墳丘と外部施設

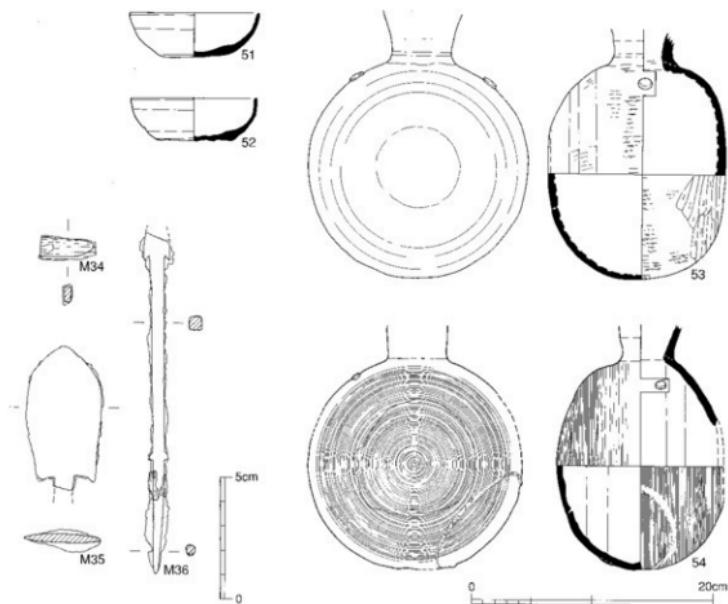
墳丘規模は、南北6.50m・東西5.50mを測る。石室床面からの高さは現状で1.10m、盛土の高さは最大部で0.60mを測り、黒ボクを含む黒褐色土及び黄褐色土を積み上げている。

また、墳丘下段位を巡る列石を石室入り口横から東南部にのみ確認した。石室主軸と平行に延び、本来西南部にも存在した可能性が高い。径30cm前後の石材を、1段ないし2段に配している。

次に、墳丘の北から東側の斜面上方に位置する周溝は、最大深さ1.10m・最大幅0.90mで、断面は幅広いU字形を呈する。なお、平面形態は列石と併せて考えると、方形を意識していたとも見られる。



第35図 26号墳石室遺物出土位置



第36図 26号墳出土遺物

墳丘の築造は、旧地表等を剥ぎ取った後、石室掘り方から出た黄色土で整地して平坦面を造り、石室第に基底石を据えて、側石構築と共に斜面上方に設けた周溝の黒ボク土を含む黒褐色土及び黄褐色土を積み上げる。そして、石室構築完了後には墳丘前面の下位部に列石を巡らしている。

埋葬施設

横穴式石室は主軸を N25°W にとり、南東方向に開口している。

石室の掘り方の規模は南北4.00m、東西2.50mを測る。床面の平面形態は無袖式であり、全長4.35m、玄室長2.70m、同最大幅0.70mである。石材は3段ないし4段分（残りの良い所で床面から高さ1.05m）で、玄室部分の側壁はほぼ完存している。ただし、羨道部分の側壁は1段ないし2段を残すのみである。

石材の積み方では、奥壁は3段積みで基底石に大小の2石を組合せている。玄室部の両側壁は奥壁よりの基底石を縦長に据え、それ以外は横長で使用し比較的横に目地を通している。いずれも持ち送りは無く、ほぼ垂直に積み上げている。

また、玄室床面には襖を5列横に並べて棺台としている。

（2）遺物（第36図）

遺物は石室から出土した。石室内は盜掘を受けておらず、当初の位置をとどめていると考えられる。玄室内で出土した遺物は須恵器杯・鉄製刀子・鉄鎌である。玄門部で須恵器提瓶、鉄鎌、羨道部から須恵器提瓶が出土している。

土器

須恵器杯（51・52）・須恵器提瓶（53・54）が出土している。51・52は玄室内床面、53は玄門部床面、54は羨道部から出土した。

51・52は須恵器杯である。底部外面は回転ヘラ切り未調整である。

53・54は須恵器提瓶である。肩部にボタン状の痕跡をもち、口縁部を欠いている。閉塞は円盤充填である。53の腹面中央はナデ、側面～腹面縁部は平行タキ後回転ナデ、背面中央はナデ、背面縁部は手持ちヘラケズリが施されている。54の外側はカキ目が施され、杯の上に重ねた痕跡が明瞭に残っている。

金属製品

刀子（34）・鉄鎌（35・36）が出土している。M34・36が玄室内、M35が玄門部で出土した。

M34は刀子である。茎部のみの破片で、側面に木質が付着している。茎尻は梨尻である。

M35・36は鉄鎌である。M35は平根系脇抜柳葉式の鉄鎌であるが、逆刃部分がほとんどない。M36は長頭脇抜柳葉式の鉄鎌である。関部は棘状闘で、茎部に木質が付着している。

4 27号墳

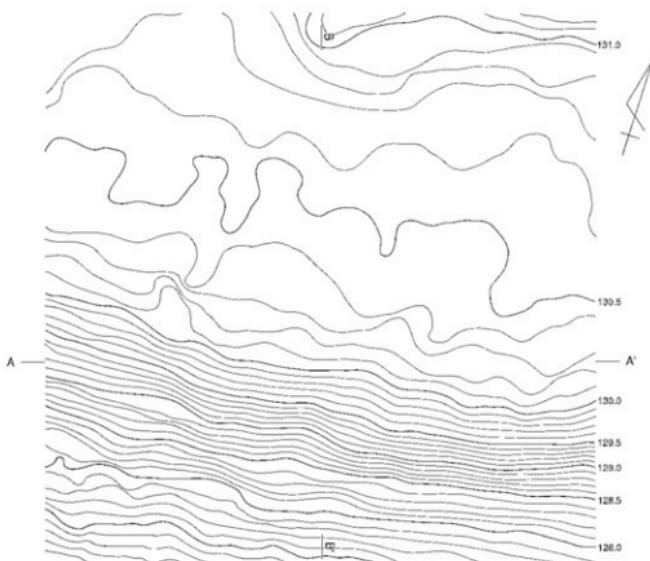
27号墳は13号墳の北約10mの位置（傾斜度20°）にあり、斜面上方に馬蹄形の周溝を巡らす円墳で、横穴式石室を内蔵する。

（1）遺構（第37～40図）

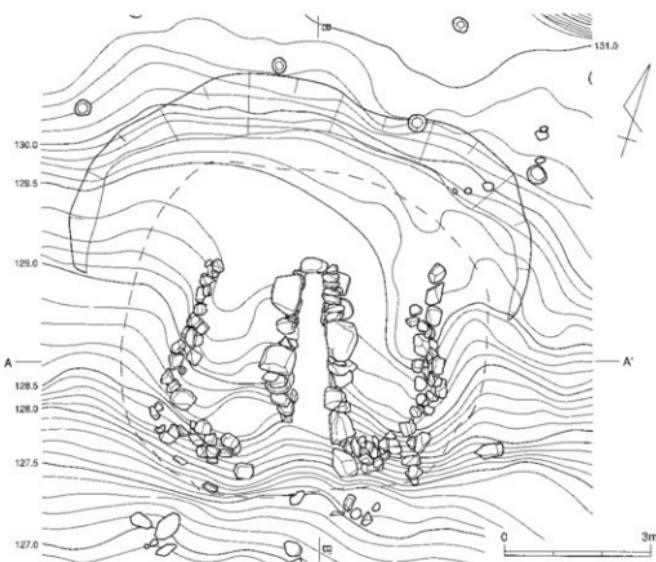
調査前の状況は、平安時代の仏堂造営時に平坦地を造る必要から墳丘が埋められたため、いわゆる埋没古墳となっていた。

墳丘と外部施設

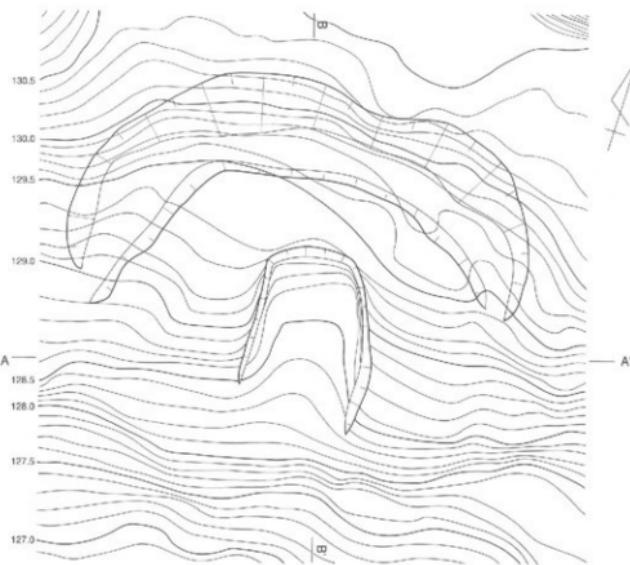
墳丘の規模は、南北7.00m・東西7.50mを測る。石室床面からの高さは現状で1.40m、盛土の高さは最大で1.10mを測り、黒ボクを多く含む黒褐色土を積み上げている。なお、墳丘築成の単位は、地山上



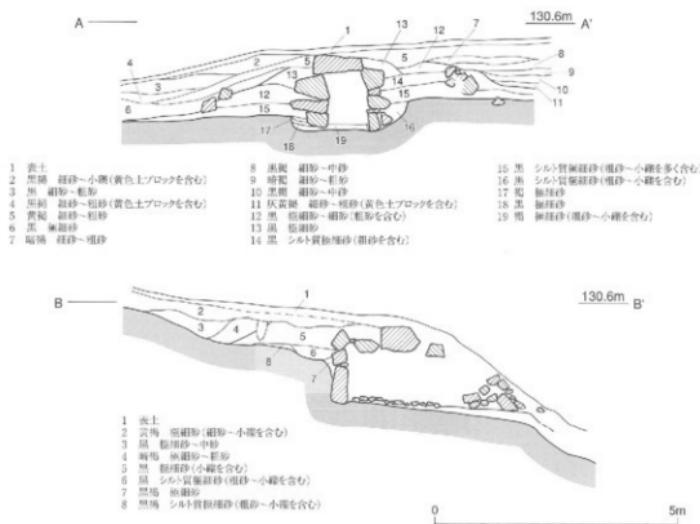
第37図 27号墳墳丘（調査前）



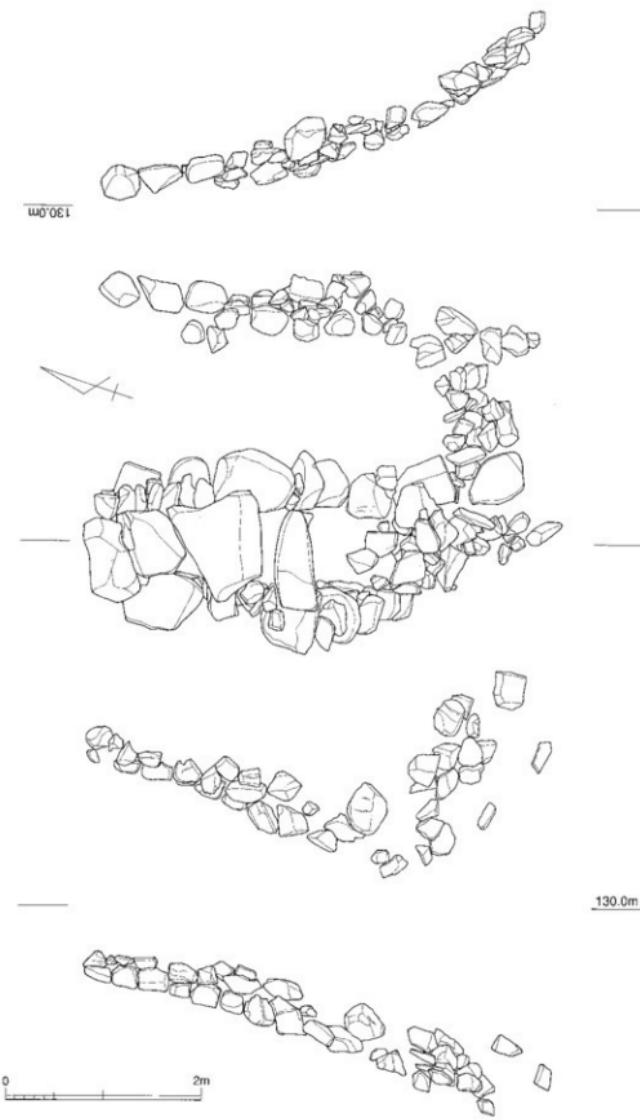
第38図 27号墳墳丘（調査後）



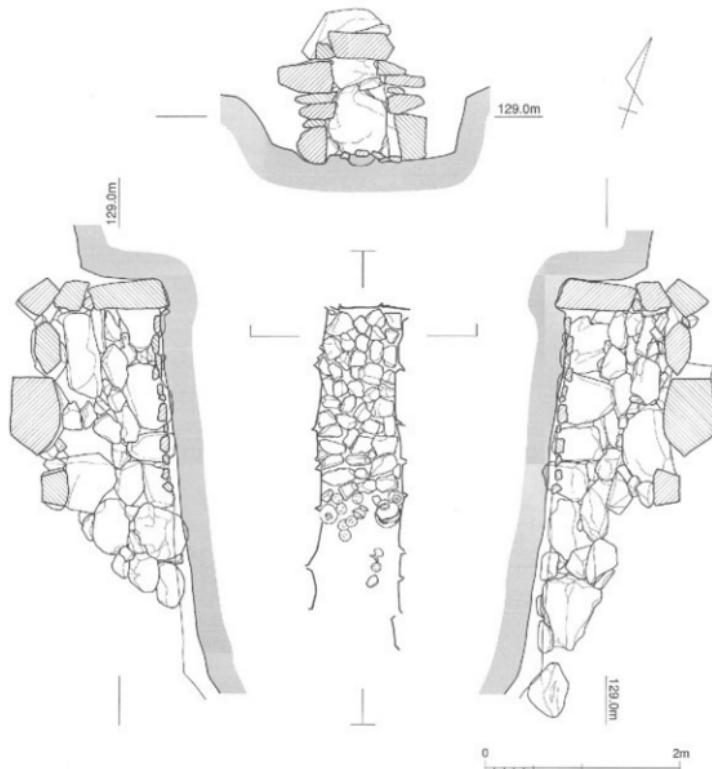
第39図 27号填埋丘（完掘後）



第40図 27号填埋丘断面図



第41図 27号墳石室平面図、列石平面図・立面図



第42図 27号墳石室平面図・立面図

を削りこんだ黄褐色土が認められずいわゆる黒ボクが大半であり、うまく分層できなかった。

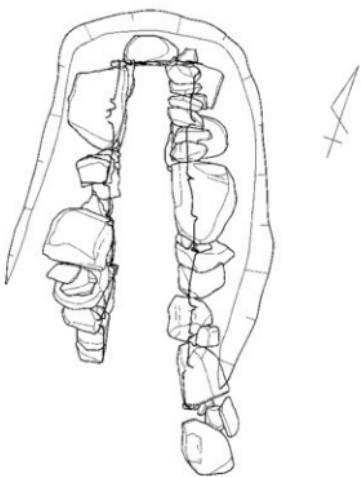
また、墳丘下段位を巡る列石が石室入口から南側の前面と両側面に設けられ、平面形態はコの字形を呈している。径30cm前後の石材を、1段ないし2段分配している。特に、両側面のものは弧を描かずに、直線を意識している。13号墳と同様に天井石架構後、盛土の土留めの目的で設けたと考えられる。

次に、墳丘の北側に位置する馬蹄形刷溝は最大深さ0.60m・最大幅2.05mで、断面は幅広いU字形を呈する。なお、平面形態は列石と併せ、方形と見られなくもない。

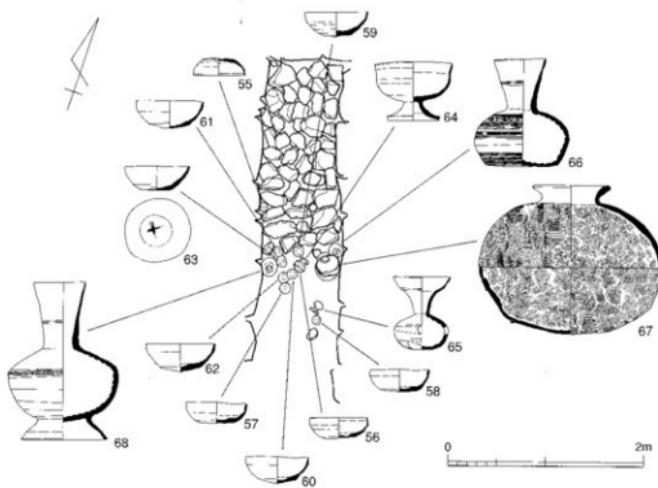
埋葬施設

天井石が奥壁から4枚分残る等、仏堂造営時の斜面石垣で壇された狭道の一部以外は良好な状態であった。ただし、埋没の影響か横穴式石室は土圧によりやや西側へ傾いていた。石室の主軸はN16°Wにとり、南方向に開口している。

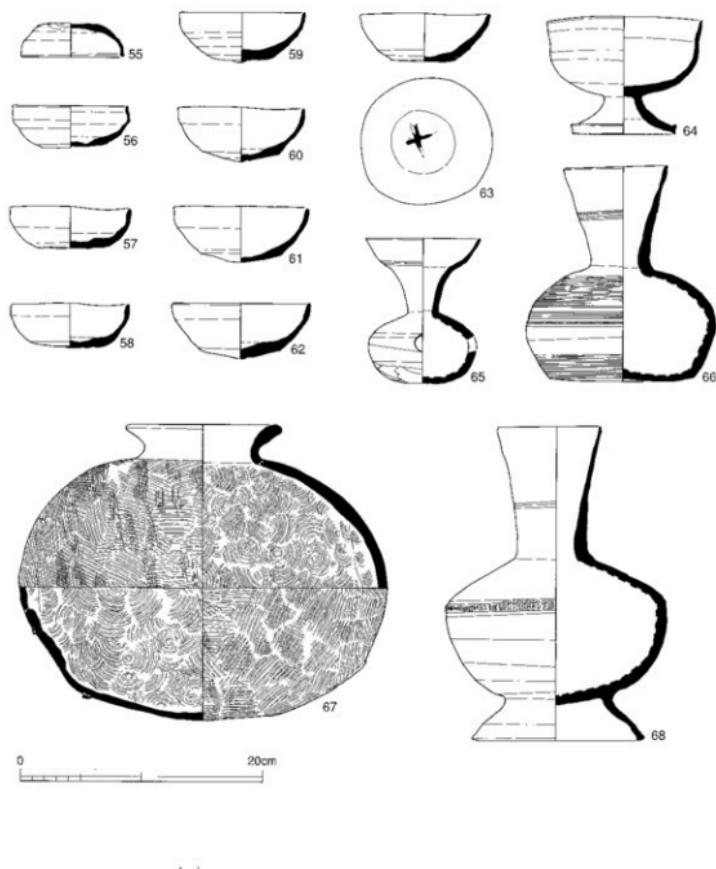
石室の掘方は南北3.70m・東西2.70mを測る。床面の平面形態は無袖式で、全長3.55m・玄室長1.60m・同最大幅0.80m・天井石までの最大高さ1.00mである。玄室の範囲は4枚目の天井石が少し低くなる位置



第43図 27号墳石室平面図



第44図 27号墳石室遺物出土位置



第45図 27号墳出土遺物

で、床面に敷いた石の大きさも変化することと、右側石の基底石が縦長使用に替わることで判断した。なお、敷石の範囲で押さえれば、長さは2.00mとなる。

石材の積み方では、奥壁は2段積みの上に天井石が載る。基底石は中央に大きな石を置き、左右に大

小の石材を組み合わせる。両側石は3段積みが基本で、その上に小さな石材で調節しながら天井石を載せる（石室床面から天井石までの高さは1.00m）。

また、玄室床面には径20cm前後の樋が散かれ、羨道部には閉塞石も残存していた。

（2）遺物（第45図）

遺物は石室から出土した。石室内は盜掘を受けておらず、当初の位置をとどめていると考えられる。玄室内で出土した遺物は須恵器蓋、鉄鏡である。羨道部からは須恵器杯・台付碗・長頸壺・横瓶・甌が出土している。

土器

須恵器杯（56～63）・蓋（55）・台付碗（64）・甌（65）・長頸壺（66・68）・横瓶（67）が出土している。55は玄室床面、56～68は羨道部床面から出土したものである。

56～63は須恵器杯である。底部外面は56～62が回転ヘラ切り未調整、63が回転ヘラ切り後ナデである。60～62は底部が尖り気味に突出している。63は底部外面に漆による記号「×」が記されている。

55は須恵器蓋である。口縁部端部に面をもち、やや内側に突出している。天井部外面に手持ちヘラケズリが施されている。内面に赤色顔料がわずかに付着している。本来は短頸壺の蓋と考えられるが、「紅皿」状に使用されたと考えられる。

64は須恵器台付碗である。体部中央にわずかにくぼむ凹線をもっている。口縁部はかなりひざんでいる。

65は須恵器甌である。肩部の凹線はわずかに凹む程度である。体部外面下半は回転ヘラケズリが施され、底部外面は手持ちヘラケズリが施されている。

66・68は須恵器長頸壺である。66は頸部に2条、肩部に3条の沈線が施されている。体部外面中位から底部外面にかけてヘラケズリが施され、その後体部外面下位の一部に回転ヘラケズリが施されている。68は高い脚をもち、頸部に1条、肩部に2条の沈線と列点文が施されている。体部下半は回転ヘラケズリが施されている。

67は須恵器横瓶である。体部外面は平行タタキで、閉塞部側にはカキ目が施されている。閉塞は円盤充填で、充填部内面にも当て具痕が残存している。反対側も下部に当て具痕が偏っていることから、口縁部接合後にタタキが施されたことがわかる。体部外面には焼台として杯を重ねた痕跡が3カ所認められる。

金属製品

玄室床面から鉄鏡（M37）が出土している。関部は棘状闊である。

5 28号墳

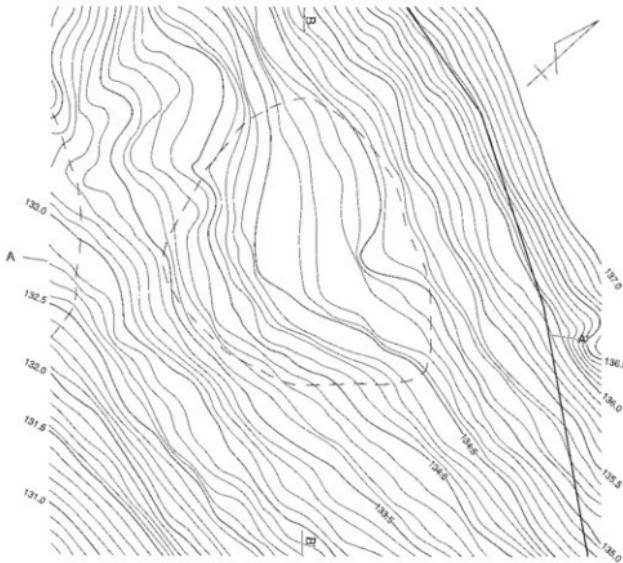
28号墳は、26号墳の北東に隣接した位置（傾斜度25°）にある。斜面上方に馬蹄形周溝を巡らす円墳で、横穴式石室を内蔵している。

（1）遺構（第46～52図）

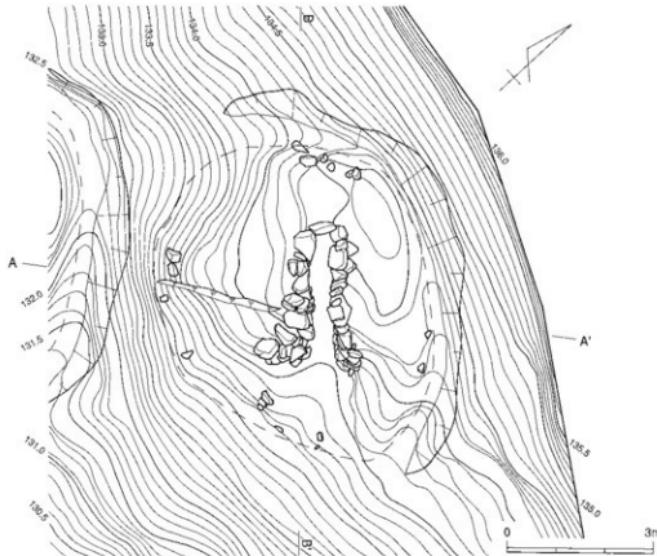
調査前の状況は、26号墳を発見したことにより同様の傾斜変換点が無いか調べた結果、2ヶ所見つかりトレンチを入れて古墳（石室）と確認した程度で、古墳といえる隆起を持つものではなかった。

墳丘と外部施設

墳丘規模は、南北（長軸）6.00m・東西（短軸）5.60mを測る。石室床面からの高さは現状で0.90m、



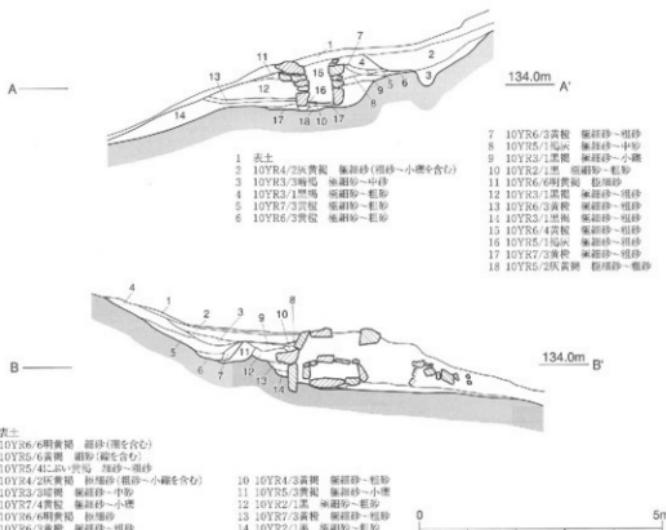
第46図 28号墳墳丘（調査前）



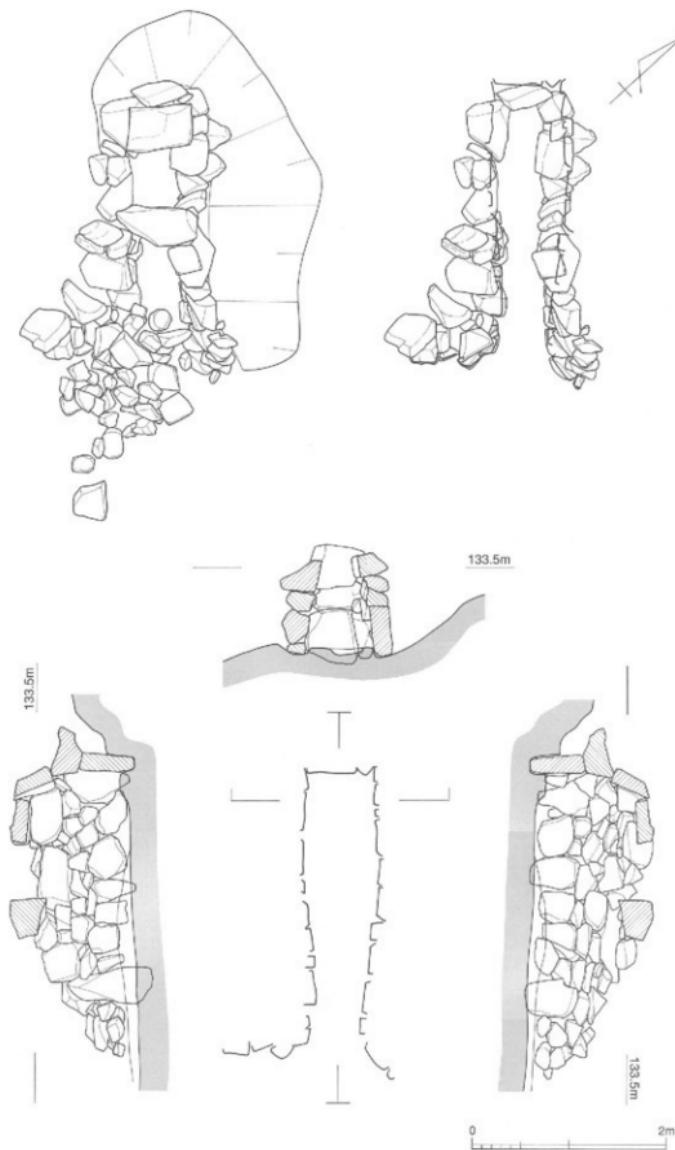
第47図 28号墳墳丘（調査後）



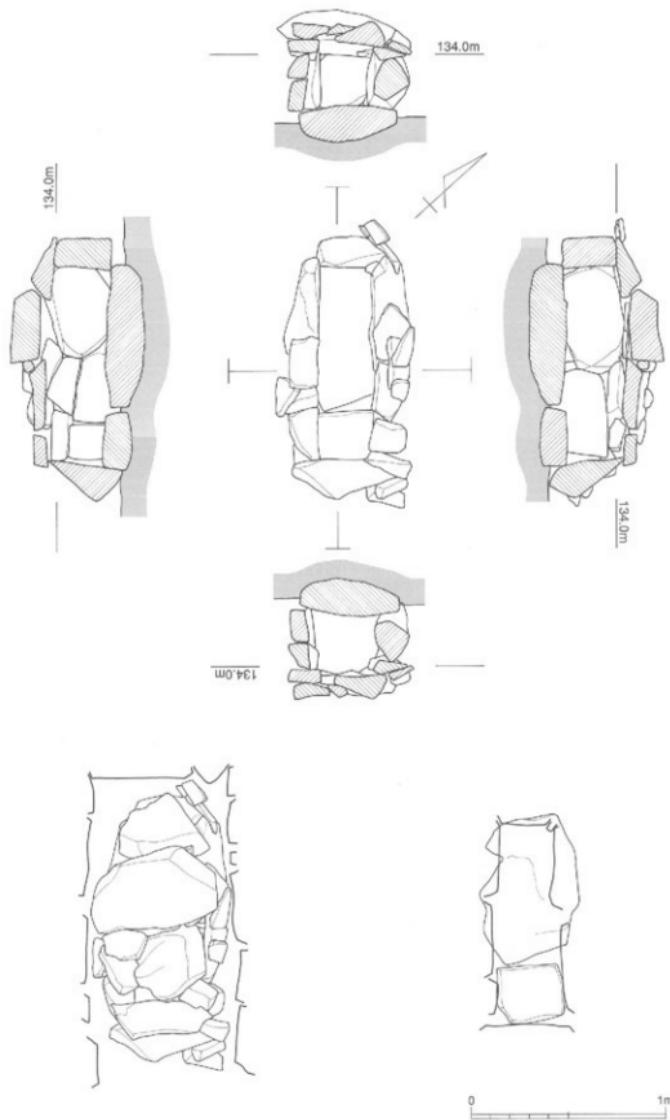
第48図 28号填墳丘 (完掘後)



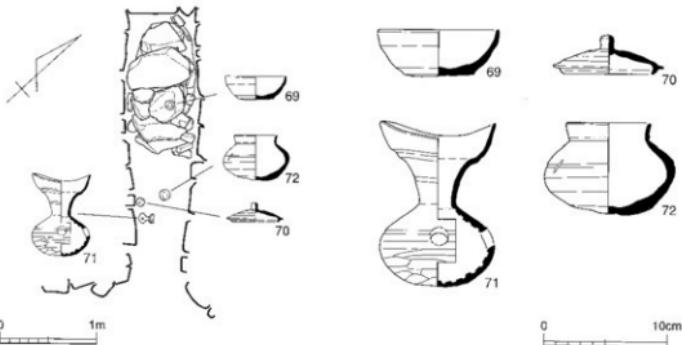
第49図 28号填墳丘断面図



第50図 28号墳石室平面図・立面図



第51図 28号墳石棺平面図・立面図



第52図 28号墳石室遺物出土位置

第53図 28号墳出土遺物

盛土の高さは最大部で0.55mを測り、黒ボクを含む黒褐色土及び黄褐色土を積み上げている。

墳丘下段位の石室入口部分と、墳丘側に点々と列石が認められる。なお、掘部のものは1段であり本来全周していたと思われるが、墳丘下段位のものと同様な土留めの役目を果たすものではない。おそらく、墳丘の大きさ（範囲）を示しているのだろう。

墳丘の北から東側の斜面上方に位置する周溝は、最大深さ1.10m・最大幅1.20mで、断面は幅広いU字形を呈する。なお、平面形態は方形を意識していたとも見られる。

墳丘の築造は26号墳と同様であり、周溝を掘ることによって、墳丘の盛土と雨水の排水を兼ねていたようである。

埋葬施設

横穴式石室は主軸をN47°Wにとり、南東方向に開口している。

石室の掘方の規模は南北（長軸）3.70m、東西（短軸）2.00mを測る。床面の平面形態は無袖式で、全長2.80m・玄室長2.40m・同最大幅0.80m・天井石までの最大の高さ1.00mである。ただし、明瞭な奥造は認められず、玄室外の側石はハの字状に開いているため、開く部分から外は列石と見なした。

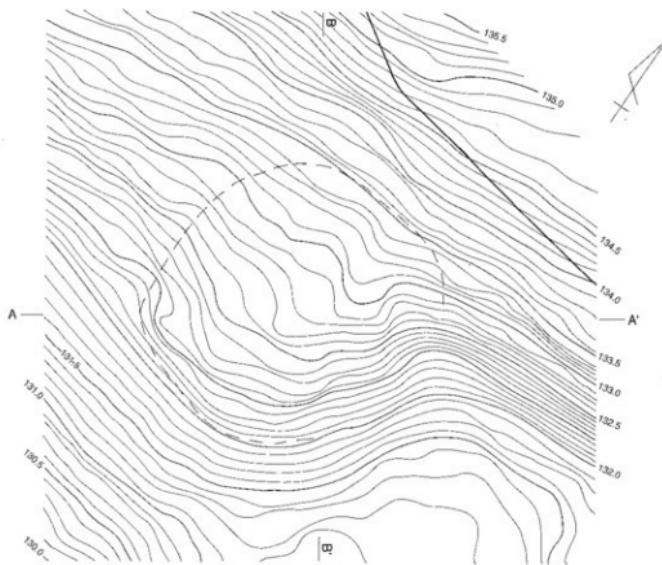
石材は、天井が部分的に欠落している以外は完存している。石材の積み方では、奥壁は3段積みで基底石は大小の2石材を横長・縦長に組合せている。両側石は3段積みを基本とし、基底石を縦長に据え、2段目からは横長に組合せている。玄門部には、比較的大きな石材を据えている。いずれも、持ち送りが認められる。

さらに、玄室奥には1基の組合せ式石棺が置かれている。基本は2枚の底石と、側石に小口の2枚と左右の5枚で構成し、4枚の蓋石が載る。隙間は小石で塞いでいる。規模は内法で長さ1.00m、奥壁側の幅28cm・奥造側の幅35cm・深さ30cmを測る小型石棺である。

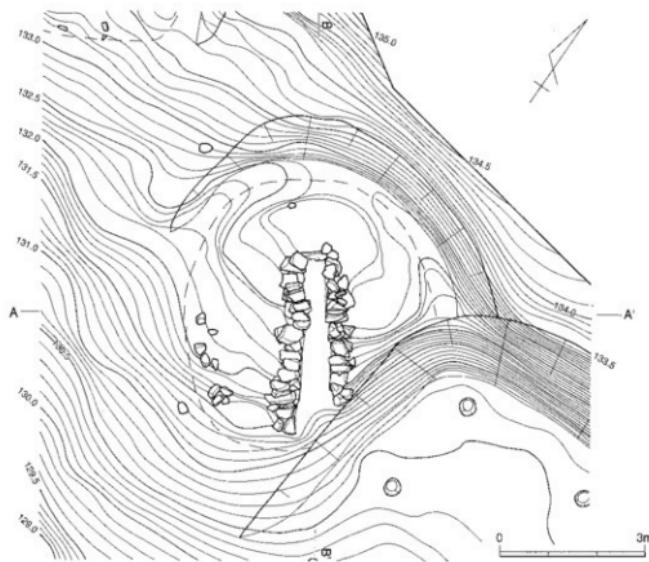
また、閉塞石としてハの字形の開口部に、多量の石材があった。

(2) 遺物（第53図）

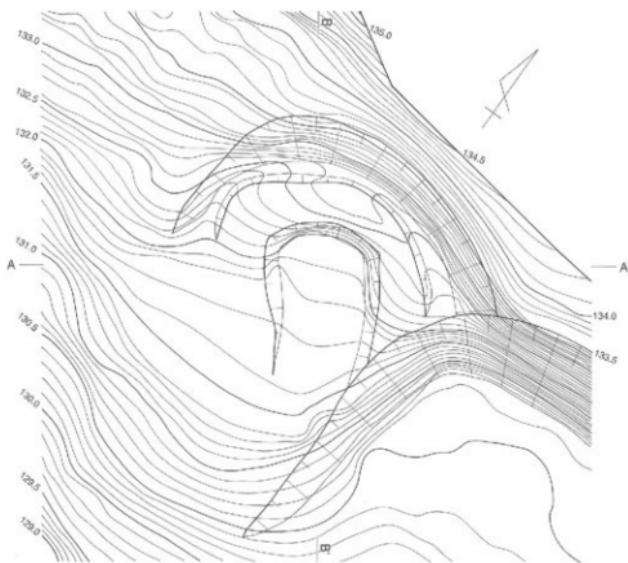
遺物は石室から出土した。石室内は盜掘を受けておらず、当初の位置をとどめていると考えられる。石棺上から須恵器杯（69）、石棺前から須恵器蓋（70）、短頸壺（72）、甌（71）が出土している。



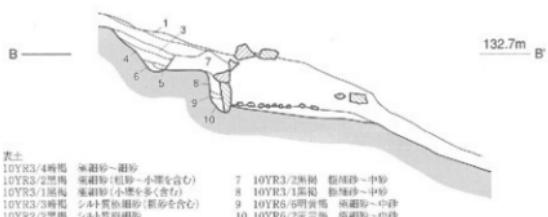
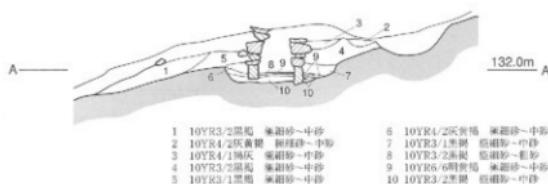
第54図 29号墳墳丘（調査前）



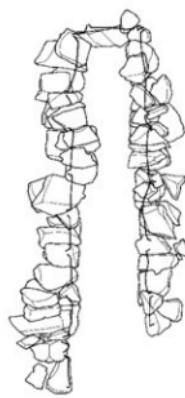
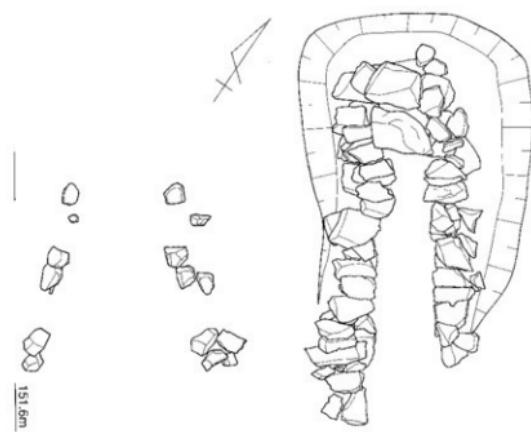
第55図 29号墳墳丘（調査後）



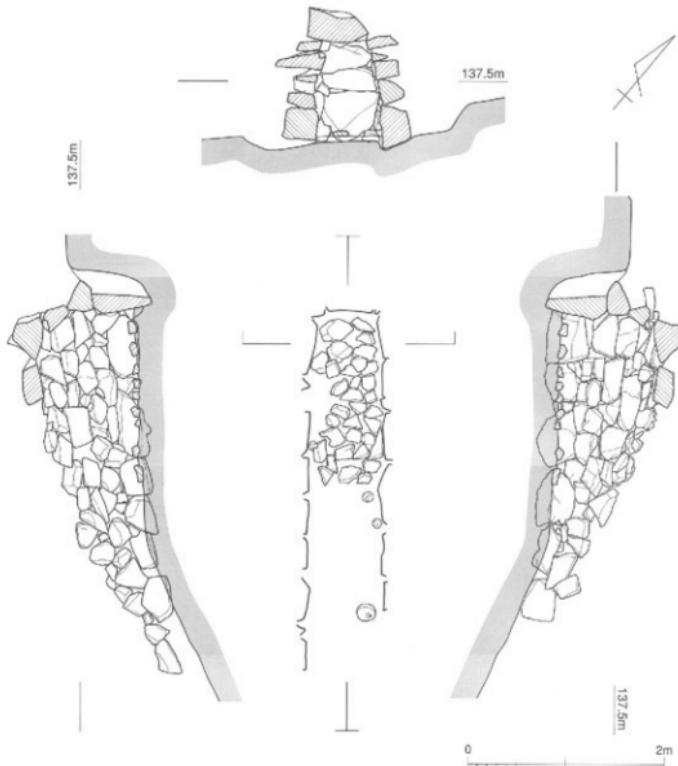
第56図 29号填墳丘（完掘後）



第57図 29号填墳丘断面図



第58図 29号墳石室平面図、列石平面図・立面図



第59図 29号墳石室平面図・立面図

土器

69は須恵器杯である。底部は回転ヘラ切り未調整で、体部下端はハラケズリが施されている。

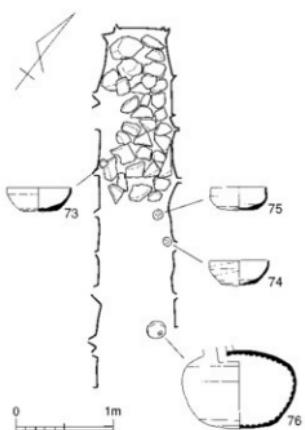
70は須恵器蓋である。天井部外面は回転ヘラケズリが施されている。長頭壺の蓋と考えられるが、セットとなるもの出土していない。

71は須恵器甌である。肩部に1条の沈線をもち、底部外面に手持ちヘラケズリが施されている。口縁部はひざんでいる。

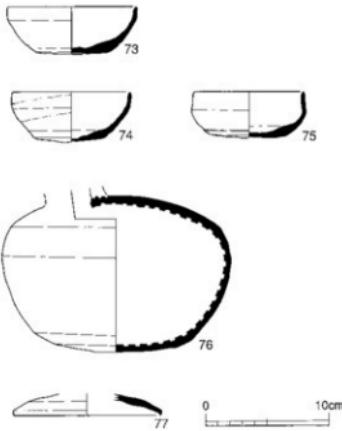
72は短頸壺である。肩部に1条の沈線をもっている。底部外面は回転ヘラ切りで、体部下半には回転ヘラケズリが施されている。

6 29号墳

29号墳は、26号墳の北西約10mの位置（傾斜度25°）にある。斜面上方には馬蹄形周溝を巡らし、横



第60図 29号墳石室遺物出土位置



第61図 29号墳出土遺物

穴式石室を内蔵する円墳である。

(1) 遺構 (第51~60図)

調査前の状況は、28号墳と同様に古墳と言えるほどの隆起が見られず、墳丘南東部は仏堂造営時に損壊していた。

墳丘と外部施設

墳丘規模は、南北（長軸）5.50m・東西（短軸）5.00mを測る。石室床面からの高さは現状で1.00m、石室掘り方上面からの盛土の高さは最大部で0.80mを測り、黒ボクを含む黒褐色土および黄褐色土を積み上げている。

また、西側墳丘下段位の位質に点々と列石が認められる。石室入口から続いていたと考えられるもので、石室主軸と平行に直線的に延びている。土留めのためのものであるが、方形を意識しているように見える。

次に、墳丘の北から東側の斜面上方に造られた周溝は最大の深さ0.90m・最大幅1.30mで、断面は幅広いU字形を呈する。

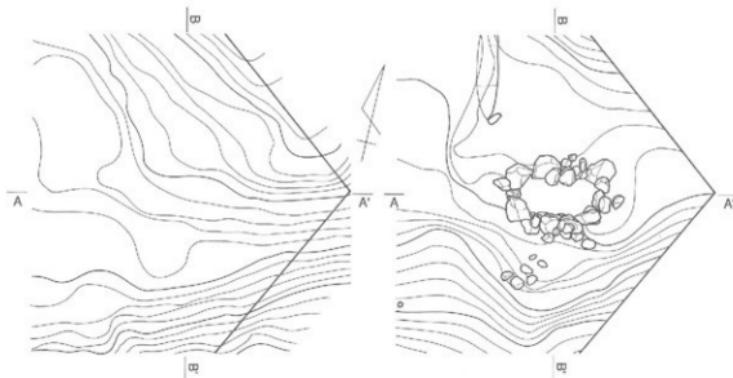
埋葬施設

横穴式石室は主軸をN35°Wにとり、南東方向に開口している。

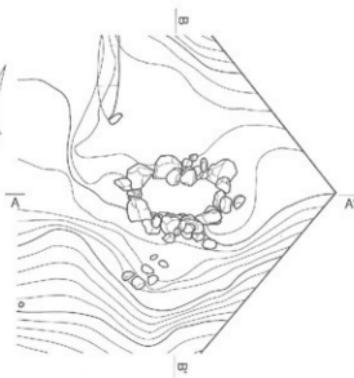
石室掘り方の規模は、南北（長軸）3.30m・東西（短軸）2.40mを測る。床面の平面形態は無袖式で、奥壁側の石材は、天井石まで残存している。全長3.80m・玄室長1.90m・同最大幅0.75m・天井石までの最大の高さ1.00mである。なお、玄室の規模は敷石の範囲で押さええたが、床面の傾斜変換点で求めれば長さ2.40mとなる。

石材の積み方では、奥壁は3段積みで、基底石に大石を据え左右に小砾を詰めている。両側石は横積みを基本とし、基底石に比較的大きな石材を据えている。いずれも、持ち送りが認められる。

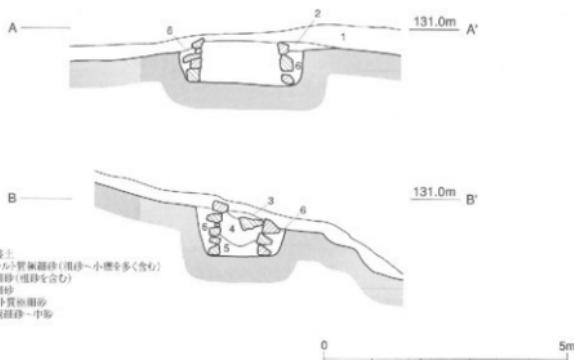
また、玄室床面には径25cm程度の砾が敷かれ、羨道部には閉塞石も残存していた。



第62図 30号墳埴丘（調査前）



第63図 30号墳埴丘（調査後）



第64図 30号墳埴丘断面図

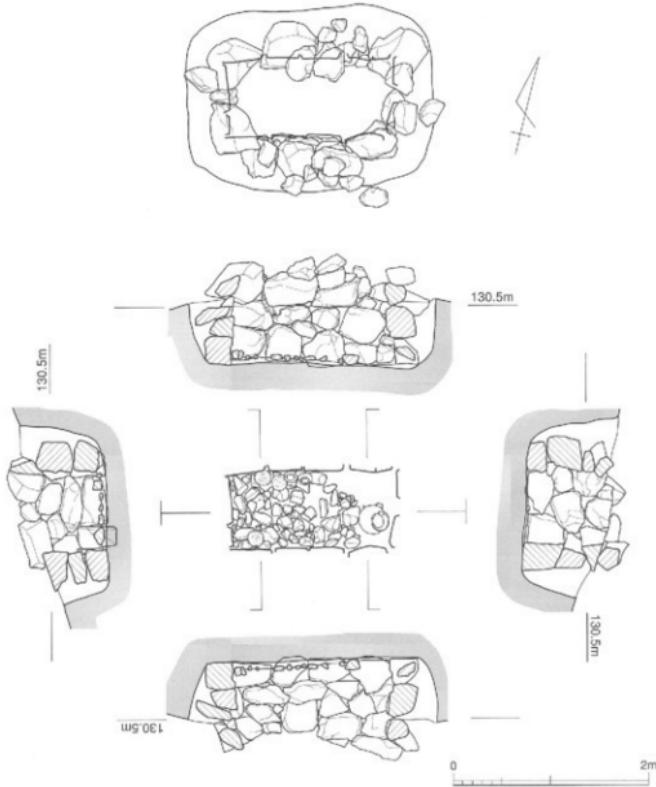
(2) 遺物 (第61図)

遺物は石室と埴丘の北側から出土した。石室内は盜掘を受けておらず、当初の位置をとどめていると考えられる。玄室と考えられる敷石上から須恵器杯 (73)、羨道部では玄室よりの部分に須恵器杯 (74・75)、羨門よりの部分で平瓶 (76) が出土している。埴丘北側の周溝から杯B蓋 (77) が出土している。

土器

須恵器杯 (73~75)・平瓶 (76)・須恵器杯B蓋 (77) が出土している。

73~75は須恵器杯である。底部は回転ヘラ切り未調整である。74は粘土紐巻き上げの旗跡が明瞭に残っている。



第65図 30号墳石室平面図・立面図

76は須恵器平瓶である。底部外面はナデ、体部外面下端は回転ヘラケズリが施されている。口頭部は剥離により欠失している。

77は須恵器杯Bである。天井部外面は回転ナデが施されている。

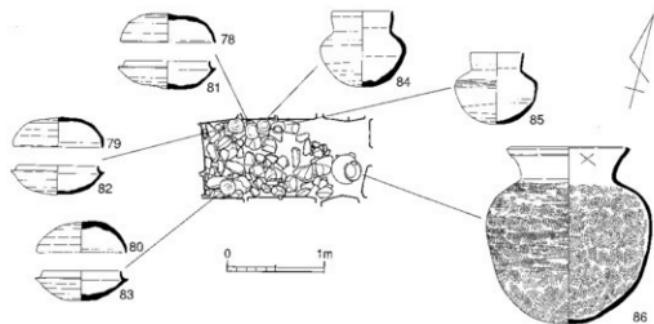
7 30号墳

30号墳は、27号墳の北東10mに位置（傾斜度20°）する堅穴式石室を埋葬主体部とした古墳である。上面は仏堂の平坦面造成の時に削平されたと考えられる。

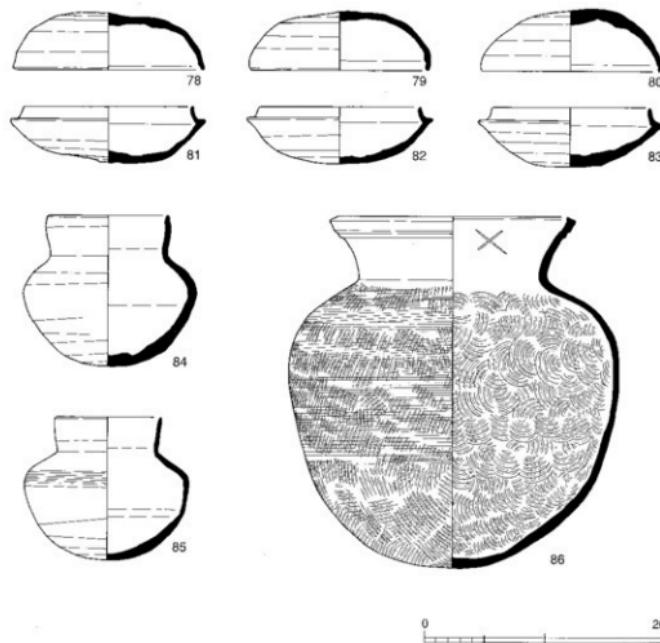
(1) 遺構（第62～66図）

墳丘と外部施設

明瞭な墳丘を持たず、また周溝も確認できなかったため、規模等は明かでない。ただし、仏堂造営時



第66図 30号填石室遺物出土位置



第67図 30号墳出土遺物

に削平されている可能性もある。わずかに、石室南と北側に点在する列石状の石材がその範囲を示しているのかも知れない。

埋葬施設

堅穴式石室の主軸は、N 76° Eをとる。天井石以外はほぼ完存している。なお、天井石について石材は近くにあるが、木の蓋も考慮すべきであろう。

石室の掘り方の規模は東西2.50m、南北1.90mを測る。現存する石室上端は、墓壙の上端よりも高い位置にある。床面の平面形態は若干崩れの張る長方形を呈し、内部の長さ1.70m、最大幅0.80m、深さ1.00mである。

石材の積み方は基本的に3段積みで、小口部の基底石は縦長と横長を組合せる。その他は、横長で使用し、隙間に小石を用いる。両小口と北側壁は若干持ち送りされているが、南側壁はほぼ垂直に積まれている。

また、床面の中ほどから西側には径25cm程度の縫が敷かれていた。

(2) 遺物（第67図）

遺物は石室から出土した。石室内は盜掘を受けておらず、当初の位置をとどめていると考えられる。床面北壁側の西よりに蓋杯2個・直口壺2個、床面南壁側西よりに蓋杯1個、床面東壁側に壺1個が置かれていた。

78~80は須恵器杯蓋である。口縁部内面に凹みをもっている。天井部外面は回転ヘラケズリが施されているが、中央部のケズリは粗くしか施されていない。78・79の天井部内面中央には当具の痕跡が残存している。

81~83は須恵器杯身である。口縁部は内湾しながら高く立ち上がり、底部外面は回転ヘラケズリが施されている。81の底部中央のヘラケズリは粗くしか施されていない。81・82の底部内面中央には当具痕が残存している。

84・85は須恵器直口壺である。84は口縁部が内消気味に上方へ立ち上がり、体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。85は口縁部が直線的に上方へ立ち上がり、肩部にカキ目、体部下位から底部にかけて回転ヘラケズリが施されている。

86は須恵器壺である。体部外面は平行タタキで、体部の上位から中位にかけてカキ目が施されている。口縁部内面には「×」印のヘラ記号をもっている。

8 31号墳

31号墳は27号墳の西5mに位置（傾斜度20°）し、30号墳と同じく明瞭な墳丘を持たない堅穴式石室の形態をとる古墳である。

(1) 遺構（第68~72図）

調査前の状況は、周辺の傾斜と変わりなく、墳丘があるようには見えなかった。

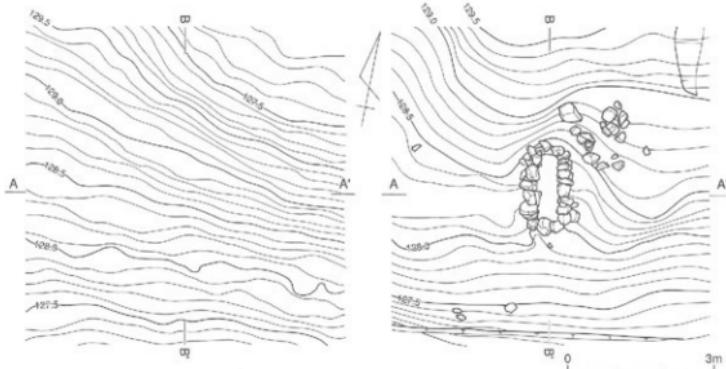
墳丘と外部施設

周溝が認められず、墳丘の規模も明らかでない。仏堂造営時に削平された可能性もあるが、天井石が残っていたことからすれば盛土はそんなに高かったとは考えられない。また、斜面の高い側に列石状の集石が存在するが、この古墳とは無関係であろう。

埋葬施設

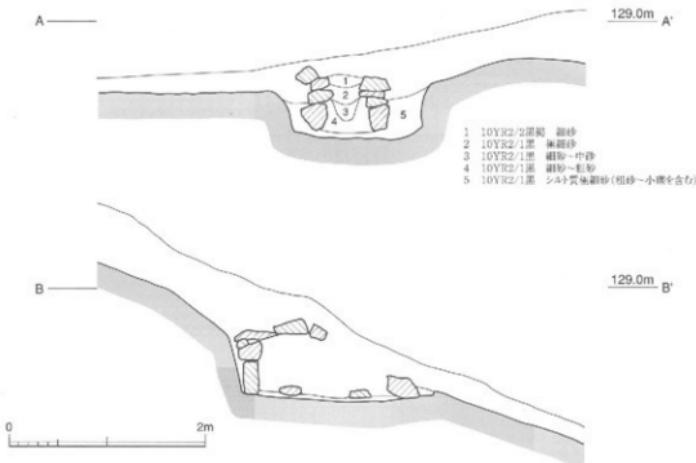
堅穴式石室の主軸は、N 12° Wをとる。南半部の天井石を除き、ほぼ完存していた。

石室掘方の規模は南北2.10m、東西1.60mを測る。床面の平面形態は、若干崩れの張る長方形を呈す



第68図 31号墳墳丘（調査前）

第69図 31号墳墳丘（調査後）

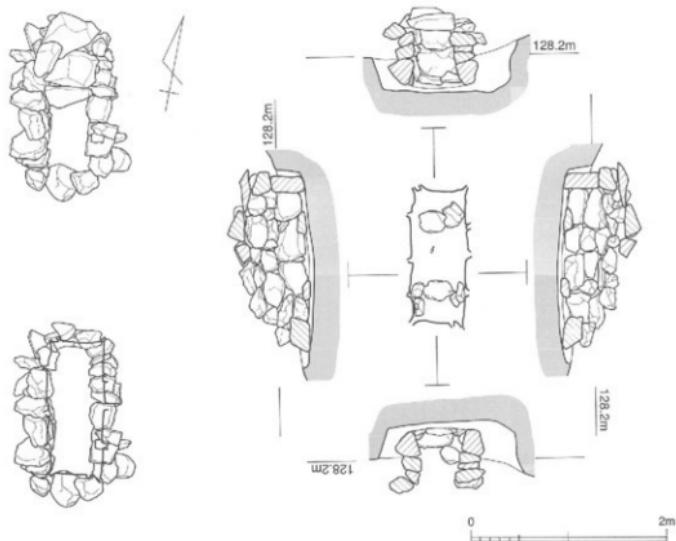


第70図 31号墳墳丘断面図

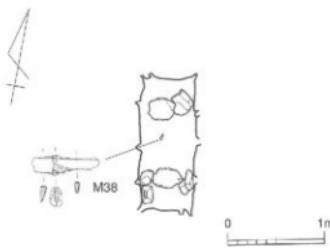
る。内部の長さ1.35m、最大幅0.55m、深さ0.65mである。

石材の積み方は、北小口は2段積みで、東西側壁は3段積みである。なお、南小口は発見時から1段のみであった。石材は全て横長で使用し、隙間は小石を用いる。北小口は垂直に積むが、東西側壁は持ち送っている。

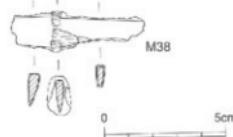
このように見ていくと、石室の主軸方位や石室の掘り方、石材の積み方は斜面上方側に一番大きな石を置く等、箇道がない以外他の横穴式石室と共に、これの縮小版といえる。



第71図 31号墳石室平面図・立面図



第72図 31号墳石室遺物出土位置



第73図 31号墳出土遺物

また、床面には襷を2列横に並べて棺台としている。

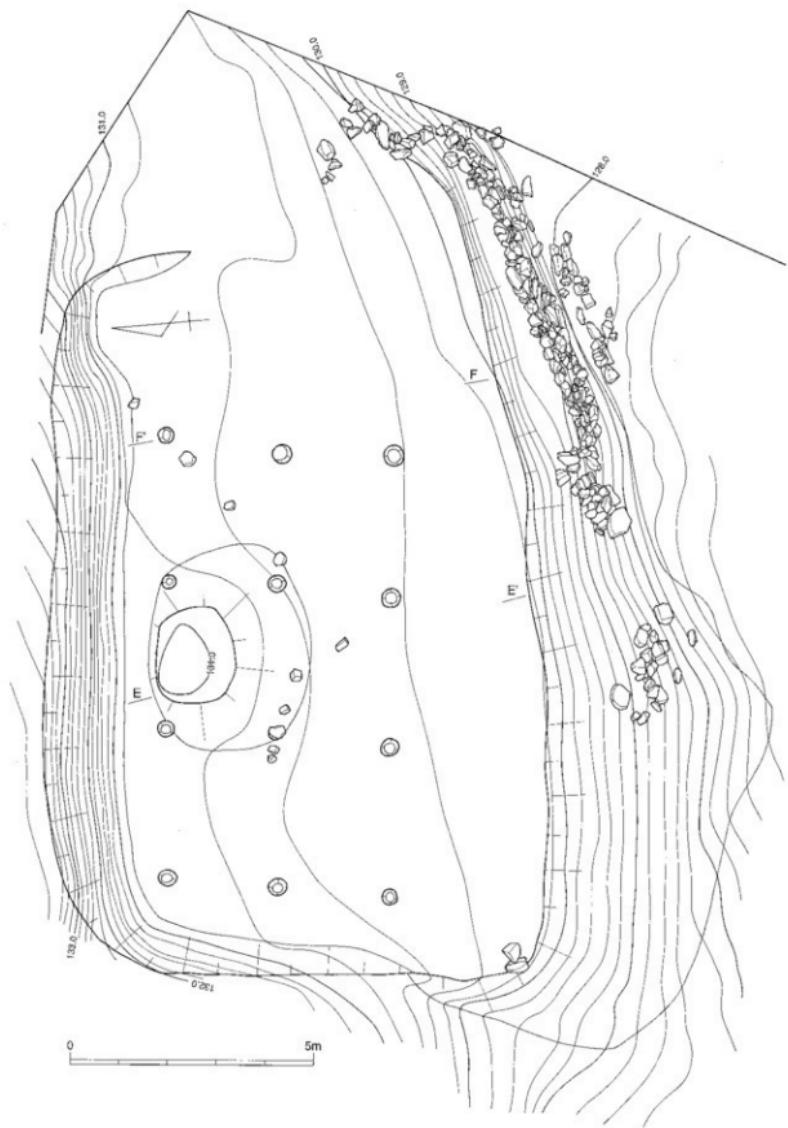
(2) 遺物（第73図）

遺物は床面中央から鉄製刀子（M38）が出土しているのみである。関部は不均等両開である。茎部の木質は、板状の木質の上に、関部の上に棒皮状の木質が巻き付くように残存している。

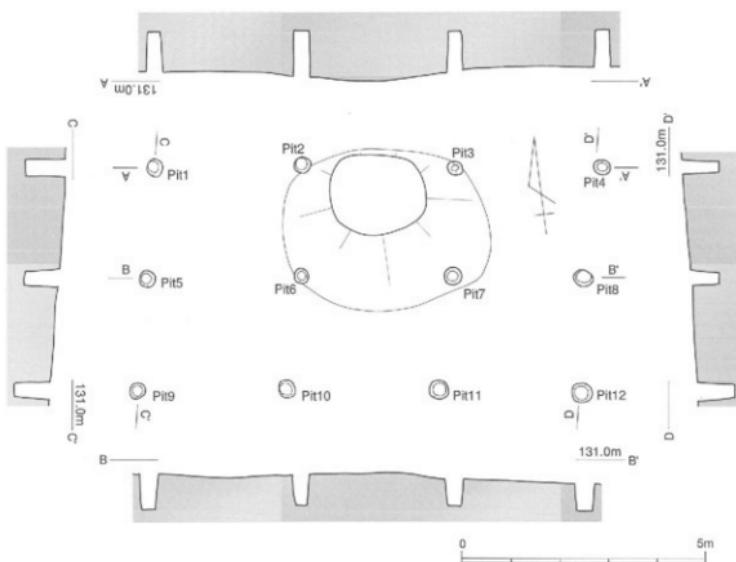
9 仏堂跡

(1) 遺構（第74～77図）

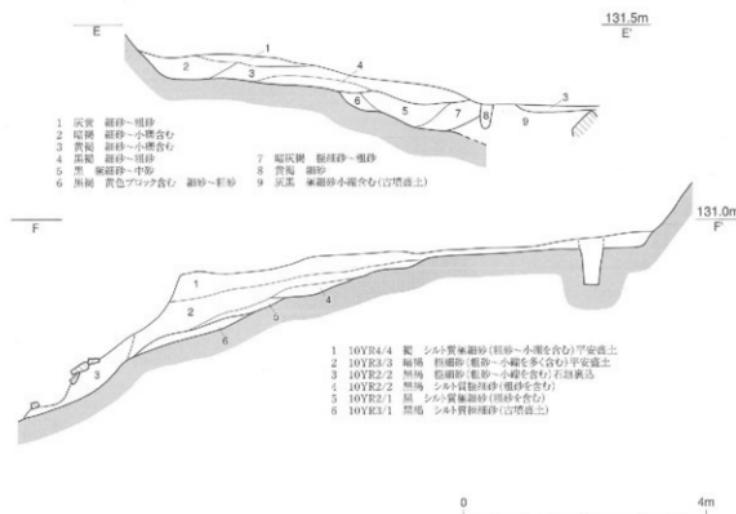
27号墳直上の平坦面からは仏堂跡と考えられる擬立柱建物跡1棟が検出された。



第74図 仏堂跡平面図



第75図 SB01平面図・断面図



第76図 平坦面断面図



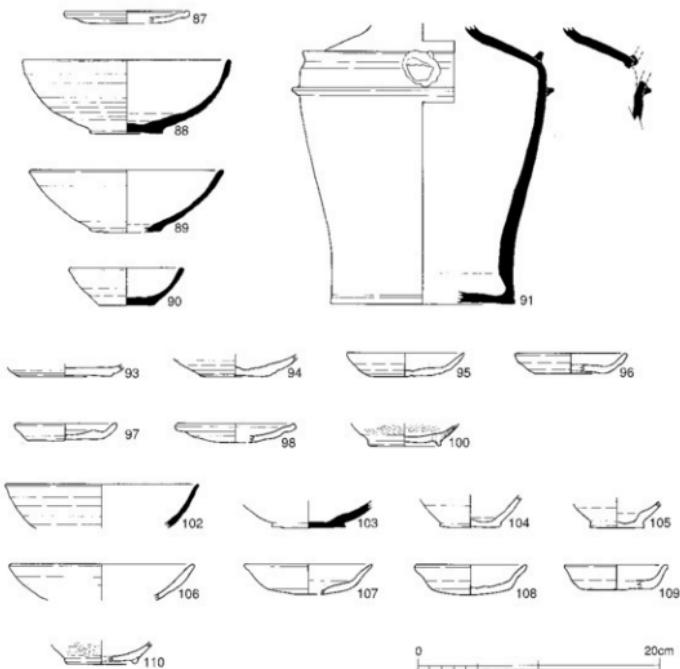
第77図 石垣平面図・断面図

平坦面

27号墳の北側斜面を幅15m程度大きく掘削し、27号墳を埋め立てて、東西17.5m、南北8.5mの平坦面を造成している。掘削部分の崖面の高さは約2mとなっている。造成部分では下層に黒ボク土を多く含む暗褐色土を積み、上面では黄褐色土で整地を行っている。

石垣

平坦面の前面は東部に石垣を設け、その西側は27号墳の列石をそのまま利用している。東西7.5mで、



第78図 仏堂跡出土土器

東辺は北へ折れ曲がっている。石垣は27号墳の東側周溝を埋めた部分で最も高く、1mの高さがある。

この最も高い部分の前面には、石垣から約50cm前の位置に幅3mの石列を据えている。基礎の補強のためのものと考えられる。

掘立柱建物跡

平坦面の東北よりでは掘立柱建物跡が検出された。規模は桁行3間(9.1m)、梁行2間(4.6m)の小規模なものである。平面形は正確な矩形ではなく、やや東へ傾いた平行四辺形となっている。桁行の柱間は3.03m、梁行の柱間は2.3mである。柱穴堀方の直径は30~40cmで、深さは最も深いもので1m程度である。建物の中央北よりの4本の柱に囲まれている範囲で、高さ50cm程度の土壇状のものが残存していた。この土壇状の遺構は、仏像を安置する土台である須弥壇の痕跡と考えられる。

(2) 遺物（第78図）

土師器・須恵器など多くの土器は平坦面の上面、石垣の前面などからが出土している。掘立柱建物跡からもわずかに土師器が出土している。

土器

須恵器碗・小皿・淨瓶、土師器碗・皿・小皿・鍋、瓦器碗、白磁碗などが出土している。

87は掘立柱建物跡のP11から出土した土師器皿である。手づくねで成形され、口縁部が「て」の字に屈曲している。

88~101は平坦面上面の包含層から出土した。88・89は須恵器碗である。見込みはやや凹み、高台脇は丸みをもっている。底部は回転糸切りである。88は体部に丸みをもち、器高が高い。89は器高がやや低く、体部の丸みも弱い。90は須恵器小皿である。やや器高が高く、碗に近い器形である。底部は回転糸切りである。91は須恵器淨瓶である。肩部に2条の突帯をもっている。突帯間に注口があり、剥離の痕跡からするとかなり上方を向いて取り付けられていたようである。92は須恵器壺である。外面に平行タタキが施されている。93・94は土師器底部である。高台はほとんど突出せず、底部は回転糸切りである。95~98は土師器小皿である。95・96は底部が回転糸切りで、97は底部がヘラ切りである。98は手づくねで成形され、口縁部が「て」の字に屈曲している。99は土師器鉢である。外面に平行タタキが施されている。100は瓦器碗である。内外面ともかなり密にミガキが施されている。高台はやや外側に踏ん張った断面方形の輪高台で、底部は回転糸切りである。101は白磁碗である。

102~110は平坦面前面の包含層から出土した。102・103は須恵器碗である。102は外面の回転ナデが強く施され、口縁部が外反している。103は見込みがやや凹み、高台脇は丸みをもっている。104・105は土師器碗である。見込みはかなり明瞭に凹み、高台の突出も大きい。底部は回転糸切りである。106は土師器皿である。手づくねで成形されている。107・108は底部が回転ヘラ切りで、底部中央がやや突出している。109は底部が回転糸切りである。110は瓦器碗である。内面は摩滅しているが、外は密にミガキが施されている。高台はやや外側に踏ん張った断面方形の輪高台で、底部は回転糸切りである。

第4節 B地区の調査

B地区はB群に設定された調査区である。B群には20・22~25号墳などが属するが、そのうち北側の急斜面に位置する22号墳について本発掘調査を実施した。

1 22号墳

22号墳は標高113mに位置（傾斜度20°）する。斜面上方には馬蹄形周溝を巡らす円墳で、横穴式石室を内蔵する。

（1）遺構（第79~85図）

調査前の状況は墳頂部が盗掘のためか天井石等石材を抜き取られ、大きく窟んでいた。また、墳丘東部には里道が造られていた。

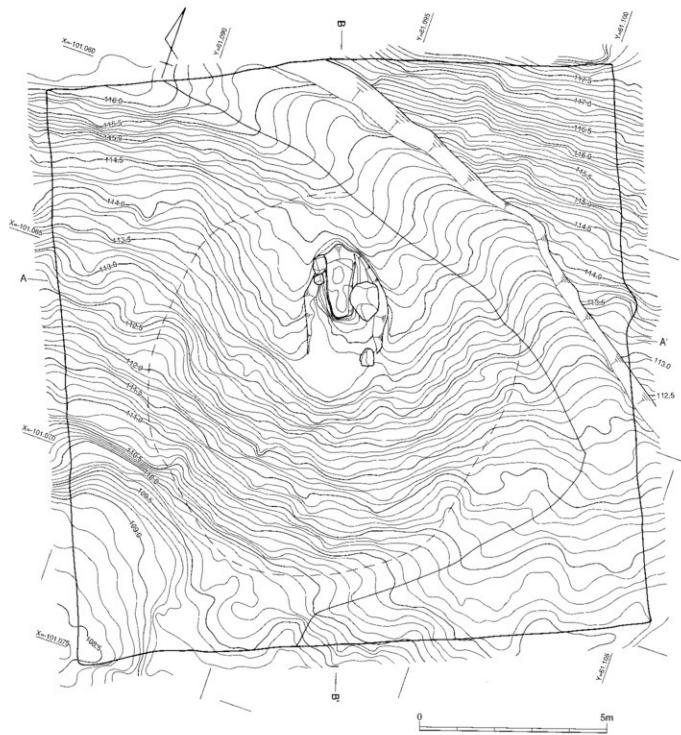
墳丘と外部施設

墳丘規模は、南北11.00m・東西10.50mを測る。石室床面からの高さは現状で2.00m、盛土の高さは最大部で1.50mを測り、黒ボクを多く含む黒褐色土及び黄褐色土を積み上げている。

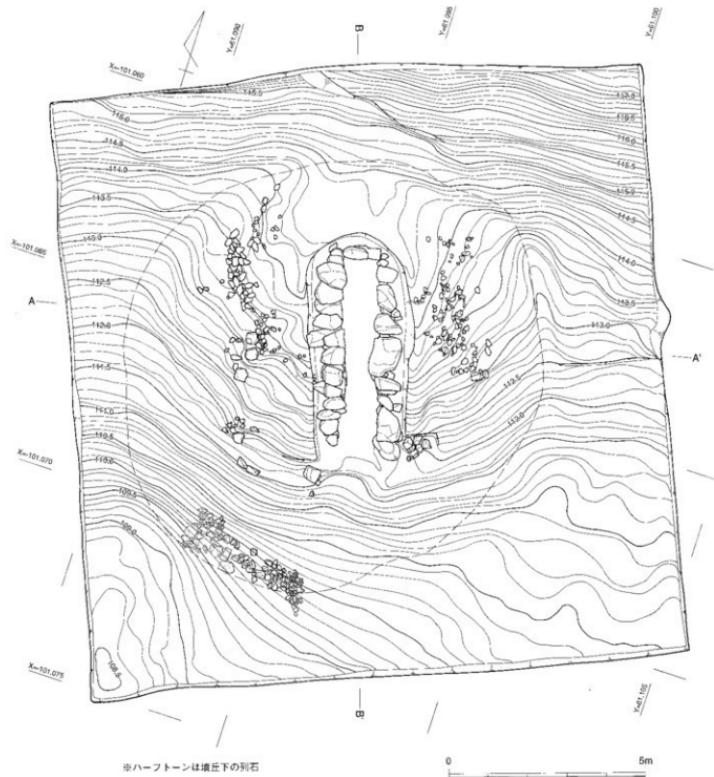
また、列石を天井石周辺の墳丘上段位と石室入口から延びる下段位に巡らせている。さらに、南西の墳丘裾部にも配している。いずれも、墳丘の土留めを目的としたものである。

次に、墳丘の北に造られた馬蹄形の周溝は最大の深さ0.50m、最大幅1.00mで、断面は幅広いU字形を呈している。ただし、周溝の一部が里道による地形改変のため不明瞭となっている。

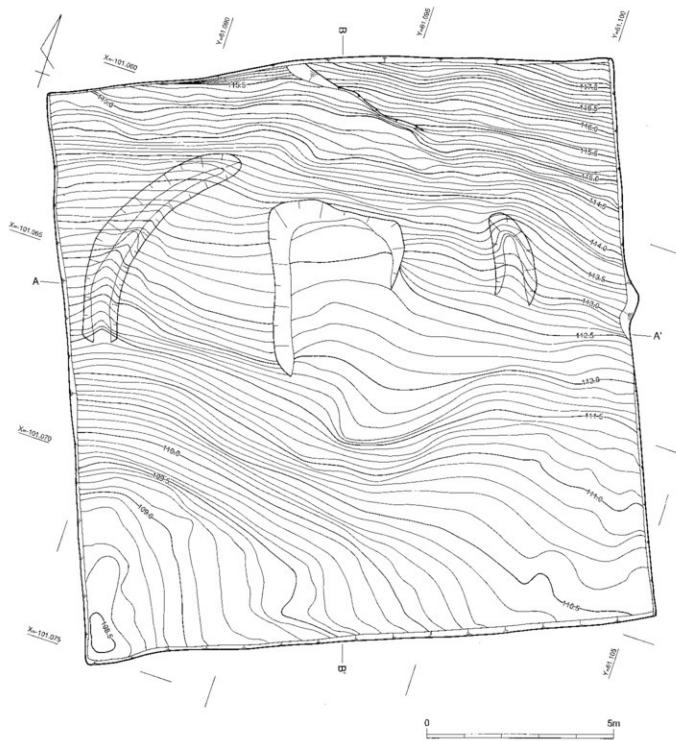
墳丘の築造は、大きさに合わせ地表土等を剥ぎとり、石室の掘方から出る黄色土で整地を行ってから



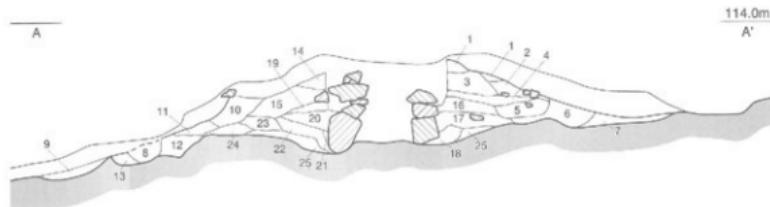
第79図 22号墳墳丘（調査前）



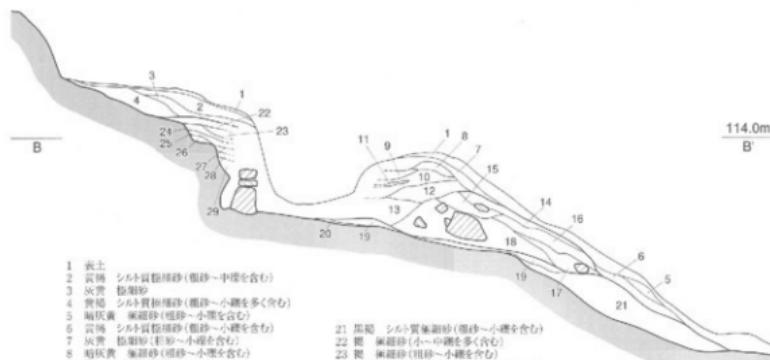
第80図 22号墳埴丘（調査後）



第81図 22号墳墳丘（完掘後）



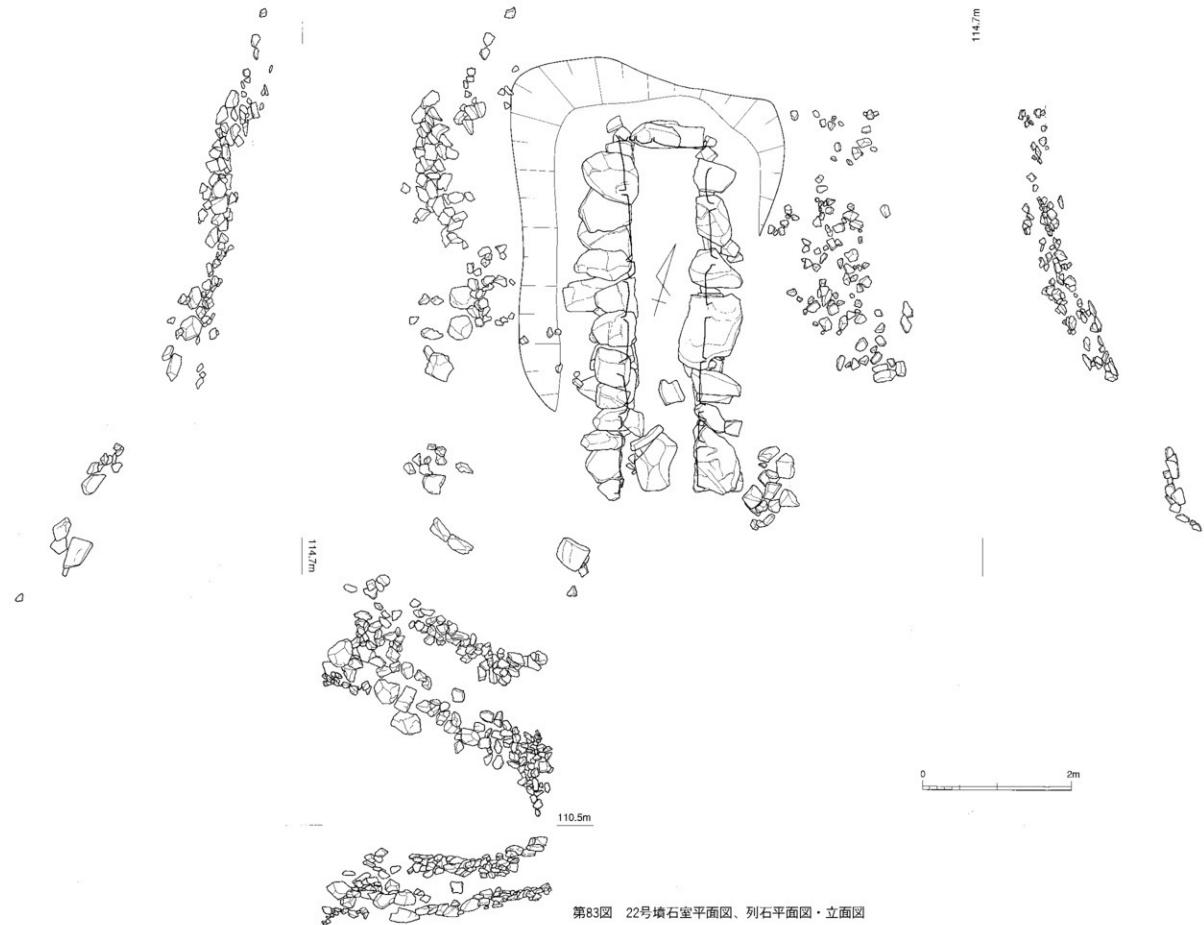
- | | | |
|----|----------------|-------------------|
| 1 | 7.YR3/3崩壊 | 堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 2 | 7.YR3/2崩壊 | 堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 3 | 7.YR1/2崩壊 | 堆積物(粗粒～中礫を含む) |
| 4 | 7.YR1/1崩壊 | 堆積物(粗粒～中礫を含む) |
| 5 | 7.YR2/2崩壊 | 堆積物(粗粒を多く含む) |
| 6 | 7.YR3/1崩壊 | 堆積物(粗粒を含む) |
| 7 | 7.YR2/1崩壊 | シルト質堆積物 |
| 8 | 10YR4/3(二)黄褐色 | 湖相(水の面) |
| 9 | 7.YR4/1崩壊 | 堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 10 | 7.YR3/1崩壊 | 堆積物(粗粒～中礫を含む) |
| 11 | 7.YR3/1崩壊 | 堆積物(粗粒を含む) |
| 12 | 7.YR2/1崩壊 | シルト質堆積物(粗粒を含む) |
| 13 | 7.YR4/1崩壊 | 堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 14 | 7.YR3/2崩壊 | 堆積物(粗粒～中礫を含む) |
| 15 | 7.YR3/2崩壊 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 16 | 7.YR2/1崩壊 | シルト質堆積物(粗粒～中礫を含む) |
| 17 | 7.YR2/1崩壊 | シルト質堆積物(粗粒～中礫を含む) |
| 18 | 7.YR3/3崩壊 | 堆積物(粗粒～中礫を多く含む) |
| 19 | 10YR4/4崩壊 | 湖相(粗粒～小礫を含む) |
| 20 | 7.YR2/2崩壊 | シルト質堆積物(粗粒～中礫を含む) |
| 21 | 7.YR3/3崩壊 | 堆積物(粗粒を含む) |
| 22 | 10YR4/4C-LX黄褐色 | 湖相(粗粒～中礫～粗粒を多く含む) |
| 23 | 10YR4/3-LX黄褐色 | 湖相(粗粒～小礫～粗粒を多く含む) |
| 24 | 7.YR3/1崩壊 | 堆積物(粗粒～中礫を含む) |
| 25 | 7.YR2/1崩壊 | シルト質堆積物(粗粒を含む) |



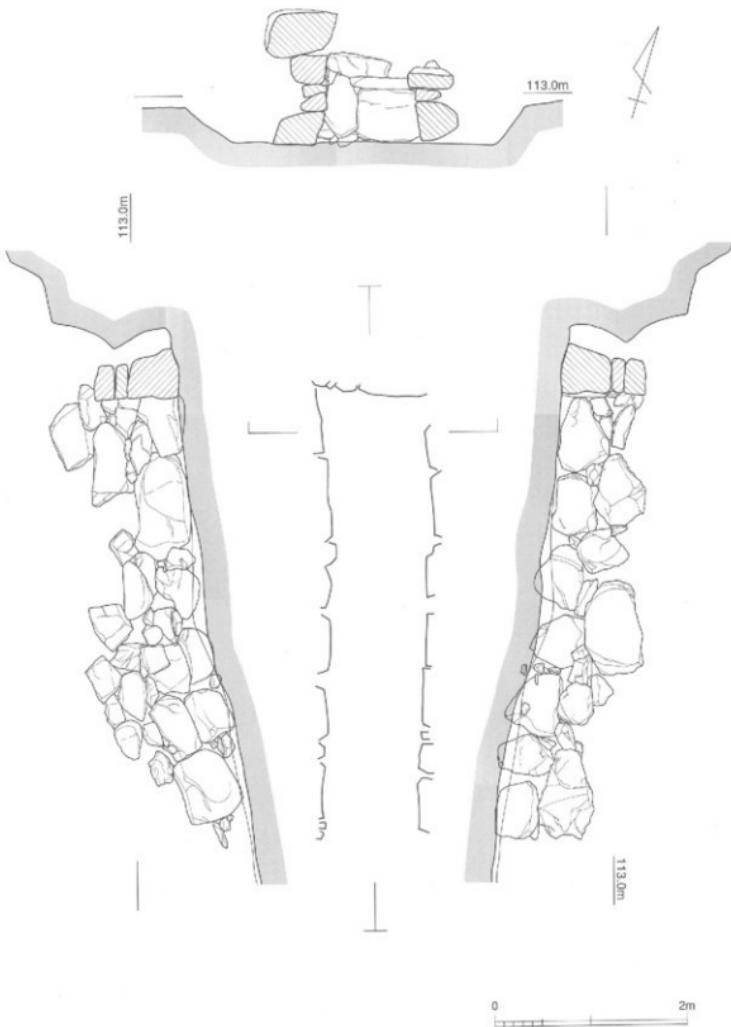
- | | | |
|----|-------|---------------------|
| 1 | 表土 | |
| 2 | 黄褐色 | シルト質堆積物(粗粒～中礫を含む) |
| 3 | 灰青色 | 粗粒 |
| 4 | 黄褐色 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を多く含む) |
| 5 | 灰灰褐色 | 堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 6 | 黄褐色 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 7 | 灰青色 | 粗粒(粗粒～小礫を含む) |
| 8 | 暗灰青色 | 堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 9 | 黑 | シルト質堆積物 |
| 10 | 暗黃褐色 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 11 | 黑 | シルト質堆積物 |
| 12 | 暗灰青色 | 堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 13 | 黑褐色 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 14 | 暗灰青色 | 堆積物(粗粒～中礫を含む) |
| 15 | 暗灰青色 | 堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 16 | 黄褐色 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 17 | 暗灰青色 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 18 | 黑褐色 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 19 | 黑 | 粗細粒(粗粒～小礫を含む) |
| 20 | 灰～黄褐色 | 粗細粒(粗粒～小礫を含む) |
| 21 | 黑褐色 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 22 | 黑 | 堆積物(粗粒～中礫を多く含む) |
| 23 | 黑 | 堆積物(粗粒～中礫を多く含む) |
| 24 | 暗褐色 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 25 | 灰～黄褐色 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 26 | 黑褐色 | シルト質堆積物 |
| 27 | 暗褐色 | 堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 28 | 灰～黄褐色 | シルト質堆積物(粗粒～小礫を含む) |
| 29 | 暗褐色 | 堆積物(粗粒～小礫を含む) |

0 5m

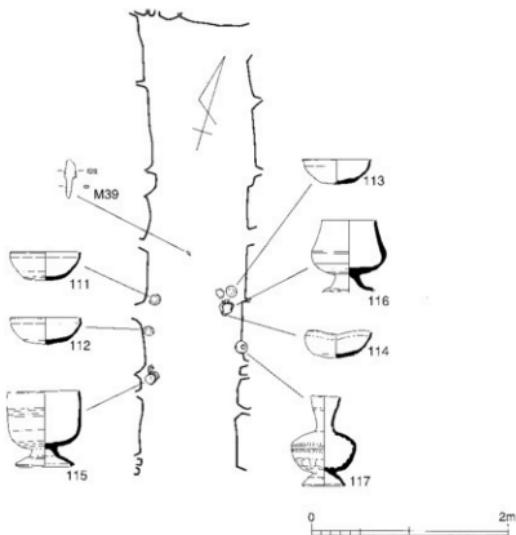
第82図 22号墳墳丘断面図



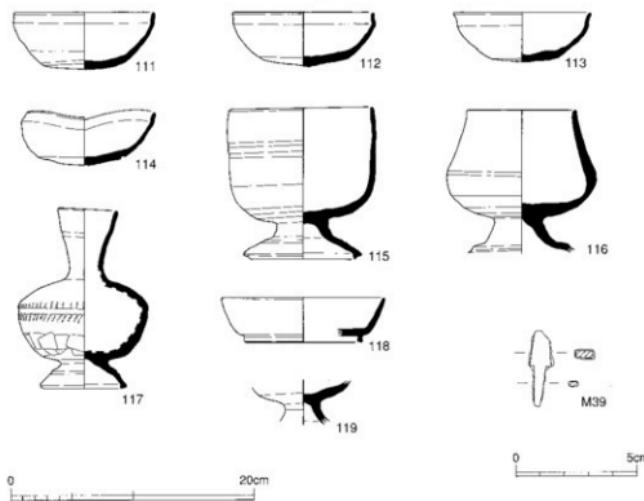
第83図 22号填石室平面図、列右平面図・立面図



第84図 22号填石室平面図・立面図



第85図 22号墳石室遺物出土位置



第86図 22号墳出土遺物

基底石を据えている。その後、側壁の石材構築に伴って、黒ボクを含む黒褐色土及び黄褐色土を積み上げて石室入口から延びる墳丘下段位に列石を巡らす。そして天井石の架構後に、列石を墳丘の両側面に巡らして、天井石の上へ盛土を積み上げていったと考えられる。なお、盛土が一番多くなる南西部の墳丘裾には、さらに2段の列石を巡らせている。

埋葬施設

横穴式石室は主軸をN18°Wにとり、南東方向に開口している。

石室掘方の規模は南北（長軸）4.50m、東西（短軸）3.50mを測る。床面の平面形態は無軸式であり、規模は全長4.70m、玄室長2.30m、同最大幅1.10mである。天井石は調査時には既に無く、側壁が基底石から2段ないし3段程度（残りの良い所で床面から1.40m）残存していたのみである。玄室の範囲は、入口に向かって低く傾斜し始める変換点までと考えている。

石材の積み方では、奥壁の基底石は縱長と横長に2石を組合せている。両側石は横長を基本に積み、羨道部に向かって低くなるように目地を通している。残りの良い所では、持ち送りが認められる。

（2）遺物（第86図）

玄室内からは、わずかに鉄鏹片（M39）が出土したのみである。羨道部からは側壁に沿って須恵器杯（111～114）・台付碗（115・116）・長頸壺（117）が出土している。墳丘北東側の表土から須恵器杯B（118）、墳丘南側の掘付近から須恵器高杯（119）が出土している。

土器

111～114は須恵器杯である。口縁部外面がやや外反する。底部は回転ヘラ切りで、111・113はその後ナデが施されている。

115・116は須恵器台付碗である。底部外面は回転ヘラケズリが施されている。115の体部は深い筒形で、外面に2条の凹線をもっている。116の体部はプランデーグラス形で、口縁部が内済しながら内側にすぼまっている。外面には1条の凹線をもっている。

117は小型の須恵器長頸壺である。頸部に1条の凹線、肩部に1条の凹線と2段の列点文が施されている。体部下位から底部にかけては手持ちヘラケズリが施されている。

118は須恵器杯Bである。底部外面は回転ヘラケズリが施されている。

119は須恵器高杯である。低脚の高杯と考えられる。

金属製品

玄室内で鉄鏹（M39）が出土している。関部は台形関である。

第4章　まとめ

野坂大谷古墳群は、後に井原郷と呼ばれる小地域における最も規模の大きい群集墳である。6世紀後葉以降7世紀後葉まで連続して葬法の変化を追うことができる、後・終末期古墳の良好な典型例ということができる。

第1節 古墳出土の遺物について

(1) 土器

古墳から出土した土器には土師器は含まれず、須恵器のみである。

時期的変遷

まず、南に隣接する摺磨地域での須恵器編年の検討が進んでいることから、それを参考にしながら、蓋杯・杯などの供膳具により時期的な検討をおこなう⁽¹⁾。

I期　杯蓋の口縁部内面に凹みをもっている段階である。30号墳床面で出土したものが一括してまとまっている。その他、12号埴石室床面、13号埴塙丘列石上・漢道部、11号墳、19号墳などでも出土している。杯身の底部および杯蓋の天井部にヘラケズリが施されている。杯蓋の口径は14~15cm前後、杯身の受部径は15~16.5cm程度である。13号墳出土のものは口径が15cm以上のものは含まれていない。やや新しい傾向を示すものだろう。I期は永井編年Ⅱ期3小期、陶邑編年T K 4 3型式に併行すると考えられる。

II期　杯蓋の内面に凹みをもたない段階である。

II期A段階　杯身の底部および杯蓋の天井部にヘラケズリを施すもの。ただし、15のように杯蓋の天井部中央までヘラケズリの及ばないものがある。12号墳玄室床面、11号墳で出土している。杯蓋の口径は13~14cm台、杯身の受部径は14cm台のものが多い。永井編年Ⅱ期4AB小期、東山Ⅰ期古段階、陶邑編年T K 209型式に併行すると考えられる。

II期B段階　杯身の底部および杯蓋の天井部にヘラケズリを施さないものが多く、杯蓋の口径12~13cm台、杯身の受部径13~14cm台とII期C段階のものよりやや大きい段階である。12号墳玄室床面・13号墳漢道部で出土している。永井編年Ⅱ期4C・5A小期、東山Ⅰ期新に併行すると考えられる。

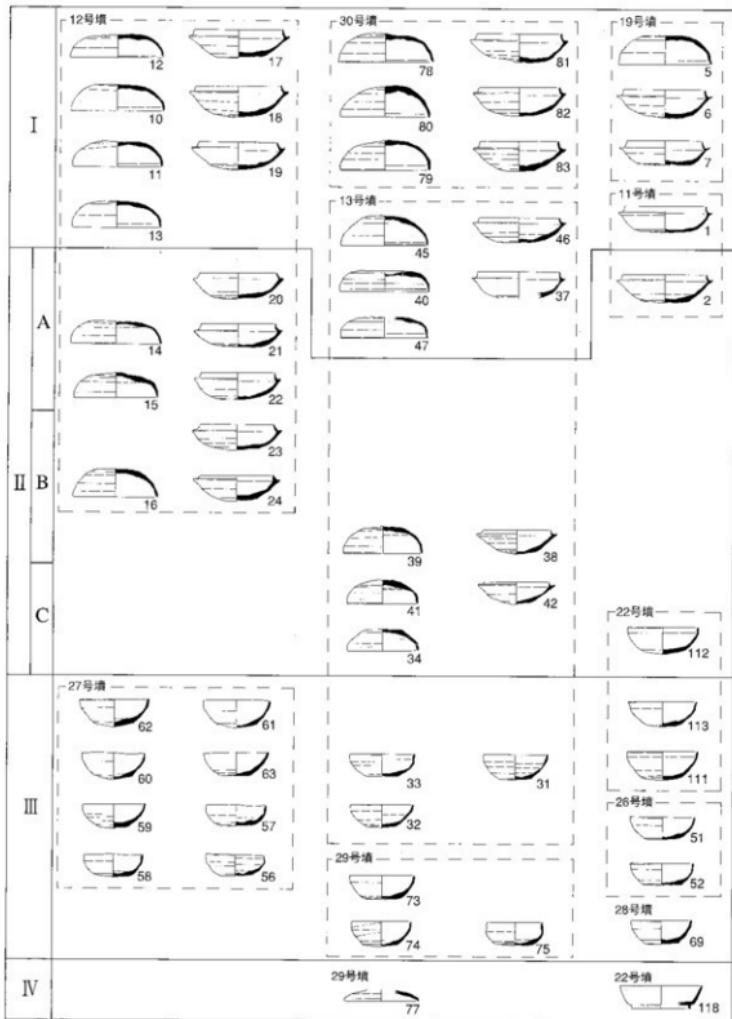
II期C段階　底部および天井部外間にヘラケズリを施さないもので、杯蓋の口径11cm台、杯身の受部径12cm台とII期B段階のものよりやや小さい段階である。13号墳漢道部より出土している。永井編年Ⅱ期5B小期、東山Ⅱ期古に併行すると考えられる。

III期　杯が出土する段階である。13号墳玄室床面、22・26~29号墳で出土している。底部にヘラケズリの施される杯Gやその蓋は出土していない。22号墳出土の杯は口径11cm台とやや大きく、その他のものは10cm台と9cm以下のものがある。小さいものがやや新しい可能性があるがそれほど明確ではない。永井編年Ⅱ期5C小期・Ⅲ期1A小期、東山Ⅱ期新段階・Ⅲ期古段階・飛鳥Ⅱ・Ⅲ期に併行すると考えられる。

IV期　杯B・杯B蓋が出土する段階である。22号墳、28号墳の埴丘外より出土している。杯B蓋はかえりをもたないものである。東山Ⅲ新段階・飛鳥Ⅳ期に併行するものと考えられる。

出土土器の構成

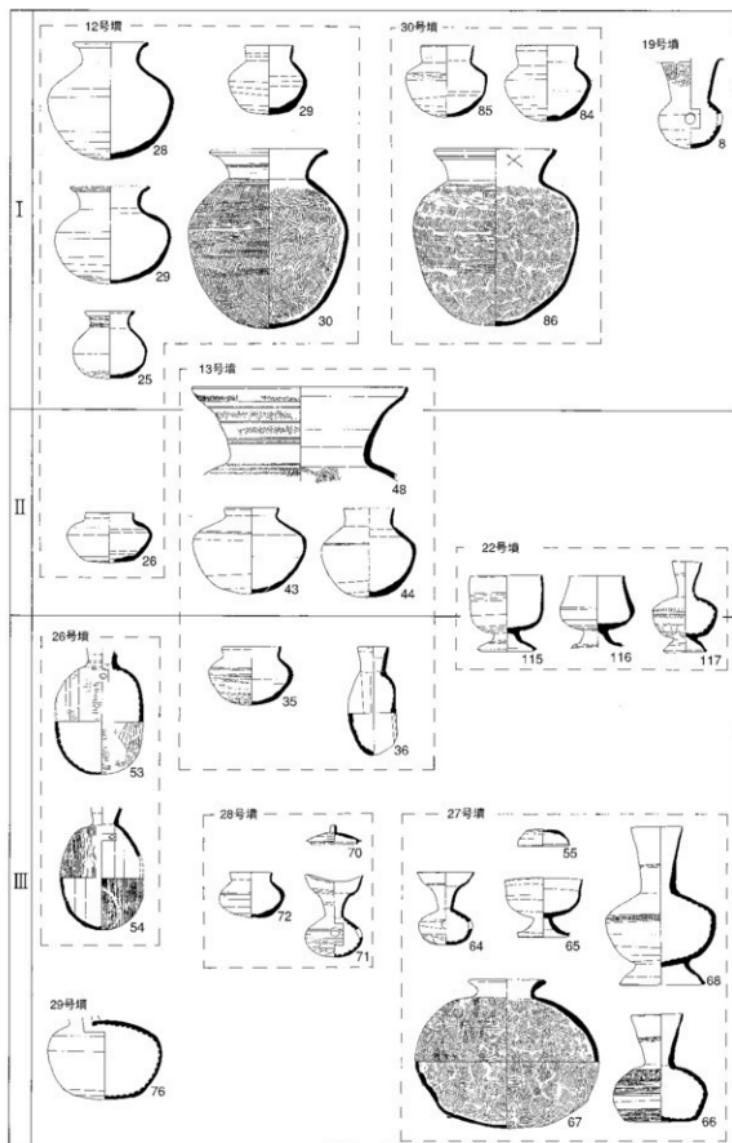
I期では12号墳の石室内で蓋杯が3セット以上、埴丘内で壺・広口壺・直口壺が用いられている。30



第87図 出土須恵器の変遷 1

縮尺は1／8

号埴でも蓋杯が3セット、直口蓋・壺が用いられており、共通性が伺われる。13号埴は追跡に片付けのため土器の出土状況はよくないが、埴丘部で蓋杯・環状把手や鉤爪のついた提瓶が出土している。さら



第88図 出土須恵器の変遷2

に、墳丘北部から甕も出土しているが、Ⅰ期もしくはⅡ期のものであろう。その他、19号墳の石室内では蓋杯2セツと甕が出土している。

Ⅱ期では12号墳石室内で蓋杯が追葬時に用いられ、石室埋土から出土した短頸壺は底部がヘラ切り未調整であることからⅡ期B段階のものと考えられる。13号墳でも追葬時に蓋杯が用いられ、羨道閉塞石部分で出土した短頸壺はⅡ期B段階以降のものと考えられる。

Ⅲ期には杯が使われ、27号墳では8個体が用いられているが、2・3個体が用いられているものが多く、28号墳では1個体のみである。その他、台付碗・甕・短頸壺・長頸壺・提瓶・平瓶・横瓶などが使われ、台付甕・長頸壺・平瓶・横瓶が新たに加わっている。この時期になると玄室内への土器の追葬は極端に少くなり、玄室内では1・2個体の杯、短頸壺（13号墳）、短頸壺の蓋を転用して紅目状に使用したもの（27号墳）など少數の土器が置かれるのみである。その他は玄門部から羨道部にかけて置かれている場合が多い。このうち26号墳では提瓶、29号墳では平瓶、27号墳では長頸壺の口縁部が打ち欠かれ、27号墳の横瓶も故意に打ち割られていたと考えられる。

（2）金属製品

大刀、刀子、鉄鎌、馬具、耳環などが出土している。野坂大谷古墳群に先行する井原至山古墳（MT15型式～TK10型式）⁽¹²⁾ の出土品を含めて検討すれば、金属製品の変遷を見て取ることができる。

大刀は12号墳で確認できるのみである。刀子は12・13・26・31号墳で出土している。

鉄鎌は有茎平根式と長頭式が出土している⁽¹³⁾。長頭式の鉄鎌の闊は暈状闊である。12号墳では多数（13点）の長頭式と少數（3点）の有茎平根式の鉄鎌が用いられている。13号墳では少數（5点）の有茎平根式のみが出土している。Ⅲ期の古墳では22・26・27号墳で1、2点の鉄鎌が出土し、さらに数が減少している。先行する井原至山古墳では長頭柳葉式のほかに無茎式、片逆刺の付いた長頭式、半頭式などやや多様な種類の鉄鎌が出土している。

馬具は12・13号墳で出土している⁽¹⁴⁾。いずれも鉄製素環鏡板付轡が出土しており、12号墳では鉄具も出土している。12号墳出土の鉄製素環鏡板付轡は素環の鏡板に立闇をもたず、引手が素環に連なるもので、Ⅰ期のものと考えられる。13号墳出土の素環鏡板は矩形立闇をもち、街に引手が連なっていることから、12号墳のものより後出的なものであるが、鏡板の径が比較的大きいことから、Ⅰ期に属する可能性が高いと考えられる。先行する井原至山古墳では鉄製素環鏡板付轡、辻金具、鉄具、兵庫鎖などが出土している。轡は素環の鏡板に小型の環状立闇をもつていて、引手が素環に連なる点では12号墳出土例と同様であるが、素環の径が7.5cm×6.5cmと小さい。

耳環 13号墳でのみ出土している。幅2.5cmの銅芯銀貼のものと幅1.9cmの銅芯金貼の2サイズがあり、羨道部で出土した前者がⅡ期もしくはⅠ期、玄室内で出土した後者がⅢ期に属するものと考えられる。

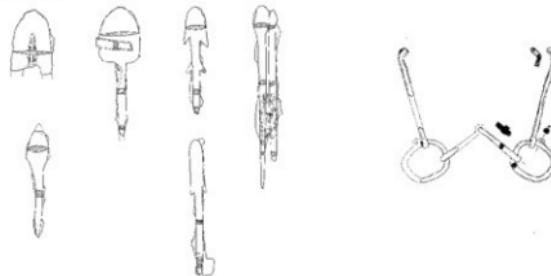
第2節 古墳群について

（1）古墳群の変遷

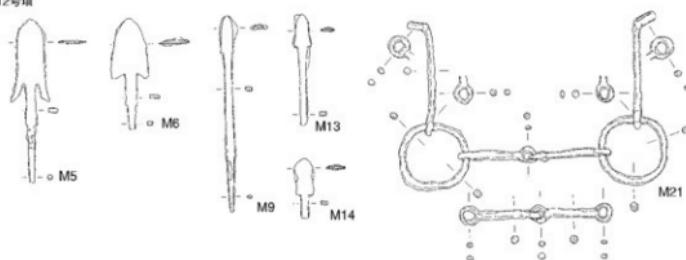
古墳群は谷間の斜面に立地し、木棺直葬墳（丸山3・4号墳など）や初源期の横穴式石室墳である井原至山古墳など6世紀中頃までの古墳が丘陵尾根上に立地しているのに対して、6世紀後葉までの時期に立地が変化していることが伺える。

以下に古墳群の変遷について述べるが、調査を行った古墳がA群以外に非常に少ないと、A群を中心にして述べることとする。

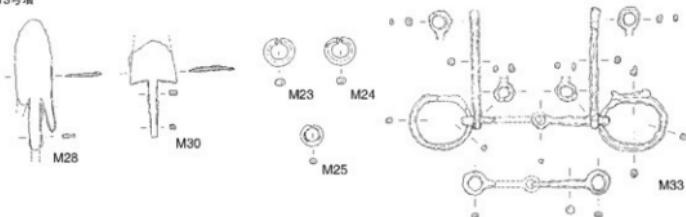
井原西山古墳



12号墳



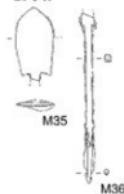
13号墳



27号墳



26号墳



22号墳



馬具の縮尺は 1 / 8
その他は 1 / 4

第89図 出土の金属製品

第3表 野坂大谷古墳群一覧表

造構名	12号墳	13号墳	26号墳	27号墳	28号墳	29号墳	30号墳	31号墳	22号墳
地区	A	A	A	A	A	A	A	A	B
時期	I～II B	I・II B～III	III	III	III	III	III	III	III
墳丘規模	11.2m×12.2m	7.2×8.5	6.5×5.5	7.0×7.5	6.0×5.6	5.5×5.0	なし	なし	11.0×10.5
列石	○	○	○	○	○	○	○	○	○
主体部	横穴式石室	横穴式石室	横穴式石室	横穴式石室	横穴式石室	横穴式石室	横穴式石室	横穴式石室	横穴式石室
袖	両袖	右片袖	無袖	無袖	無袖	無袖	無袖	無袖	無袖
石室全長	4.4	6.8	4.35	3.55	2.8	3.8			4.7
玄室長	2.7	2.7	2.7	1.6	2.4	1.9	1.7	1.35	2.3
玄室幅	1.8	1.35	0.7	0.8	0.8	0.75	0.8	0.55	1.1
床面	敷石	敷石	柏台	敷石	敷石	敷石	敷石	柏台	
備考	周溝内木棺			組合式石棺					

I期 12号墳、30号墳が造られ、13号墳も12号墳に引き続き、この時期の最終末に造られたと考えられる。D群では11号墳、19号墳が造られている。この時期には少なくとも複数の群で造墓が開始されていることが確認される。

II期 12号墳ではA・B段階での追葬が認められ、以後は使用されなくなる。13号墳ではC段階での追葬が認められる。調査した範囲内では新たな古墳の造営は確認できないが、調査区外に位置する14号墳がこの時期に造墓された可能性が考えられる。D群では11号墳で追葬が行われている。

III期 13号墳で追葬が認められ、新たに26～29号墳が造られる。斜面上方に存在するものが新しいものと仮定すれば27号墳→29号墳→28号墳、26号墳→28号墳という順番が想定される。31号墳については土器が出土していないため時期がよく分からぬが、26号墳と同様な柏台を使用していることからIII期のものと考えられる。B群の22号墳はIII期のものと考えられるが、杯の径がやや大きくなるのなかでも初頭に位置するものとしたい。

(2) 墳丘

横穴式石室を埋葬主体とする古墳は13号墳を除き山側に周溝を廻らし、平面形は12・13号墳が比較的きれいな円形、22・26～29号墳が不整円形を呈している。横穴式石室を埋葬主体とする30・31号墳は明瞭な墳丘や周溝をもっていない。

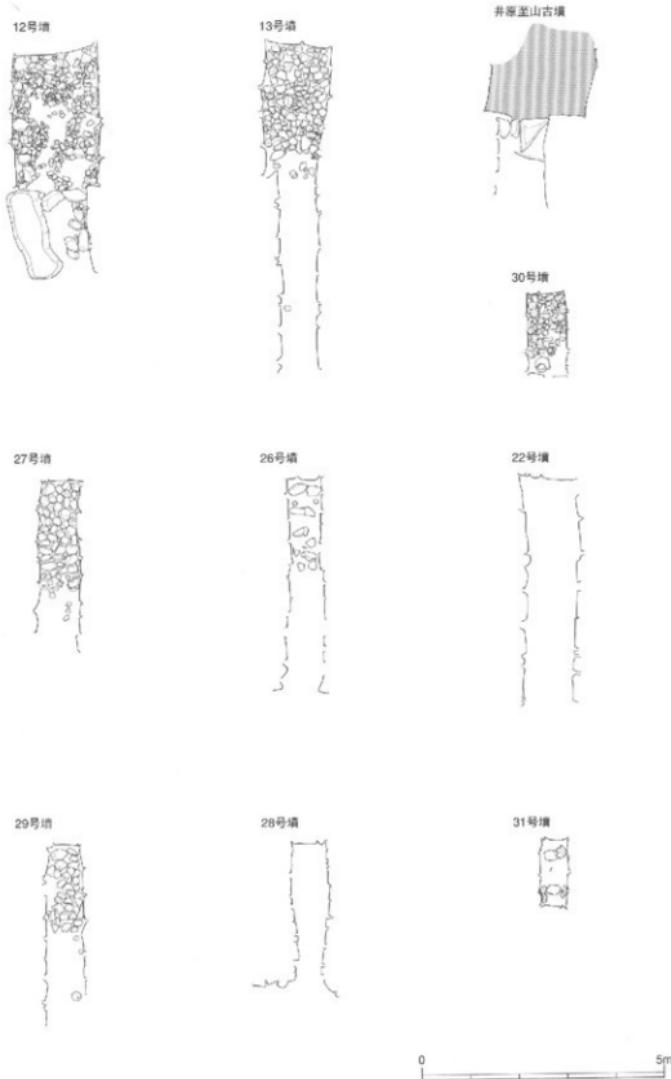
古墳の構築はまず周溝・石室埋方部分の地山を掘削し、掘削した黄土で整地を行っている。墳丘の盛土はほとんどが黒ボク土で行われ、黄土との互層の堆積はほとんど認められない。土質が脆弱であることから、主として斜面下方にあたる墳丘前方部に石材を置いて土留めをしている。22号墳では比較的急斜面に位置していることから、最も低い左前方部に2列の列石を構築した上に墳丘を構築し、前方から後方に向かって墳丘が高くなるに応じて列石を追加している。

墳丘規模はA群においてはI期の12号墳が直径12m前後、13号墳が直径8m前後であるのに対して、III期には直径7～5mと縮小するように見えるが、B群ではIII期の22号墳が直径11m近くある。全体的には縮小傾向にあるのかもしれないが、それぞれの群ごとに複雑な様相を示しているかもしれない。

(3) 埋葬主体

埋葬主体には横穴式石室、堅穴式石室、木棺直葬がある。

横穴式石室 I期の12号墳は両袖式、13号墳は右肩袖式であり、III期のものは全て無袖式のものである。野坂大谷古墳群に先行する井原至山古墳は両袖式であり、楕石を有する点でも12号墳と系譜を同じ



第90図 石室のプラン

くしている可能性が高い。石室の規模は玄室幅でみるとⅠ期の12号墳では1.8m、13号墳では1.3mで大きく、Ⅲ期では22号墳が1.1mである以外は0.7~0.8mで、基本的には墳丘と同じく時期が下がるほどに縮小する傾向がうかがわれる。

棺は、28号墳が組合式石棺である以外、鉄釘が出土していないことから組合式の木棺が使用されたと考えられる。

竪穴式石室 30号墳はⅠ期に属する竪穴式石室である。長さ1.7m、幅0.8mとⅠ期の横穴式石室の玄室と比べても小型である。この時期に用いられる埋葬主体の型式としては異例のもので、同様なものは県内では北浦27-4号墳（豊岡市）ぐらいたしか挙げることができない⁽⁵⁾。Ⅰ期のなかでは副葬品中に鉄製品のみられないことも特徴的である。

31号墳はⅢ期に属する考えられる極めて小さい竪穴式石室である。竪穴式ではあるが山側の小口は奥斂状、谷側の小口は開口部状を呈しており、横穴式石室の系譜を引くものと考えられる。

これらの埋葬施設をもつ古墳は無墳丘で、副葬品も横穴式石室墳に比べて格差が見られることから從属性的な立場にあると考えられるが、次に述べる木棺直葬に比べると他の古墳との距離は遠く、明確な特定の古墳との從属関係ははっきりしない。

木棺直葬 12号墳の北側周溝内に設けられている。出土遺物はないが、12号墳に從属するものと考えられよう。このようなものは同じ氷上郡に属する青垣町の応相寺5号墳でも認められる⁽⁶⁾。

第3節 仏堂跡について

大きく斜面を削り、前面には石垣を設けて平坦面を造成して掘立柱建物跡が1棟のみ設けられている。掘立柱建物跡は3間×2間（9.1m×4.6m）と小規模であるが、柱穴は深く掘り込まれている。建物の中央奥側には須弥壇と推定される土壇状の痕跡があり、この建物が仏堂であることを示している。出土遺物から時期は11~12世紀頃のものと考えられるが、須恵器淨瓶・「て」の字状口縁の土師器皿の出土していることでもこの遺構の性格を示している。平安時代においては山間部での造寺活動が盛んに行われているが（近隣では石龕寺）、その小規模な活動を示す珍しい検出例ということができる。

- (1) 永井信弘「播磨における古墳時代須恵器の変遷」「小谷遺跡（第6次）」加西市教育委員会1995年、菱田哲郎「東山古墳群出土土器の編年とその特色」「東山古墳群Ⅰ」中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室1999年、小川真理子「中町における7世紀後半の須恵器の様相」「思い出遺跡群Ⅱ」中町教育委員会2000年
- (2) 藤井祐介「井原至山遺跡」氷上郡山南町1975年
- (3) 鉄器については以下の文献を参考とした。杉山秀宏「古墳時代の鉄器について」「櫻原考古学研究所論集第8」1988年、尾上元規「古墳時代鉄器の地域性－長頸式鉄器出現以降の西日本を中心として－」「考古学研究」第40卷第1号1993年
- (4) 馬具については以下の文献を参考とした。岡安光彦「いわゆる「素環の巻」について－環状鏡板付巻の型式学的分析と編年」「日本古代文化研究」創刊号1984年、岡安光彦「環状鏡板付巻の規格と多变量解析」「日本古代文化研究」第2号1985年
- (5) 潟戸谷暗「北浦古墳群・立石墳墓群」1987年
- (6) 氷上郡教育委員会「氷上郡埋蔵文化財調査報告書Ⅲ」2000年

土器一覧表1

番号	器種	器形	地区	通鑑	層位	口径	器高	底径	その他の法量	調整および備考
1	須恵器	杯舟		11号墳	トレンチ6石室内	13.25	4.5			底部内面～体部外側は回転ナデ、底端内面中央は仕上げナデ、底部外側は回転ヘラケズリ
2	須恵器	杯舟		11号墳	トレンチ6石室内	13.8	4.65			底部内面～体部外側は回転ナデ、底端内面中央に当て具痕、底部外側は回転ヘラ切り
3	須恵器	瓶		14号墳	トレンチ5	(13.8)				内腹とも回転ナデ
4	須恵器	瓶		14号墳	トレンチ5			5.2		内腹～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラ切り
5	須恵器	杯蓋		19号墳	トレンチ4	15.0	4.7			天井部内面～口縁部外側は回転ナデ、天井部外側は回転ヘラケズリ、天井部内面中央は當て具痕。
6	須恵器	杯身		19号墳	トレンチ4	13.3	4.8			底部内面～一部外壁は回転ナデ、底部外側は回転ヘラケズリ、底部内面に當て具痕
7	須恵器	杯身		19号墳	トレンチ4	12.2	3.9			底部内面～一部外壁は回転ナデ、底部外側は回転ヘラケズリ
8	須恵器	酒		19号墳	トレンチ4				底径10.3	内腹～体部の頂上位は回転ナデ、体部外側中位～底部外側は回転ヘラケズリ
9	須恵器	長頸瓶		25号墳	トレンチ8					内腹とも回転ナデ
10	須恵器	杯蓋	A	12号墳	石室床面	14.9	4.4			天井部外側は回転ヘラケズリ、口縁部外側～内腹は回転ナデ
11	須恵器	杯蓋	A	12号墳	石室床面	14.5	4.2			天井部外側は回転ヘラケズリ、口縫部外側～内腹は回転ナデ
12	須恵器	杯蓋	A	12号墳	石室床面	15.25	4.6			天井部外側は回転ヘラケズリ、口縫部外側～内腹は回転ナデ、天井部内面は仕上げナデ
13	須恵器	杯蓋	A	12号墳	石室床面	14.2	4.3			天井部外側は回転ヘラケズリ、口縫部外側～内腹は回転ナデ、天井部内面に當て具痕あり
14	須恵器	杯蓋	A	12号墳	石室床面	14.05	3.85			天井部外側中央はヘラ切り後ナデ、天井部外側縁部は回転ヘラケズリ、口縫部外側～内腹は回転ナデ
15	須恵器	杯蓋	A	12号墳	石室床面	13.6	4.05			天井部外側中央はヘラ切り後ナデ、天井部外側縁部は回転ヘラケズリ、口縫部外側～内腹は回転ナデ、天井部内面に當て仕上げナデ
16	須恵器	杯蓋	A	12号墳	石室床面	13.65	4.55			天井部外側はヘラ切り未調整、体部外側～内腹は回転ナデ
17	須恵器	杯身	A	12号墳	石室床面	14.5	4.6			内腹～体部外側は回転ナデ、底部内面中央は仕上げナデ、底部外側は回転ヘラケズリ
18	須恵器	杯身	A	12号墳	石室床面	13.95	5.09			内腹～体部外側は回転ナデ、底部内面中央は仕上げナデ、底部外側は回転ヘラケズリ
19	須恵器	杯身	A	12号墳	石室床面	12.7	4.05			内腹～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラケズリ
20	須恵器	杯身	A	12号墳	石室床面	12.55	4.4			内腹～体部外側は回転ナデ、底部内面中央は仕上げナデ、底部外側は回転ヘラケズリ
21	須恵器	杯身	A	12号墳	石室床面	12.2	4.0			内腹～体部外側は回転ナデ、底部内面中央は仕上げナデ、底部外側は回転ヘラケズリ、底部内面に當て具痕あり
22	須恵器	杯身	A	12号墳	石室床面	12.05	4.4			内腹～体部外側は回転ナデ、底部内面中央は仕上げナデ、底部外側は回転ヘラケズリ
23	須恵器	杯身	A	12号墳	石室床面	11.9	4.25			底部内面～一部外側は回転ナデ、底部内面中央は仕上げナデ、底部外側はヘラ切り未調整
24	須恵器	杯身	A	12号墳	石室床面	11.9	4.15			内腹～体部外側は回転ナデ、底部外側はヘラ切り未痕ナデ
25	須恵器	広口壺	A	12号墳	石室床面	7.45	10.95		底径12.05	内腹～口縁部外側は回転ナデ、颈部外側はカキ目、体部外側は回転ナデ、底部外側は手持ちヘラケズリ後ナデ
26	須恵器	短頸壺	A	12号墳	石室埋土	7.05	8.25	7.9	底径13.95	底部内面はナデ、体部内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラケズリ
27	須恵器	直口壺	A	12号墳	填丘盛土	7.7	11.3		底径12.9	内腹～体部の頂上位は回転ナデ、体部外側下位～底部外側は回転ヘラケズリ
28	須恵器	広口壺	A	12号墳	填丘盛土	11.9	19.9		底径20.7	底部内面はナデ、体部内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラケズリ
29	須恵器	広口壺	A	12号墳	填丘盛土	12.8	16.8		底径19.05	底部内面はナデ、体部内面～体部外側は回転ナデ、体部外側下位～底部外側は回転ヘラケズリ
30	須恵器	壺	A	12号墳	填丘盛土	18.6	29.15		底径26.3	体部内面は同心円當て具痕、口縫部外側は跳丸ナデ、体部外側上位～中位は平行タキ後カキ目、体部外側下位～底部外側は平行タキ後カキ目
31	須恵器	杯	A	13号墳	玄室床面	10.3	4.1	5.45		内腹～体部外側は回転ナデ、体部外側はヘラ切り未痕ナデ
32	須恵器	杯	A	13号墳	玄室床面	10.15	3.75	5.2		底部内面は仕上げナデ、体部内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラ切り後ナデ
33	須恵器	杯	A	13号墳	玄室床面	10.6	3.7	5.5		内腹～体部外側は回転ナデ、体部外側はヘラ切り未痕ナデ
34	須恵器	杯蓋	A	13号墳	玄室床面	11.45	3.45			天井部外側は回転ヘラ切り後ナデ、体部外側～体部内面は回転ナデ、天井部内面は仕上げナデ、裏口セット

番号	器種	器形	地区	遺構	属位	口 径	基 高	底 径	その他の法量	調 整 お よ び 備 考
35	須恵器	短頸壺	A	13号墳	玄室床面	9.3	9.6		腹径13.8	底部内面はナデ、体部内面は圓転ナデ、頭部内面はナデ、口縁部内面～体部外側は圓転ナデ、体部外側下位は斜転ナデ後カキモ、底部外側は圓転ヘラケズリ後カキモ
36	須恵器	短瓶	A	13号墳	玄室床面	4.8	17.9		腹径14.2	口縁部は斜転ナデ、体部は円盤充満による防漏、底部側から外側はナデ、圓錐ナデ、圓転ヘラケズリ
37	須恵器	杯身	A	13号墳	狭道部床面	(13.3)				底部内面は仕上げナデ、体部内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側はヘラ切り後ナデ
38	須恵器	杯身	A	13号墳	狭道部床面	11.0	4.05			底部内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側は圓転ヘラケズリ
39	須恵器	杯盤	A	13号墳	狭道部床面	12.8	4.5			天井部外側はヘラケズリ、体部外側～体部外側は圓転ナデ、天井部内面はヘラ切り後ナデ
40	須恵器	杯盤	A	13号墳	狭道部床面	(14.4)	3.4			天井部外側は圓転ヘラケズリ、体部外側～内面は圓転ナデ、天井部内面は仕上げナデ
41	須恵器	杯盤	A	13号墳	狭道部床面	11.35	3.95			天井部外側は圓転ヘラケズリ後ナデ、体部外側～内面は圓転ナデ
42	須恵器	杯身	A	13号墳	石室埋土	10.65	3.7			底部内面は仕上げナデ、体部内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側はヘラ切り後ナデ
43	須恵器	短頸壺	A	13号墳	狭道部床面	8.35	14.15		腹径18.6	底部内面はナデ、体部内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側下位は圓転ヘラケズリ、底部外側はナデ
44	須恵器	短頸壺	A	13号墳	狭道部床面	8.0	14.7		腹径15.6	底部内面はナデ、体部内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側は圓転ヘラケズリ
45	須恵器	杯蓋	A	13号墳	列石南西側	13.95	4.75			天井部外側はヘラケズリ、体部外側～内面は圓転ナデ
46	須恵器	杯身	A	13号墳	列石南西側	13.1	4.05			底部内面は仕上げナデ、体部内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側はヘラ切り後ナデ
47	須恵器	杯蓋	A	13号墳	埴丘部側	(14.05)				天井部外側は圓転ヘラケズリ、体部外側～体部内面は圓転ナデ、天井部内面は仕上げナデ
48	須恵器	壺	A	13号墳	埴丘北側	(34.7)				口縁部内面は圓転ナデ、体部内面は同心円凸で具模、体部外側は斜子後カキモ
49	須恵器	短瓶	A	13号墳	埴丘北側					片側の側面は圓転ヘラケズリ、内面は圓転ナデ
50	須恵器	壺	A	13号墳	列石南西側					片側の側面はカヨミ、内面は圓転ナデ
51	須恵器	杯	A	26号墳	玄室床面	10.5	3.6			底部内面は仕上げナデ、内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側は圓転ヘラ切
52	須恵器	杯	A	26号墳	玄室床面	10.2	3.6			内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側は圓転ヘラ切
53	須恵器	短瓶	A	26号墳	玄室床面				腹径22.0×14.6	側面中央はナデ、側面～腹縁部は平行タキ後圓転ナデ、背面中央はナデ、背面部はヘラ切ちヘラケズリ、側面は圓転ナデ
54	須恵器	短瓶	A	26号墳	狭道部				腹径20.5×18.6	体部外側はカキモ、体部内面は圓転ナデ、開窓部内面はナデ、口縁部内面は圓転ナデ
55	須恵器	壺	A	27号墳	玄室床面	8.3	2.8			天井部外側は手持ちヘラケズリ、体部外側～内面は圓転ナデ
56	須恵器	杯	A	27号墳	狭道部床面	9.4	3.55	5.15		内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側はヘラ切
57	須恵器	杯	A	27号墳	狭道部床面	9.75	3.5	6.1		内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側はヘラ切
58	須恵器	杯	A	27号墳	狭道部床面	9.55	3.7	4.75		内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側はヘラ切
59	須恵器	杯	A	27号墳	狭道部床面	10.29	4.1	5.6		内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側はヘラ切
60	須恵器	杯	A	27号墳	狭道部床面	10.25	4.5	6.4		内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側はヘラ切
61	須恵器	杯	A	27号墳	狭道部床面	10.9	4.55	6.8		内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側はヘラ切
62	須恵器	杯	A	27号墳	狭道部床面	11.02	4.6	6.7		内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側はヘラ切
63	須恵器	杯	A	27号墳	狭道部床面	10.55	3.95	5.2		内面～体部外側は圓転ナデ、底部外側はヘラ切
65	須恵器	壺	A	27号墳	狭道部床面	9.2	11.9			頭部内面～体部外側上位は圓転ナデ、体部外側中位は圓転ヘラケズリ、体部外側下位は手持ちヘラケズリ
64	須恵器	合付壺	A	27号墳	狭道部床面	12.65	9.7	8.3		杯部底部内面は仕上げナデ、割部側面内面～体部外側は圓転ナデ、脚部外側は圓転ナデ
66	須恵器	壺	A	27号墳	狭道部床面	8.4	17.6	11.75	腹径15.55	口縁部内面～口縁部外側は圓転ナデ、体部外側～底部外側はカヨミ、圓錐ナデ、圓部外側は斜子後カキモ
67	須恵器	短瓶	A	27号墳	狭道部床面	11.65	24.3		腹径30.15	口縁部外側はも圓転ナデ、体部外側は平行タキ後カキモ、体部内面は当て抜痕後圓転ナデ
68	須恵器	壺	A	27号墳	狭道部床面	9.28	25.9	13.0	腹径18.1	口縁部内面～体部外側中位は圓転ナデ、体部外側下位は圓転ヘラケズリ、直筒外側はナデ、圓部外側は斜子後カキモ
69	須恵器	杯	A	28号墳	石棺上	9.7	3.9			底部内面は仕上げナデ、内面～体部外側は圓転ナデ、体部内面下部は圓転ヘラケズリ、底部外側は圓転ヘラ切り後ナデ、カヨミ抜痕あり

番号	器種	絵形	地区 ¹⁾	遺構	層位	口径	基高	底径	その他の法量	
									天井部外側は回転ヘラケズリ、縁部外側～天井部内面は回転ナデ、天井部内面中央は仕上げナデ	
70	須恵器	蓋	A	28号墳	石棺前床面	7.3	3.3			
71	須恵器	施	A	29号墳	石棺前床面	9.3	13.5		内面～体部上半は回転ナデ、体部下半は回転ヘラケズリ手持ちヘラケズリ	
72	須恵器	短假鉢	A	28号墳	石棺前床面	6.3	7.5		底径9.4 底径10.5	
73	須恵器	杯	A	29号墳	玉室床面	10.45	3.85			
74	須恵器	杯	A	29号墳	隧道床面	9.6	4.1		内面～体部外側は回転ナデ、底部内面～体部外側上半は回転ナデ、底部下半は回転ヘラケズリ、底部外側はヘラ切り	
75	須恵器	杯	A	29号墳	隧道外側	8.95	3.7		内面～体部外側は回転ナデ、底部外側はヘラ切り	
76	須恵器	平底	A	29号墳	隧道床面				内面～体部外側は回転ナデ、底部外側下辺は回転ヘラケズリ、底部外側はナデ	
77	須恵器	杯D蓋	A	29号墳	堆丘北側周溝	(12.0)			内外面と蓋転ナデ	
78	須恵器	杯蓋	A	30号墳	石室床面	15.4	4.8		天井部内面～口縁部外側は回転ナデ、天井部外側は回転ヘラケズリ、天井部内面中央に當て具痕あり、80とセッタ	
79	須恵器	杯蓋	A	30号墳	石室床面	14.5	4.9		天井部内面～口縁部外側は回転ナデ、天井部外側は回転ヘラケズリ、天井部内面中央に當て具痕あり、80とセッタ	
80	須恵器	杯蓋	A	30号墳	石室床面	14.5	5.1		天井部内面～口縁部外側は回転ナデ、天井部外側は回転ヘラケズリ、天井部内面中央に當て具痕あり、80とセッタ	
81	須恵器	杯身	A	30号墳	石室床面	13.7	4.6		底径内面～体部外側は回転ナデ、底部内面中央に當て具痕、底部外側はヘラケズリ、70とセッタ	
82	須恵器	杯蓋	A	30号墳	石室床面	13.1	4.7		底径内面～体部外側は回転ナデ、底部内面中央に當て具痕、底部外側は回転ヘラケズリ、70とセッタ	
83	須恵器	杯蓋	A	30号墳	石室床面	12.8	4.9		底部内面～体部外側は回転ナデ、底部内面中央に當て具痕、底部外側はヘラケズリ、80とセッタ	
84	須恵器	舌	A	30号墳	石室床面	9.75	14.2		底径内面はナデ、底部内面～体部外側は回転ナデ、底部外側はカキ目、底部外側は回転ヘラケズリ	
85	須恵器	蓋	A	30号墳	石室床面	8.6	11.7		底径14.2 底径13.5	
86	須恵器	蓋	A	30号墳	石室床面	19.8	26.9		底径27.1	
87	土師器	皿	A	仏堂跡	P11	(10.0)	1.0		底径内面はナデ、口縁部外側は回転ココナデ	
88	須恵器	輪	A	仏堂跡	平坦面上面包含層	16.6	6.0	5.0	内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラ切り	
89	須恵器	輪	A	仏堂跡	平坦面上面包含層	(15.6)	5.1	(5.5)	内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラ切り	
90	須恵器	小輪	A	仏堂跡	平坦面上面包含層	9.3	3.1	4.55	内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラ切り	
91	須恵器	淨瓶	A	仏堂跡	平坦面上面包含層			15.0	底径22.25	
92	須恵器	甕	A	仏堂跡	平坦面上面包含層				底径内面はナド、底部外側は回転ナデ、内面はナデ	
93	土師器	底部	A	仏堂跡	平坦面上面包含層			8.0	外側は平行タキ、内面はナデ	
94	土師器	底部	A	仏堂跡	平坦面上面包含層			5.5	内面・体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラ切り	
95	土師器	皿	A	仏堂跡	平坦面上面包含層	9.6	1.95	5.7	内面・体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラ切り	
96	土師器	皿	A	仏堂跡	平坦面上面包含層	9.0	1.65	5.85	内面～体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラ切り	
97	土師器	皿	A	仏堂跡	平坦面上面包含層	8.18	1.4	5.9	底面内面は仕上げナデ、体部内外側は回転ナデ、底面外側はヘラ切り、底径圧痕あり	
98	土師器	皿	A	仏堂跡	平坦面上面包含層	(9.45)		1.55	内面～口縁部外側はココナデ、底部外側はナデ	
99	土師器	皿	A	仏堂跡	平坦面上面包含層				外側は平行タキ、内面はナデ	
100	瓦器	碗	A	仏堂跡	平坦面上面包含層			5.8	内面・体部外側は多方向のヘラミガキ、底部外側は回転あり	
101	土師器	碗	A	仏堂跡	平坦面上面包含層				内面とも回転	
102	須恵器	碗	A	仏堂跡	平坦面上面包含層	(15.8)			内面とも回転ナデ	
103	須恵器	碗	A	仏堂跡	平坦面上面包含層			6.0	内面・体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラ切り	
104	土師器	碗	A	仏堂跡	平坦面上面包含層			5.1	内面・体部外側は回転ナデ、底部外側は回転ヘラ切り	

番号	器種	器形	地区	通稱	層	位	口 径	鉢 高	底 径	その他の法量	調 整 お よ び 備 考
105	土師器	碗	A	仏堂跡	平坦面前面包含層				(4.3)		内面～体部外表面は圓軸ナデ、底部外表面は圓軸余切り、内面にスリット有
106	土師器	皿	A	仏堂跡	平坦面前面包含層	(15.05)					底部内面はナデ、体部内外面はヨコナデ、底部外表面は不調整
107	土師器	小皿	A	仏堂跡	平坦面前面包含層	10.45	2.45	6.75			直線内面は仕上げナデ、体部内外面は圓軸ナデ、底部外表面はヘラ切り
108	土師器	小皿	A	仏堂跡	平坦面前面包含層	9.0	2.5	6.45			底部内面は仕上げナデ、体部内外面は圓軸ナデ、底部外表面はヘラ切り・ワラ状注意あり
109	土師器	小皿	A	仏堂跡	平坦面前面包含層	(8.2)	2.0 ¹	(6.05)			内面～体部外表面は圓軸ナデ、底部外表面は圓軸余切り
110	瓦盤	盤	A	仏堂跡	平坦面前面包含層				6.0		内外面とも黒化、内面～体部外表面はヘラミガキ、底部外表面は圓軸余切り
111	須恵器	杯	B	22号墳	狭道部床面	11.35	4.65				直前内面は仕上げナデ、体部は圓軸ナデ、底部外表面はヘラ切り後ナダ
112	須恵器	杯	B	22号墳	狭道部床面	11.45	4.5				狭道内面中央は仕上げナデ、底部内面～体部外表面は謹軸ナデ、底部外表面はヘラ切り
113	須恵器	杯	B	22号墳	狭道部床面	11.1	4.1				内面～体部外表面は圓軸ナデ、底部外表面はヘラ切り後ナダ
114	須恵器	杯	B	22号墳	狭道部床面	(10.4)	4.1				底部内面中央は仕上げナデ、底部内面～体部外表面は圓軸ナデ、底部外表面はヘラ切り、並み大きい
115	須恵器	台付碗	B	22号墳	狭道部床面	11.6	12.5	6.5			杯型内面～一杯部体部外表面は圓軸ナデ、底部外表面は謹軸ヘラケズリ、脚部は圓軸ナデ
116	須恵器	台付碗	B	22号墳	狭道部床面	8.7					杯型内面～一杯部体部外表面は圓軸ナデ、底部外表面は謹軸ヘラケズリ、脚部は圓軸ナデ
117	須恵器	長颈甕	B	22号墳	狭道部床面	4.72	14.75	6.15	瓶径10.7		内面～体部外表面中位は圓軸ナデ、体部外表面下位～瓶部外表面は手持ちヘラケズリ、脚部は圓軸ナデ
118	須恵器	杯B	B	22号墳	埴丘北東側御土	(13.3)	3.65				内面～体部外表面は圓軸ナデ、底部外表面は圓軸ヘラケズリ
119	須恵器	合付碗	B	22号墳	埴丘南側底						内面とも圓軸ナデ

写真図版

A
地区



A 地区 調査前



A 地区 全景

写真図版2

12号
墳



調査前



石室及び墳丘全景



墳丘列石（東側）



墳丘列石（西側）



石室全景



石室奥壁部 遺物出土状況

写真図版 4

12号墳



石室及び 遺物出土状況



石室（右側壁）



石室（左側壁）

12
号
墳



墳丘断面及び 列石出土状況



墳丘内 須恵器出土状況



周溝内検出 木棺墓

写真図版 6

13
号墳

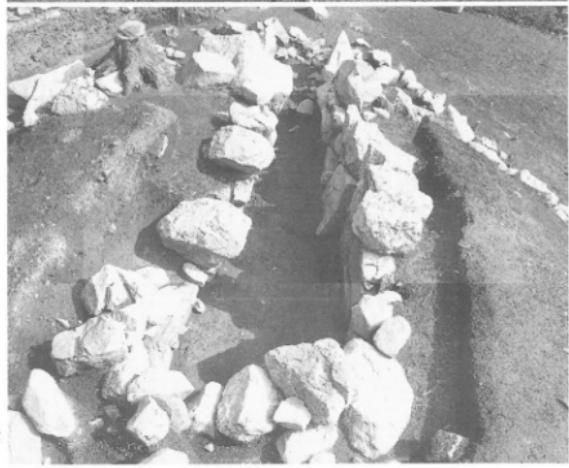




埴丘列石（西側）



埴丘列石（北側）



石室全景



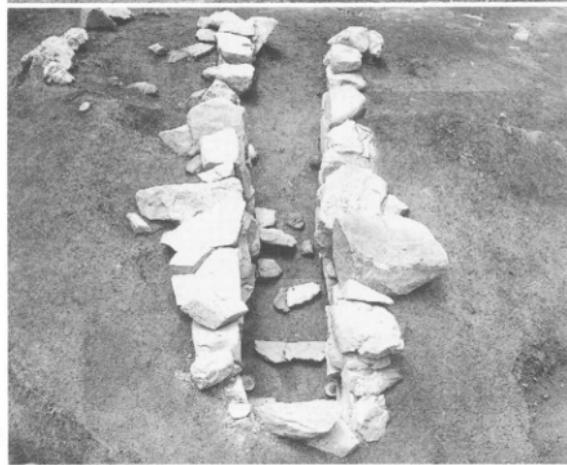
石室奥壁部 遺物出土状況

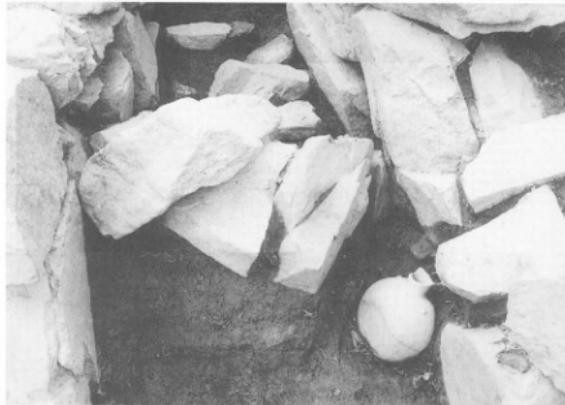


石室床面及び 遺物出土状況



遺物出土状況







写真図版12

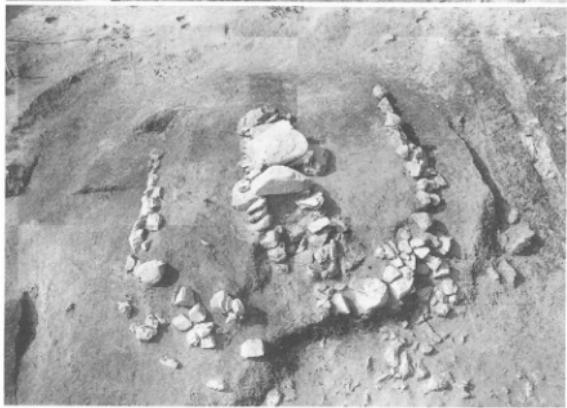
27
号
墳



調査前



埋没状況



石室及び墳丘全景



石室及び列石



列石（西側）



列石（東側）

写真図版14

27
号
墳



石室閉塞状況



石室全景



石室奥壁



石室（東側壁）



石室（西側壁）



遺物出土状況

写真図版16

27
号墳



遺物出土状況



墳丘断面



石室掘方



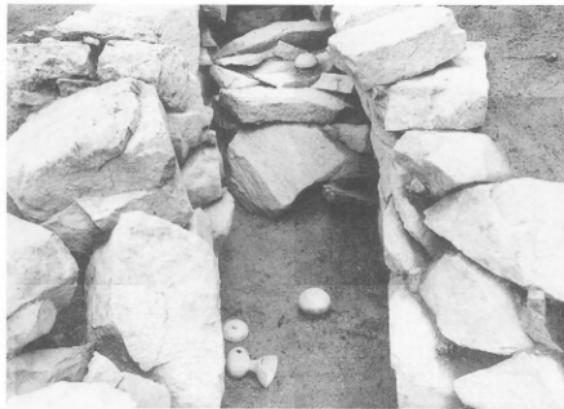
石室及び墳丘全景



石室閉塞状況



石室及び石棺



遺物出土状況



石室奥壁



石室（東側壁）



石室（西侧壁）



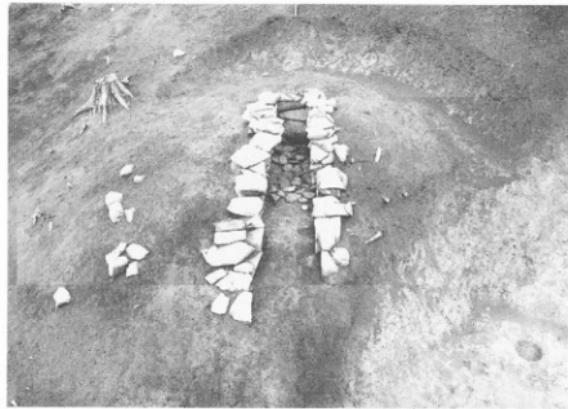
墳丘断面



36号墳 38号墳 39号墳 全景

写真図版20

29
号
墳



石室及び墳丘全景



石室閉塞状況



石室全景及び列石



遺物出土状況



石室奥壁



石室（東側壁）



石室（西侧壁）



塡丘断面



石室掘方



全景



(中段写真左右)
石室 遺物出土状況



石室北壁

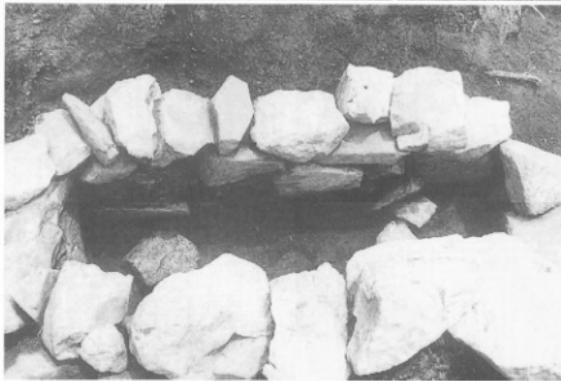
31
号墳



石室全景 西から



(中段写真左右) 南から



東側壁





柱穴Pit1



柱穴Pit2



柱穴Pit3



柱穴Pit5



柱穴Pit6



柱穴Pit7



斜面 石組（石垣）

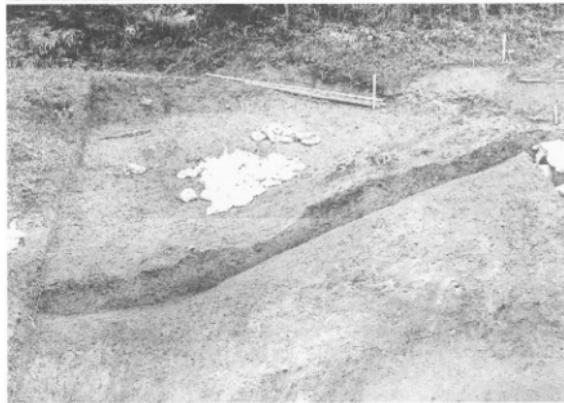
22
号
墳



調査前



石室及び墳丘全景



墳丘上層及び 周溝断面（西側）

写真図版28

22
号
墳



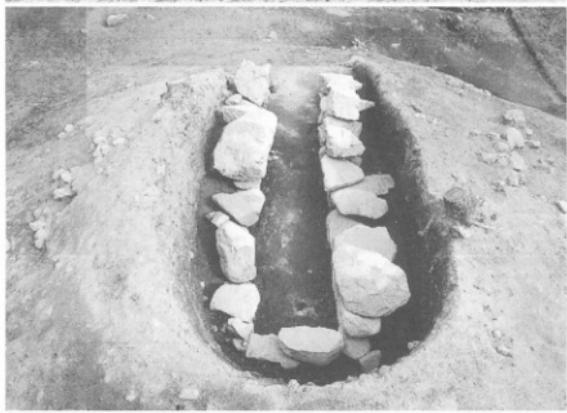
墳丘列石（東側）



墳丘据列石（西側）



墳丘据列石（南側）



22
号
墳



石室奥壁



石室（西侧壁）



石室（東側壁）



填丘断面



作業風景



地元中学生 トライヤー・ウイーク
(填丘測量)



調査風景



現地説明会



文化財審議議会 考古部会
委員视察

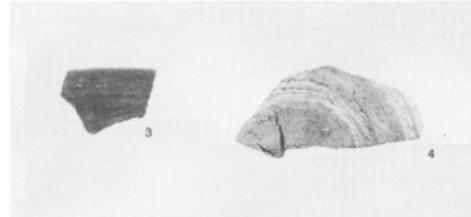
11号墳



19号墳



14号墳



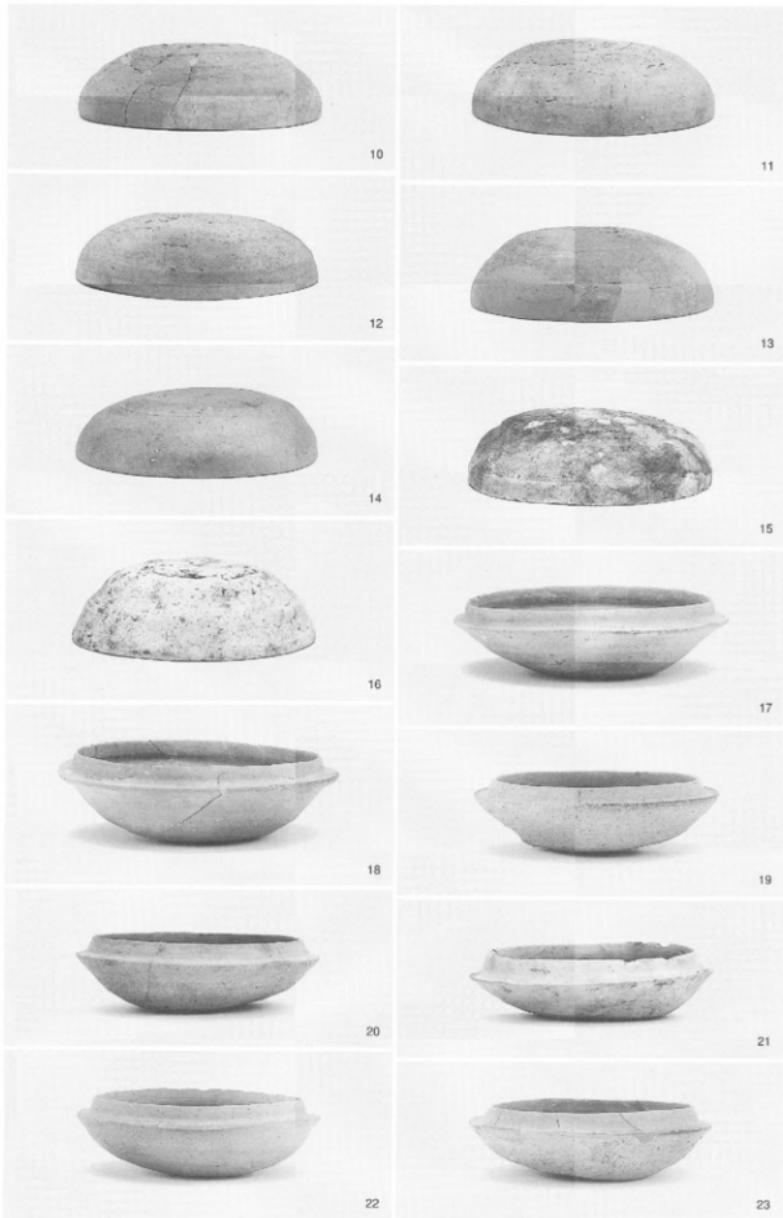
25号墳



写真図版34

12号墳出土土器
1

12号墳



12号墳



24



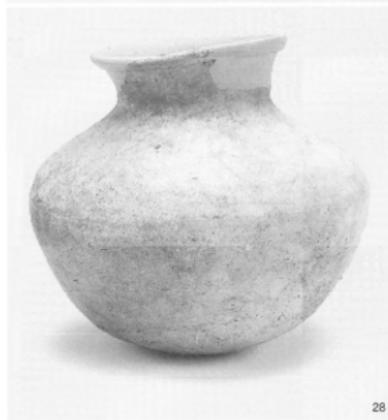
25



26



27



28



29

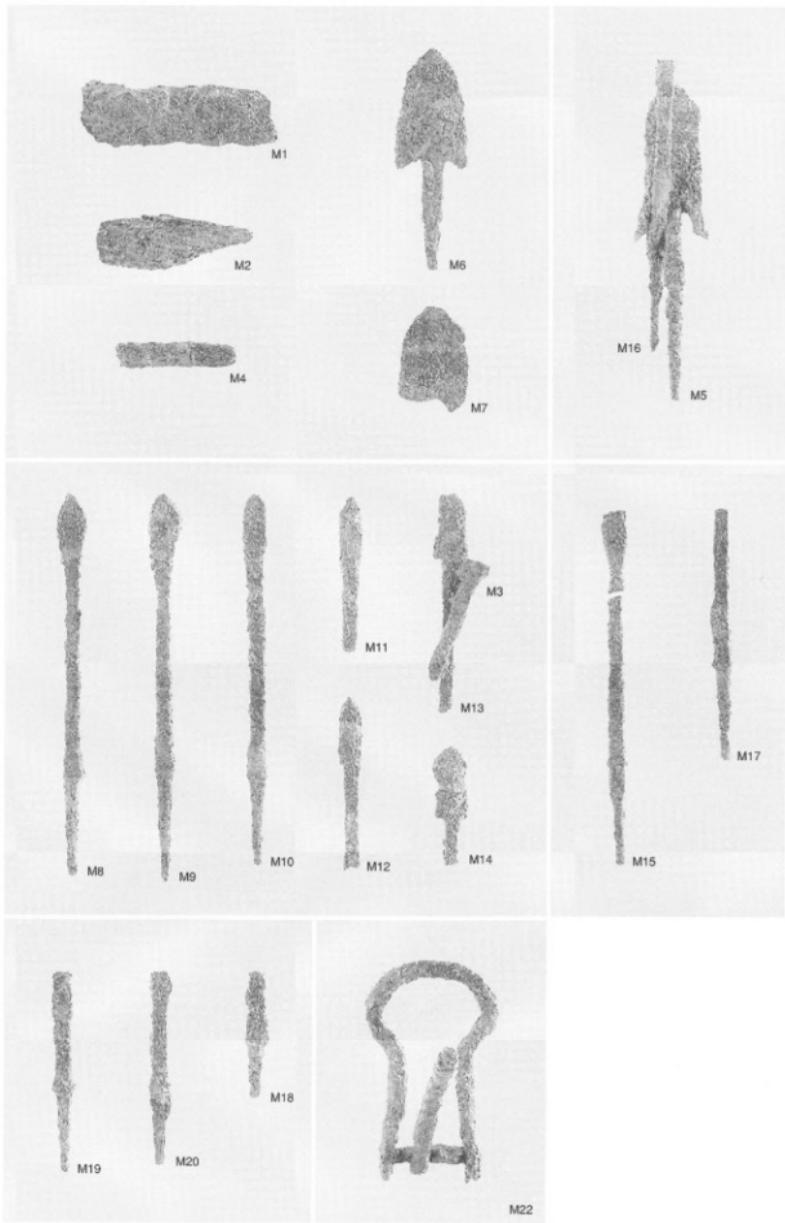


30

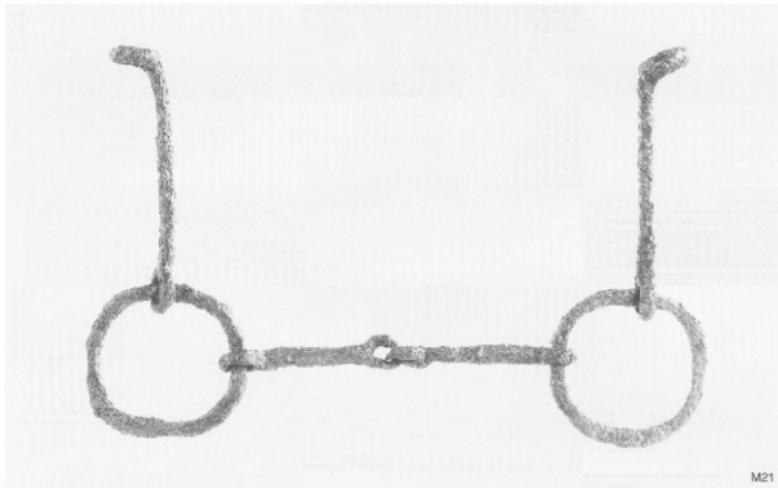
写真図版36

12号墳出土金属製品1

12号墳

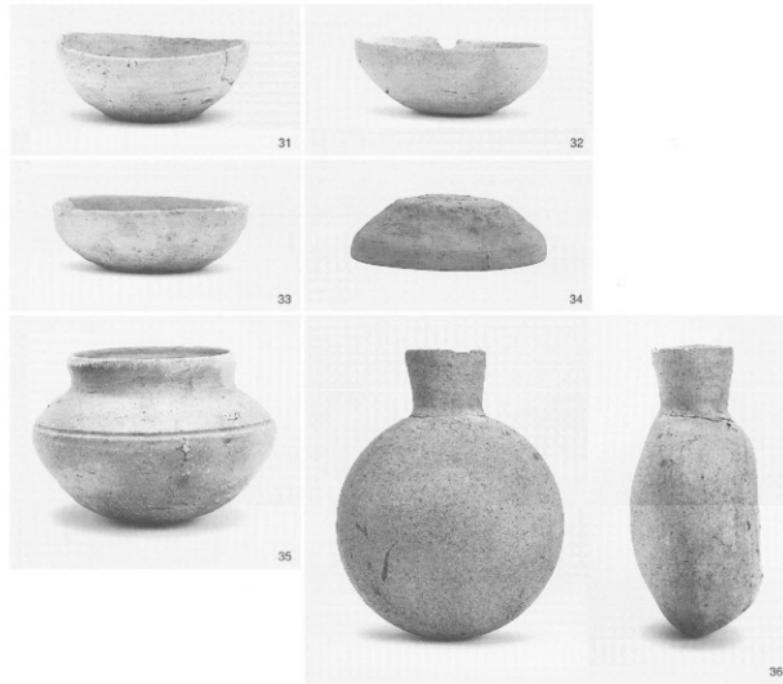


12号墳



12号墳出土金属製品2、
13号墳出土土器1

13号墳



写真図版38

13号墳出土土器2

13号墳



38



37



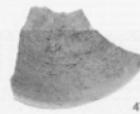
40



39



41



47



42



43



44



45



49



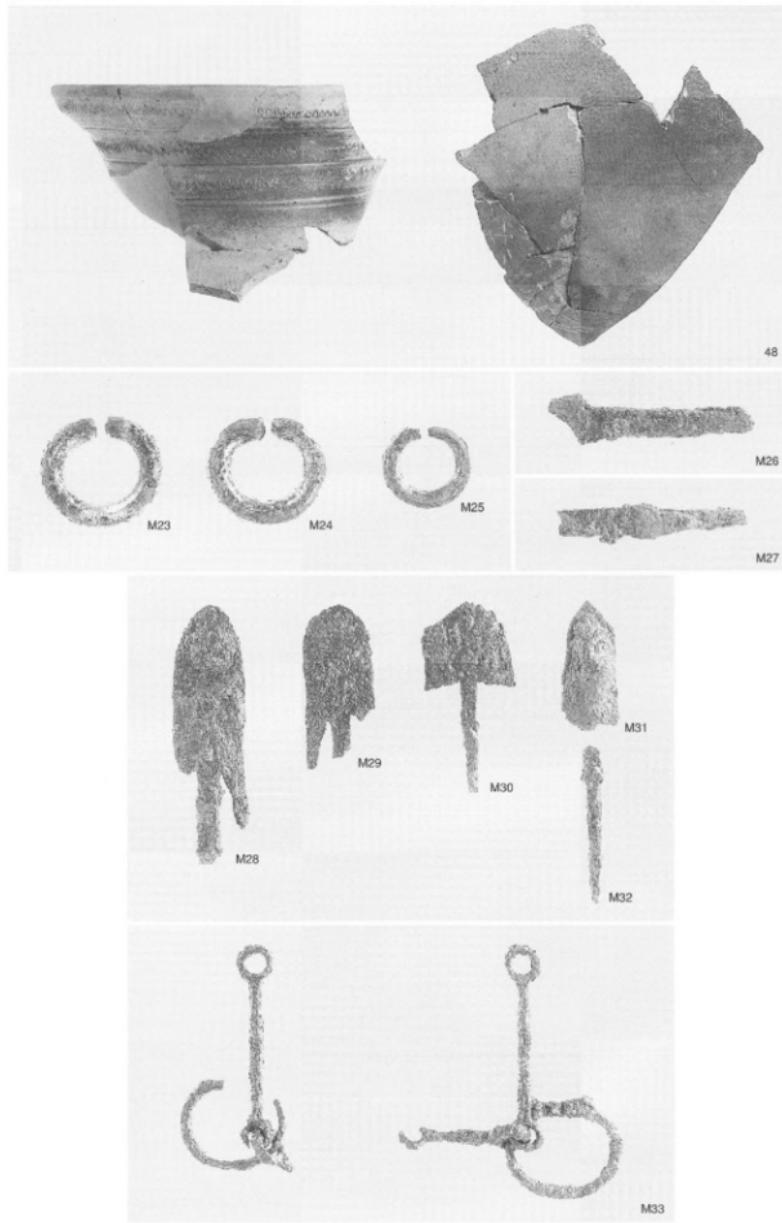
50



46

13号墳

13号墳出土土器3・金属製品



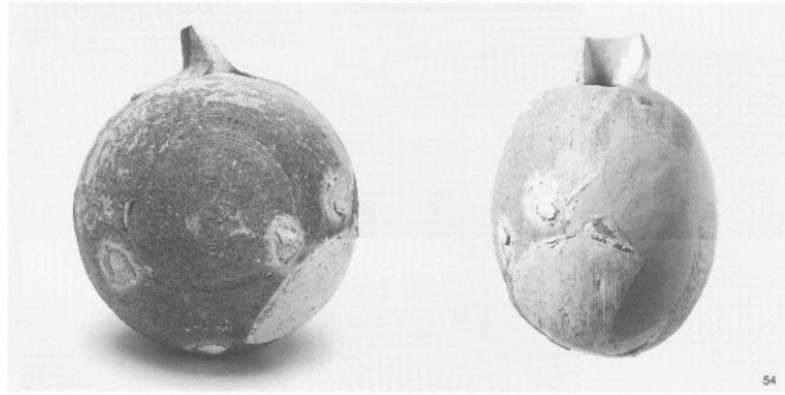
写真図版40

26号墳出土土器・金属製品

27号墳



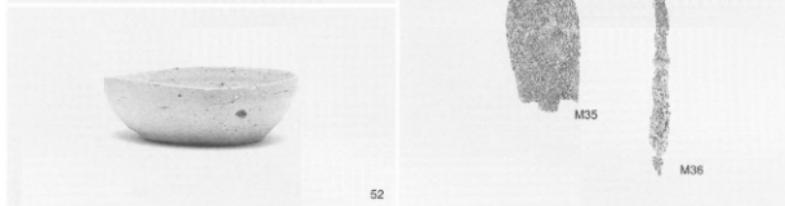
53



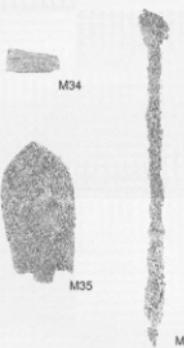
54



51



52

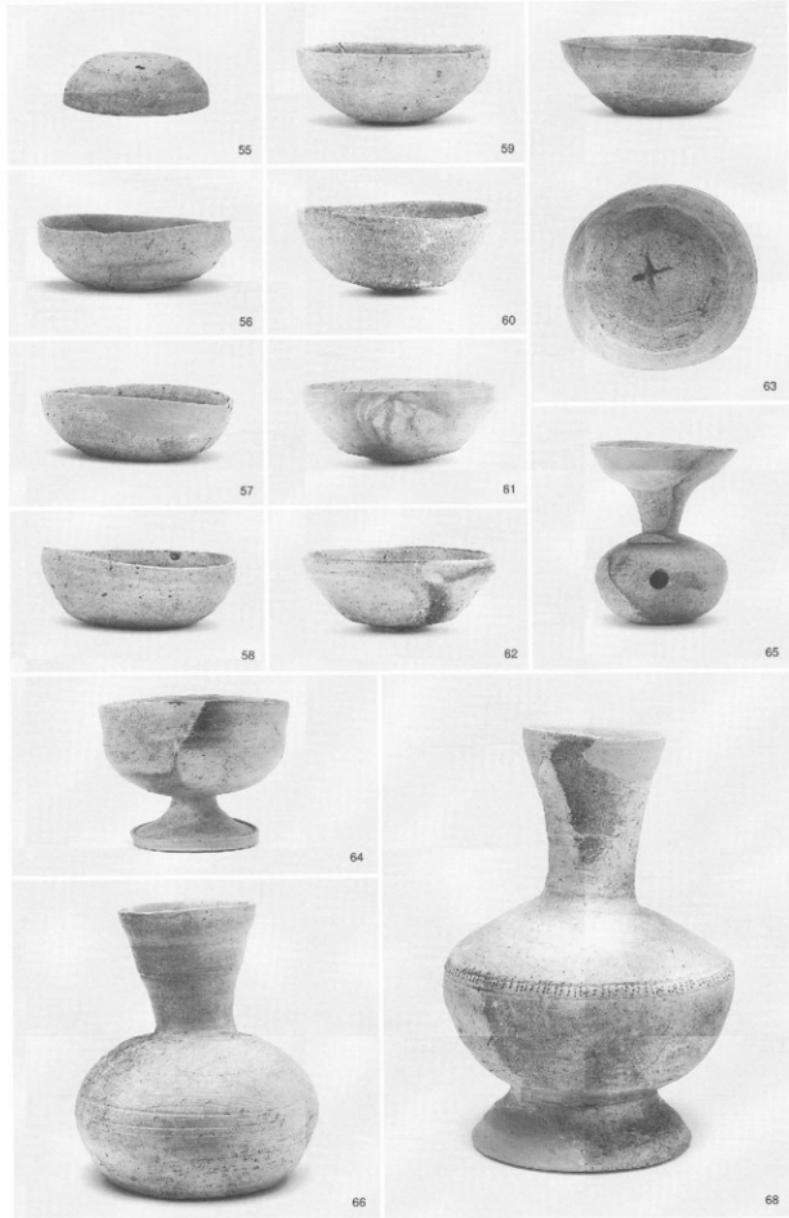


M34

M35

M36

27号墳



写真図版42

27号墳出土土器2・金属製品、
28号墳出土土器

27号墳



67



67



67



M37

28号墳



69



71

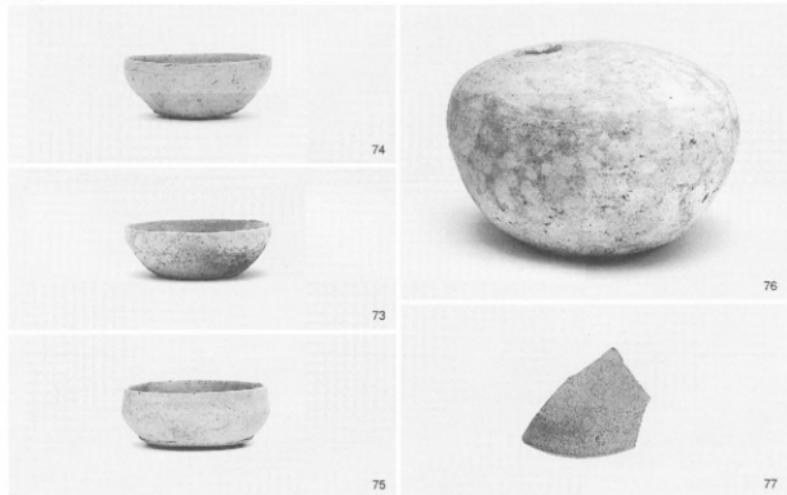


72



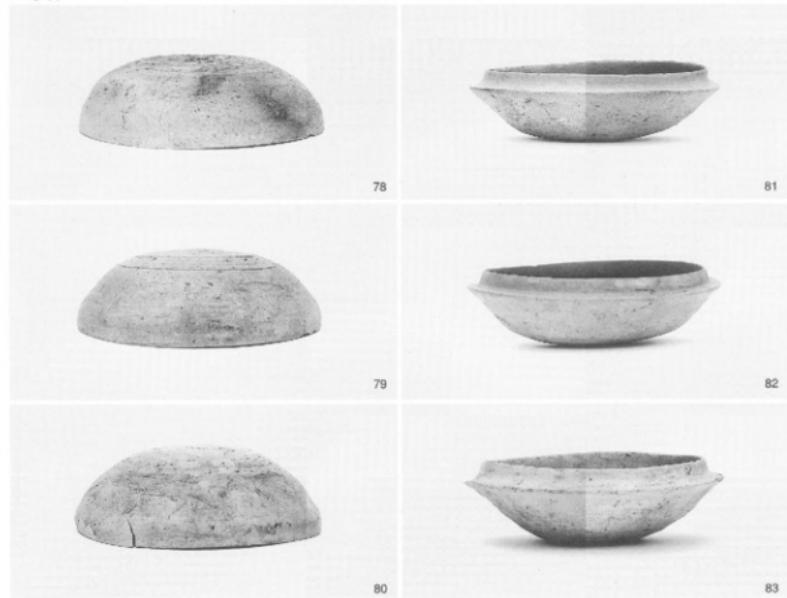
70

29号墳



29号墳出土土器、
30号墳出土土器 1

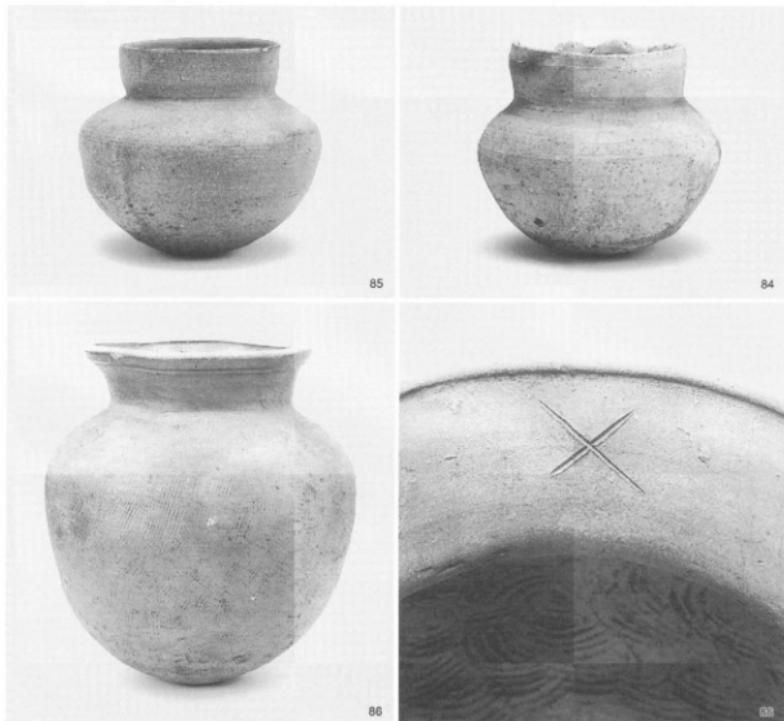
30号墳



写真図版44

30号墳出土土器2、
31号墳出土金属製品

30号墳

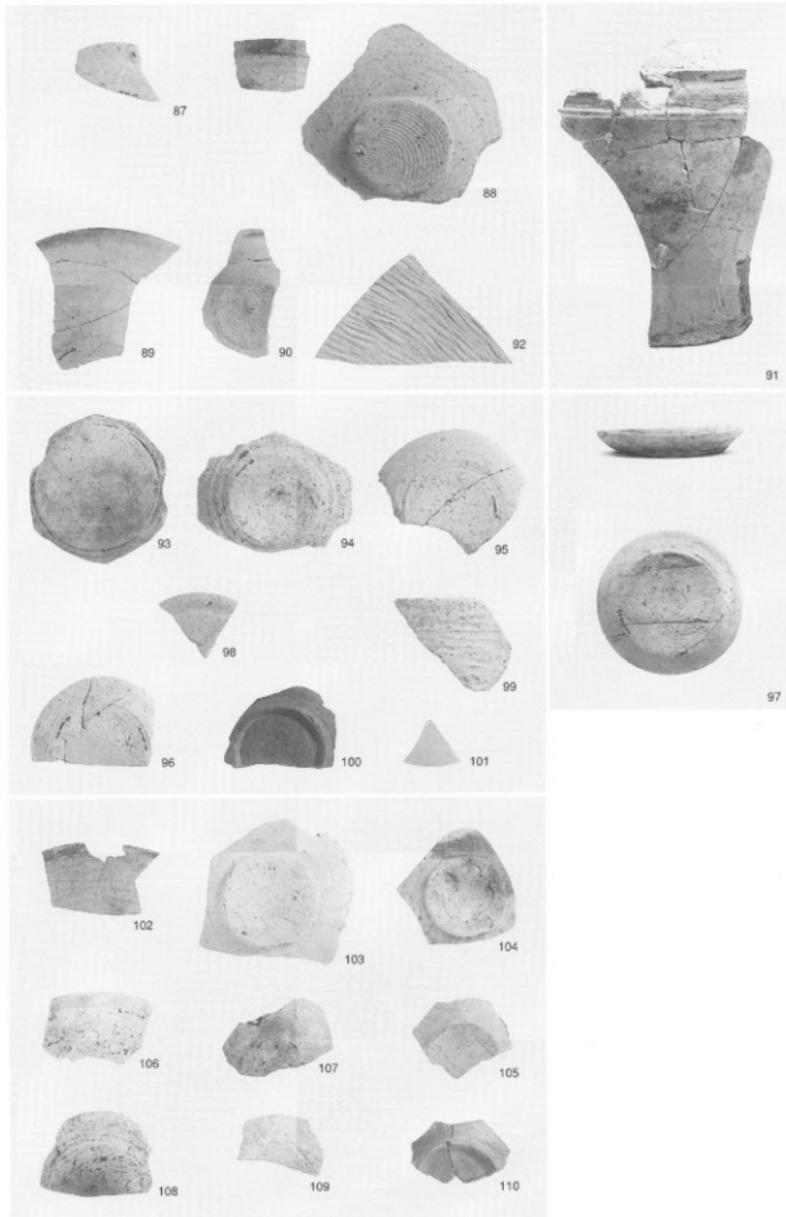


31号墳

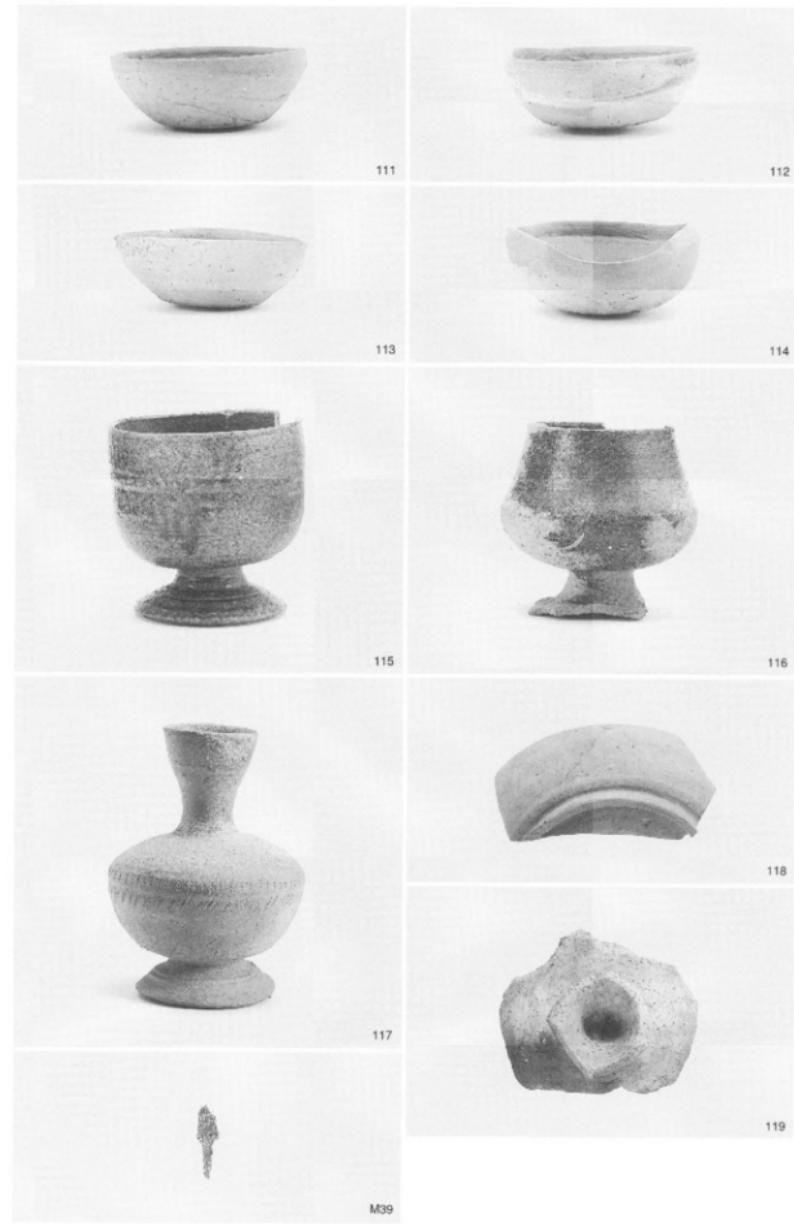


M38

仏堂跡



22号墳



報告書抄録

ふりがな	のさかおおたにこふんぐん							
書名	野坂大谷古墳群							
副書名	西大谷川災害関連緊急砂防事業に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告							
シリーズ番号	第282冊							
編著者名	大平茂・池田征弘							
編集機関	兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所							
所在地	〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号							
発行年月日	西暦2005年(平成17年)3月18日							
所収遺跡名 野坂大谷古墳群	所在地 兵庫県丹波市 山南町野坂	北緯 35°5'16"	東経 135°0'15"	コード		調査面積 20000m ² 30m ² 12.5m ² 1332m ²	調査原因 西大谷川災害 関連緊急砂防 事業	
				市町村 28223	調査番号 990310			調査期間 20002014
					2000172			20000710
					20000711			
					2000379			20010321
					2001009			20010518
	20010921							
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項				
墳墓跡	古墳時代後期	横穴式石室7基 竪穴式石室2基	須恵器・鉄刀・鉄鏃・ 馬具・耳環					
守院跡		掘立柱建物跡1棟 石垣	須恵器・土師器・瓦 器・白磁					

兵庫県文化財調査報告書 第282冊

野坂大谷古墳群

西大谷川災害関連緊急砂防事業に伴う発掘調査報告書

平成17年3月18日発行

編集 兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

〒652-0032 神戸市兵庫区荒田町2丁目1番5号

TEL 078-531-7011

発行 兵庫県教育委員会

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号

印刷 野崎印刷紙業株式会社

〒603-8151 京都市北区小山下総町54-5
